熊倉遺跡

——山棲み集落の探究——

1984

六合村教育委員会

調査担当

松島栄治

調査指導

能登健

洞口正史

坂口一

事務局担当

市村勝美

山本清司

報告書編集

市村勝美

山本清司

白根山麓と熊倉遺跡　　左後方が草津白根山　手前の開拓地が熊倉の集落

第二図版

▲熊倉の開拓地と熊倉遺跡
●印のところが9号住居址

◀熊倉遺跡の現状

▲7号住居址の凹地

▲ボーリング調査

▲凹地の測量

トレンチ調査▼

住居址の測量▼

第四図版

▲ 8 号住居址

◀ 2 号住居址　昭和36年群馬大学の調査
（東国古文化研究所提供）

▲9号住居址の全景

9号住居址　カマドとその周辺▶

住居址の発掘

▲8号住居址の発掘

▲9号住居址の発掘

◀昭和36年当時の熊倉遺跡
（雪の部分が住居址上の凹み
（東国古文化研究所提供）

ハンドオーガーボーリング調査

▲ハンドオーガーによる遺構確認調査

▲トレンチ発掘による結果の検証

地下レーダー調査

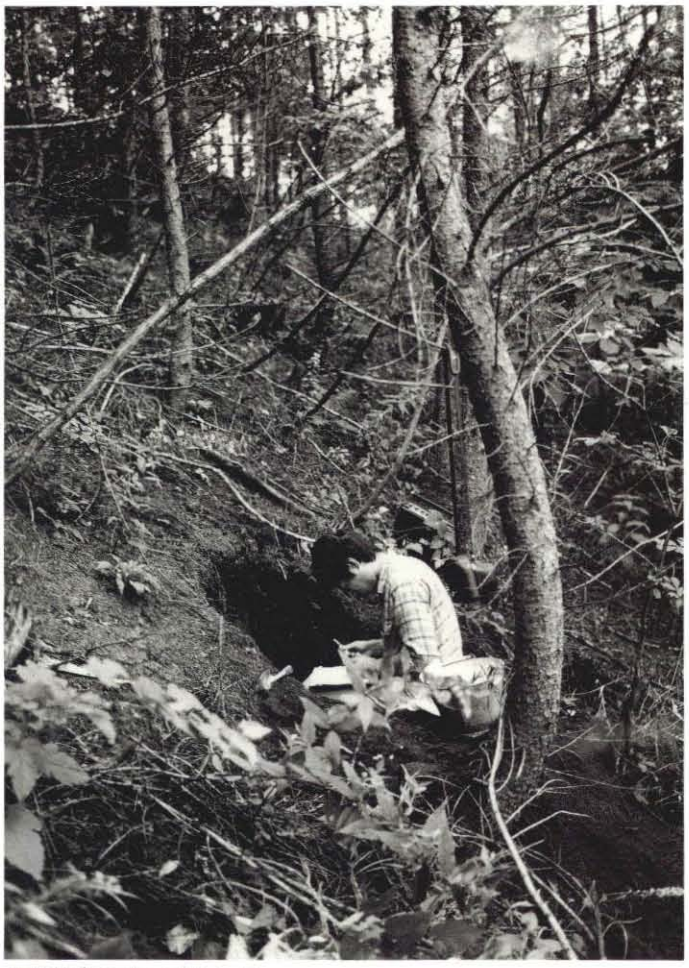
▲プロファイル測定

▲電磁波測定機器

火山灰分布調査

▲熊倉遺跡内の火山灰調査(新井房夫)

▲芳ヶ平湿原の露頭調査

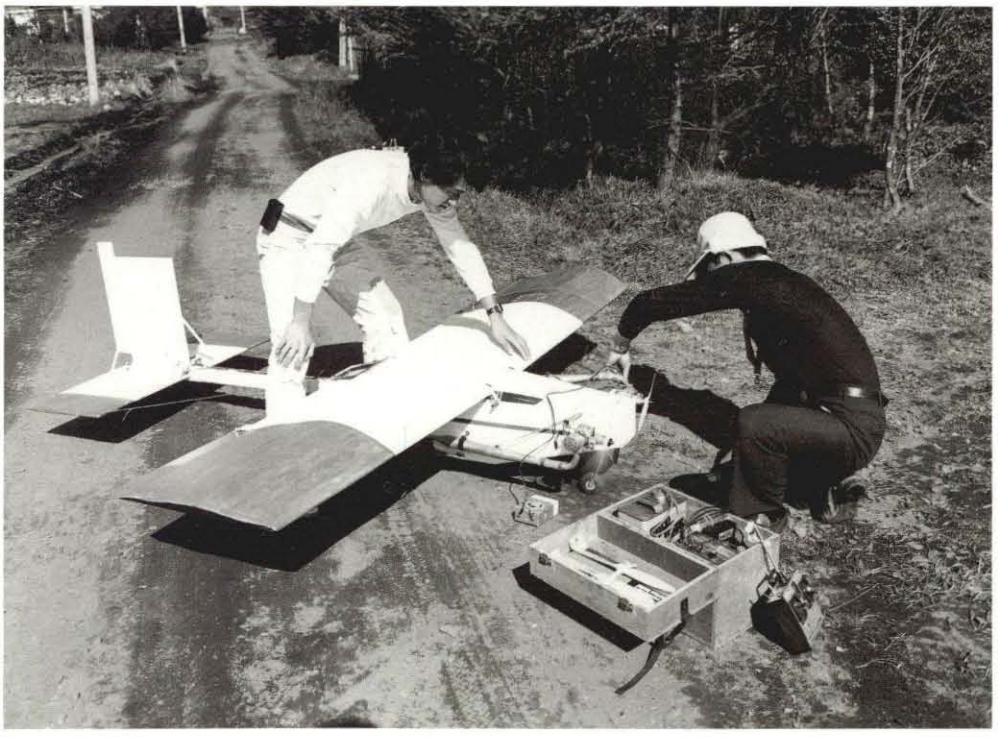


▲山林内のサンプリング

▲ 牧草地内のサンプリング

▼急傾斜地のサンプリング(藤原宏志)

模型飛行機による
空中写真の撮影

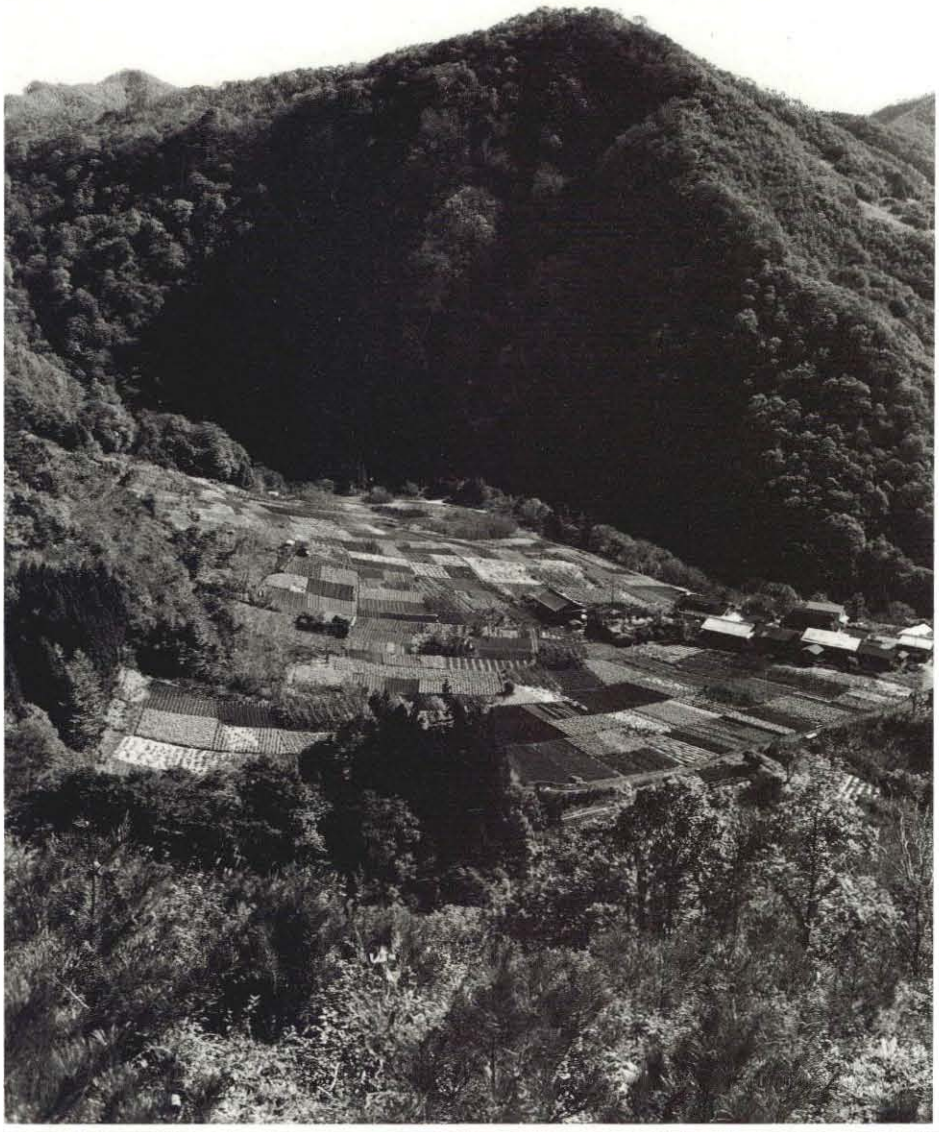


撮影前の整備点検▶

山間地のためフライトは
人力でおこなう ▶

発掘調査の終了日
現地説明会に集まった村民▶

第十図版



◀梨木の集落

▼穂刈りあとのヒエ畑(根広)

小倉の集落▶

根広の集落▶

世立の集落▶

序にかえて

熊倉遺跡は昭和36年の冬，群馬大学教授尾崎喜左雄先生によって発見され，昭和37年以降数次にわたって発掘調査がおこなわれました。当時は発掘調査の体制も不完全で，なみなみならぬ苦労があったと聞き及んでおります。それにもまして，大きな成果を得ることができ，熊倉遺跡を世に出されました。

今回の調査は，当然のことながら，尾崎博士の業績をふまえた新しい体制での発掘調査になっています。

どうして，このような場所に古代先人の集落ができたのであろうかという疑問に対して，総合的な分析を加えるべく体制を整えたのです。20年に及ぶ歳月は，科学の進歩を一躍発達せしめ，今や新しい方法で新しい解釈が加えられる時だと確信しております。遺跡の意味を知るための試行錯誤でもありました。新しく考案された器機を利用しての調査は大成功をおさめました。関連する科学の発達によって，従来見られなかった土中の鉱物や植物の調査も可能になったわけです。遺跡の理解を深めるための民俗調査も充実したものでした。

熊倉遺跡発掘調査の目的は，破壊されてゆく遺跡の保護のみにとどまらず，六合村の未来を見すえた，活力ある遺跡の保護を目ざしております。遺跡は永久に保護され，調査によって得られた新資料も生きた教材として末長く活用されることをせつに望む次第であります。

最後に熊倉遺跡の発掘調査に際しまして，終始あたたかい御支援，御教授をいただいた関係各位に対しまして深甚なる感謝をこめて本書の序にかえさせていただきます。

昭和59年３月

六合村教育委員会教育長　中沢　要平

本書は，昭和58年度文化財保存事業費補助金の交付を受けて実施した，群馬県吾妻郡六合村熊倉遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は六合村教育委員会が主体となり，昭和58年７月25日から８月31日までの間，約38日間で行なわれた。本事業は昭和59年３月31日で終了した。

熊倉遺跡 ——山棲み集落の探究——

目　　次

序にかえて　1

Ⅰ　発掘調査の軌跡 …… 5

1　熊倉遺跡の位置 …… 5

2　発見・群馬大学の調査 …… 5

3　保存への道のり …… 5

4　調査の方針と組織 …… 6

Ⅱ　白根山麓と熊倉遺跡 …… 7

1　火山山麓の地形 …… 7

2　熊倉遺跡の地形 …… 7

Ⅲ　調査の記録 …… 8

1　遺跡の層序 …… 8

2　遺構確認調査 …… 8

ハンドオーガーボーリング調査　地下レーダー調査　模型飛行機による空中写真撮影

3　住居址の発掘調査 …… 14

4　熊倉火山灰の分布調査 …… 18

5　プラントオパール分析 …… 22

Ⅳ　熊倉遺跡の全体像 …… 26

1　遺跡の拡がり …… 26

2　集落の成立 …… 26

3　熊倉火山灰の年代観 …… 27

4　黒ボク土と凹地の残存 …… 27

Ⅴ　山棲み集落の探究 …… 30

白根山麓・山棲み集落の考古学的調査　能登　健 …… 30

民俗学からみた熊倉遺跡　千葉徳爾 …… 36

Ⅵ　六合村と熊倉遺跡 …… 42

熊倉遺跡発掘調査の課題と展望　市村勝美　山本清司 …… 42

Ⅶ　おわりに …… 46

資　料 …… 47

コメント　民俗調査からみた六合村の風土と熊倉遺跡 …… 53

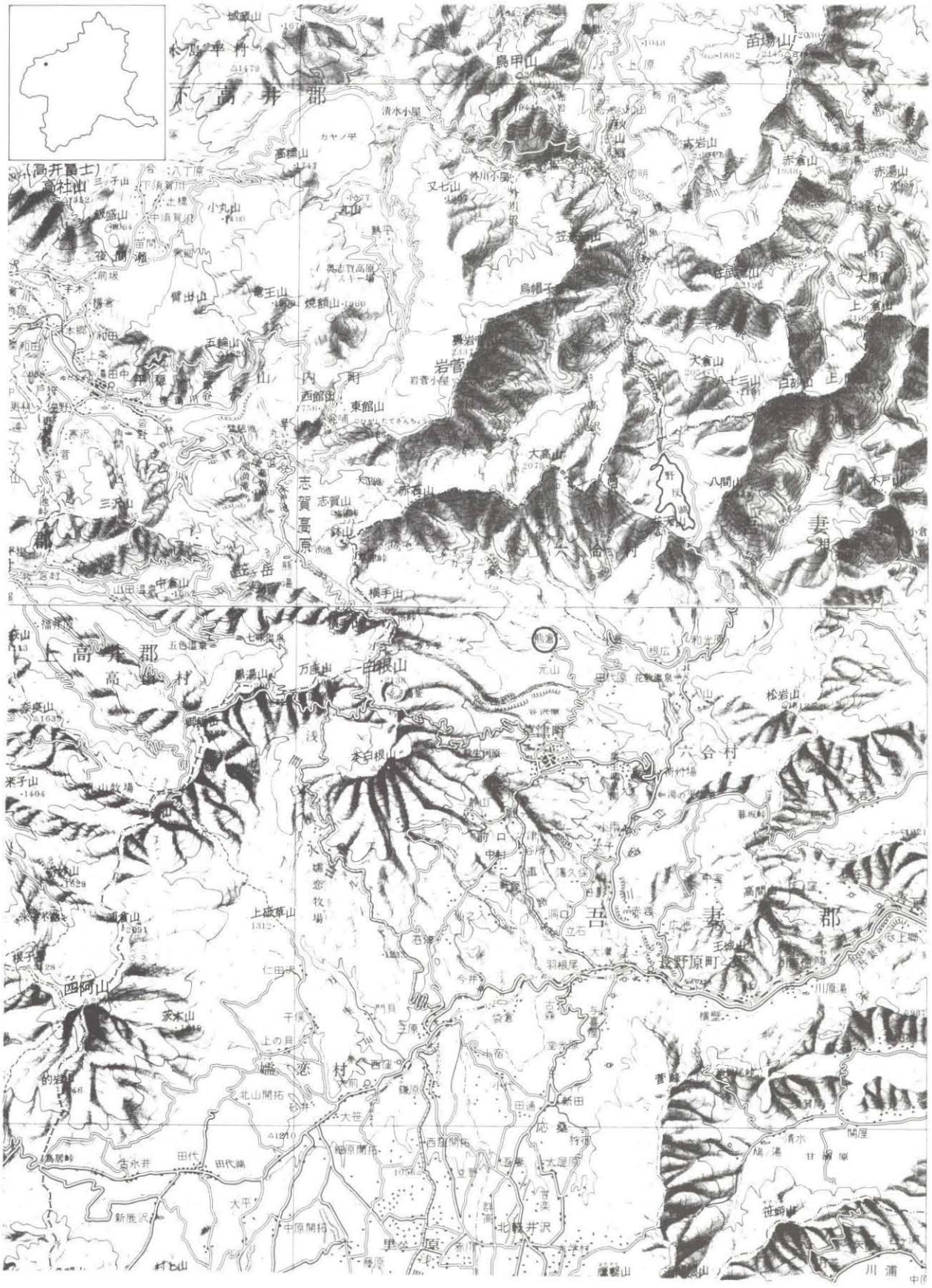


図1　熊倉遺跡の位置（1/ 250,000）国土地理院「長野・高田」使用　○印が遺跡

Ⅰ　発掘調査の軌跡

1　熊倉遺跡の位置

熊倉遺跡は，群馬県北西部に連なる山間地にあたり，吾妻郡六合村大字入山字松岩に所在する。この付近は南西に接する草津町とともに群馬県の最奥部に位置し，草津白根山の山麓地帯にあたる。また，上信越国境の2000m級の山嶺を境にして，長野県山ノ内町，栄村，新潟県湯沢町などにも接している。

草津白根山は標高2165mで，標高1000m前後の山麓地帯はきびしい山岳環境を呈している。とくに冬期の積雪は数メートルに及ぶこともある。一方，吾妻川の支流である白砂川水系は山麓を深く侵食し，そこここに切り立った断崖を形成させている。

遺跡の所在する入山地区は，県道津南秋山長野原線の開通以前は陸の孤島と称されて，平野部とは全く隔絶された地域でもあった。

現在，熊倉遺跡までの道のりには，二つのルートがある。ひとつは，国鉄長野原線から国鉄バスで六合村に入るもので，梨木から品木，田代原，元山を通過するものと，入山の花敷から根広，長平，小倉を至て熊倉へのコースである。もう一方は，草津町から旧群馬鉄山大沢を至て熊倉に至るコースである。どちらも，車で悪路を約50分の行程である。

2　発見・群馬大学の調査

昭和36年の冬に，群馬大学尾崎喜左雄教授は熊倉遺跡を訪れた。当時，尾崎博士は六合村教育委員会の招請を受けて，村内全域の埋蔵文化財調査を実施していた。

熊倉の地は，草津白根山の西麓にあたり，戦後の開拓農民によって開墾が進み，広大な農耕地が拓かれていた。この耕作地内にポツン，ポツンと凹地がみられ，その周辺には土器が散乱していた。付近にある入山小学校元山分校の先生が，このことに注意を払っており，尾崎博士の来村に際してこの報が伝えられ，現地調査が行われることになった。現地に立った尾崎博士は，一見してここが集落址であると判定し，散在する凹地は埋まりきらない住居址であると直感した。

研究室にもどった博士は，学生たちと綿密な調査計画を立て，翌37年の夏に第1回の発掘調査を実施した。調査は，その後も継続され，昭和38年8月と同39年8月の3次に亘り，住居址6軒が調査されている。正式な調査報告は未刊のままであるが，住居址の年代は9世紀末から10世紀初頭にかけてのものとされている。

この熊倉遺跡の発見は，標高1000m以上の高冷地の古代集落という地域性と，住居が埋まりきらずに凹地として残っているという特殊性によって一躍クローズアップされた。

3　保存への道のり

群馬県北西部の山間地は，ここ十数年来にわたってて高原キャベツの栽培が盛んに行われている。特に浅間山麓が中心であるが，近年に至って白根山麓にも及ぶようになった。昭和56年には熊倉遺跡の地でも，栽培が行われることになった。高原キャベツの栽培は，大型トラクターによる深耕が行われるとともに，雨水による土砂流失を防ぐための耕作面の調整が行われる。この際に，熊倉遺跡の凹地はことごとく埋めつくされてしまった。このことは，地元の文化財パトロール員によって群馬県教育委員会に報告されるとともに，六合村教育委員会は県教育委員会と協議の末，保護措置を講ずるための調査を実施することになった。

4　調査の方針と組織

熊倉遺跡における昭和56年度以降の発掘調査の前提は，遺跡保存を目的にした遺構分布範囲の確認調査にあった。また，保存計画策定にあたって次の資料を得ることも重要な目的であり，次の各テーマを設定した。

①熊倉遺跡の規模および集落の存続年代の確定

②熊倉火山灰の給源とその分布域の調査および降下年代の確定

③熊倉遺跡の性格に関する資料の収集活動

1）住居址の発掘調査

2）白根山麓における遺跡分布の分析

3）山間部集落の生業を中心とした生活復元

4）民俗学的方法による遺跡の性格追究

④遺跡確認方法の実験的研究

第１次調査

期　　間	昭和56年9月10日～昭和56年9月25日	
調査内容	凹地部分の遺構確認・地層観察調査	
発掘担当	群馬県教育委員会	能登　健
調 査 員	群馬県教育委員会	洞口正史
	六合村教育委員会	市村勝美
	〃	山本清司
	〃	山田幾久
	立教大学文学部(学生)	関口功一
調査協力	群馬大学	新井房夫

第２次調査

期　　間	昭和57年8月1日～昭和58年3月31日	
調査内容	遺跡の範囲確認調査・住居址発掘調査・熊倉火山灰の分布調査	
発掘担当	県立前橋第二高校	松島栄治
調査指導	群馬県教育委員会	能登　健
	〃	洞口正史
	群馬県埋蔵文化財調査事業団	坂口　一
調 査 員	六合村教育委員会	市村勝美
	〃	山本清司
	〃	西山　茂
	都立大学大学院(院生)	早田　勉
	新潟大学(学生)	花積哲夫
	群馬県立女子大学(学生)	中村幸子
調査協力	火山灰地における遺跡調査研究会(県文化財保護課長)	森田秀策
	火山灰地における遺跡調査研究会(京都市埋文研究所)	田辺昭三
	群馬県埋蔵文化財調査事業団	小島敦子
	〃	斉藤利昭
	応用地質調査事務所	遠藤信夫
	〃	坂山利彦

第３次調査

期　　間	昭和58年7月25日～昭和59年3月31日	
調査内容	遺跡の範囲確認調査・住居址発掘調査・熊倉遺跡の生産域確認(焼畑)調査・山棲み集落論に関する民俗調査	
発掘担当	県立前橋第二高校	松島栄治
調査指導	群馬県教育委員会	能登　健
	〃	洞口正史
	群馬県埋蔵文化財調査事業団	坂口　一
調 査 員	六合村教育委員会	市村勝美
	〃	山本清司
	群馬県立女子大学	中村幸子
調査協力	明治大学	千葉徳爾
	宮崎大学	藤原宏志
	〃	杉山真二
	東京大学大学院(院生)	早川由紀夫
	都立大学大学院(院生)	早田　勉
	群馬県埋蔵文化財調査事業団	小島敦子

（市村勝美・能登　健）

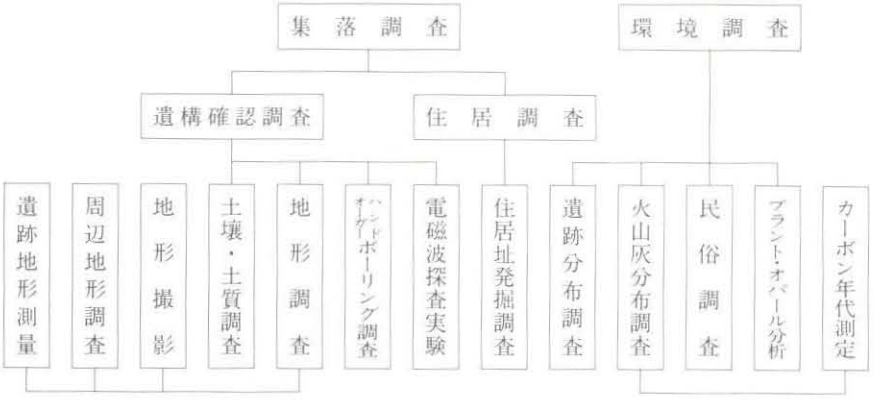


表１　熊倉遺跡調査項目分類表

II 白根山麓と熊倉遺跡

1 火山山麓の地形

草津白根山麓は，新第三紀から更新世にかけての火山岩類を基盤にしており，山麓一帯には様々な火山地形が観察される。熊倉遺跡の立地する地帯は，このうちの横手山熔岩を基層にしており，表面にはローム層が被覆している。この付近一帯の標高1000m近くのところには品木原・大原・田代原・谷沢原などと呼ばれる比較的広域な平坦地が分布するが，これはローム層下位に礫層がみられる点から，かつての河岸段丘地形であることが判る。しかし，現在では，白砂川本流との比高差は300m にもおよび，支流でも下向侵食が進行しており，とり残された河岸段丘は崩壊を繰り返しつつ，現在では典型的な山麓地形と化している。

2 熊倉遺跡の地形

熊倉遺跡は，前述の河岸段丘上に立地している。白根山麓の傾斜が標高1200m前後のところで，河岸段丘地形に変化している。段丘面は西にむかってゆるやかな傾斜をしているが，台地中央ではあまり斜度を感じさせない。

熊倉の台地は，ガラン沢と元山川(長笹川)によって南北を分断されている。両河川は台地末端の小倉付近で合流しているために，とり残された台地は三角形を呈している。遺跡の立地する地点は，台地中央部にあたり，標高1120m前後である。熊倉遺跡の居住域は，台地内にある浅い谷地に接してある。この谷は，表流水によって侵食を受けたものと考えられるが，かつて谷頭では小規模な湧水点があったということである。六合村に分布する河岸段丘のうち湧水点のあるものは熊倉の台地のみである。

このような白根山麓の平坦地は，そのほとんどが現在の集落が形成されていない。これは，生活水の確保が得られないことと，一面の黒ボク土地帯であり，農耕地には適さないことに起因している。熊倉遺跡に近接する現在の集落は開拓集落を除くと，小倉，長平などがあり，いずれも台地下の傾斜地にあたっている。熊倉遺跡の台地は，台地上に湧水がある点で戦後の開拓が入っているが，古代集落の成立にもこの点が関連するものと考えられる。

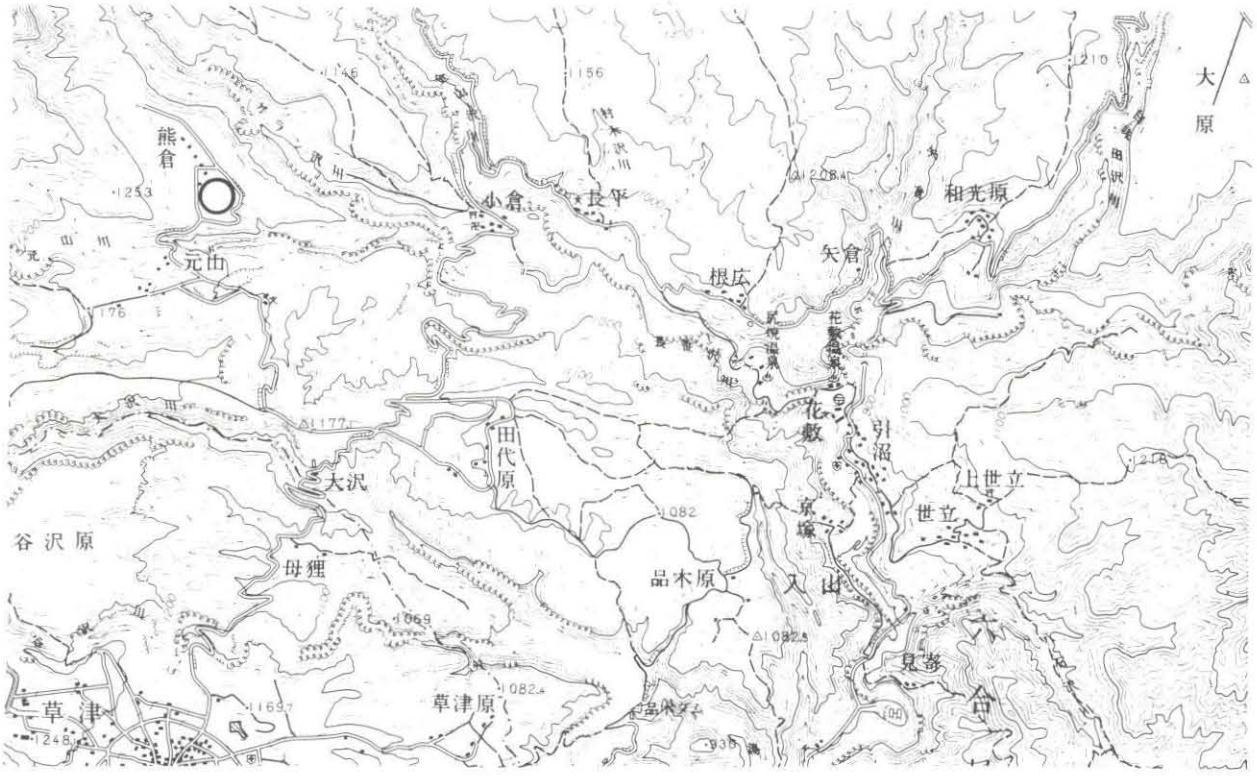


図2 熊倉遺跡と周辺の地形(1/50,000)国土地理院「草津」使用 ○印が遺跡

1　遺跡の層序

熊倉遺跡はローム層上に分厚い黒ボク土が堆積している。地元ではこの黒ボク土をノッポ土・ノボウなどと呼んでいるが，この呼称は地味のやせた土地をも意味しており，農耕不適地の代名詞ともなっている。

熊倉遺跡では平均１ｍ前後の堆積をみるが，介在するテフラ層などを手がかりにして分層を試みている。以下各層位ごとに土壌の概要を記述する。

第Ⅰ層　表土層，耕作などによりやや灰色がかった黒ボク土である。住居址上では厚く堆積するが，平均25cmの堆積である。

第Ⅱ層　黄褐色の降下火山灰層である。遺跡内では平均５～10cmの堆積である。火山灰分布調査の結果白根山給源であることが判明しKu-bと命名された。しかし，このテフラが，給源火口からの一次降下か，二次的なものかについての結論は出ていない。

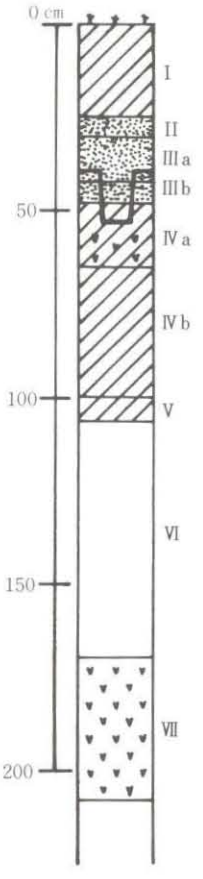


図３　熊倉遺跡の基本土層

第Ⅲ層　やや褐色味を帯びた黒ボク土である。混入物のないⅢa層と軽石粒子の混入の目立つⅢb層とに分層される。Ⅲa層とⅢb層の厚さは地点によって異なるが，Ⅲ層は平均して20cm前後の厚さである。Ⅲb層に介在する軽石粒は白根火山給源と考えられ，給源近くでは軽石を混在させた黄褐色火山灰となっている。Ku-aと命名した。なお，熊倉遺跡の住居址はⅢa層中に掘り込み面（当時の生活面）があると考えられる。

第Ⅳ層　Ⅰ層，Ⅲ層と同質な黒ボク土であるが，黒色味が増している。石粒を含むⅥa層と，混入物のないⅣb層に分層される。軽石は肉眼でも容易に判別ができ，Ⅲb層内の軽石混入はⅣa層の影響と考えていたが，鉱物分析の結果，これは浅間火山給源のものであることが判った。層位的に浅間ＣかＤ層にあたる。

第Ⅴ層　Ⅰ～Ⅳ層の黒ボク土と下位にあるローム層との漸位的変化を見せる層である。

第Ⅵ層　関東ローム層

第Ⅶ層　小豆大の軽石層。嬬恋降下軽石層でＹＰｋと称されている。　（能登　健）

2　遺構確認調査

熊倉遺跡の調査は，ここに存在する竪穴住居址の保存措置に関する資料を得ることが所期の目的の一つである。保存を前提とした遺跡調査の場合，発掘によって遺構を明らかにし，その資料に基づいて遺構を復元する方法がある。これは古墳や寺院址などの保存整備に用いられることが多いが，竪穴住居を主体とした集落では発掘が遺跡の現状を大きく改変することになり，遺跡の資料を得ることが遺跡の現状を失うという矛盾をもつ。そこで，竪穴住居の平面的な分布状況を発掘以外の方法で明らかにするために，ハンドオーガーボーリングと電磁波レーダーを用いて遺構の確認調査を実施した。ハンドオーガーは遺構に直径10cmの穴を穿つだけで済み，電磁波レーダーでは地下の遺構に一切の物理的な損傷を与えないで済む。この方法で遺構の分布状況が的確に把握できるとすれば，発掘以外の手段で考え得る最良の方法であると考えられた。とはいえ，ハンドオーガーによる遺構確認調査はローム台地上に立地する遺跡での実例しかなく，電磁波レーダーとともに黒ボク土を主体とした遺跡での成果については未知であった。

ハンドオーガーボーリング調査　ハンドオーガーとは，手動でビット（刃先）を土中に埋込みながら土壌資料を採取する器械である。同様な機能は従来から用いられているボーリング棒にもあるが，利点は地層の各層位をそれぞれ確認でき，層位順に地表からの深さを計測できることにある。回転によってビット先端の刃が土を削り，削られた土はビットの中に溜る。ビットが詰れば引き上げて土を観察して捨

て，同じ作業の繰り返しで掘進する。一般に５～６回の繰り返しで１ｍの深さを掘進でき，ロッドを継ぎ足すことによって数ｍの調査が可能である。

このハンドオーガーを用いて遺構を確認するには，遺構の凹みを確認する直接的方法と，火山灰層を利用する間接的方法とがある。遺構（主に住居址）がローム層などの基盤層を掘り込んで構築していた場合，住居床面と自然堆積層との基盤層のレベルが異なる（図４－１）。地表面から基盤層までの深さを計測し，住居床面と自然堆積層上面とのレベル差の比較によって遺構の所在を確認するのが直接的方法である。火山灰層を利用する間接的方法には，次の二つのケースが考えられる。その一つは遺構の埋没過程に火山灰の堆積があった場合である（図４－２）。直接的方法と原理は同じであるが，地表面から火山灰層までの深さを計測し，遺構埋没土中と自然堆積層中の火山灰層のレベルを比較することによって間接的に遺構の所在が確認できる。二つ目は火山灰層の堆積後に遺構が構築された場合である（図４－３）。遺構の所在する部分は遺構を構築する際に既に火山灰層が除去されているので，火山灰層の有無を確認することによって遺構の所在を確認できる。但し，この場合は火山灰層が耕作などによって部分的に攪乱されることがなく，遺跡の全域に保存されている場合だけに限定される。

ところで，熊倉遺跡では昭和36・37年に群馬大学によって平安時代の竪穴住居６軒が調査されていた。この時の所見によると住居はローム層を10cm前後しか掘り込んでおらず，住居床面と自然堆積ローム層とのレベルの対比だけでは遺構を明確に確認し得ないことが予想された。一方，ハンドオーガー調査に先行したテストピットによって，標準土層中に層厚10cm程のローム質火山灰層の存在を確認していた。この火山灰層は熊倉遺跡第二次の火山灰分布調査によって，草津白根山系を給源とする可能性が強いとされたもので，火山灰層を利用した間接的な遺構確認の資料となり得ることが予想された。したがって，ハンドオーガー調査は住居床面と自然堆積層のレベ

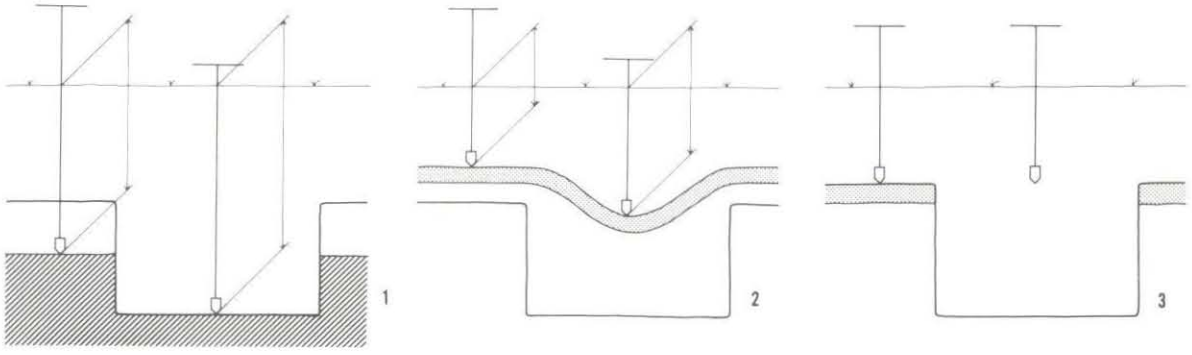


図４　ハンドオーガーボーリング調査の原理

写真１　ハンドオーガーボーリング

写真２　同調査風景

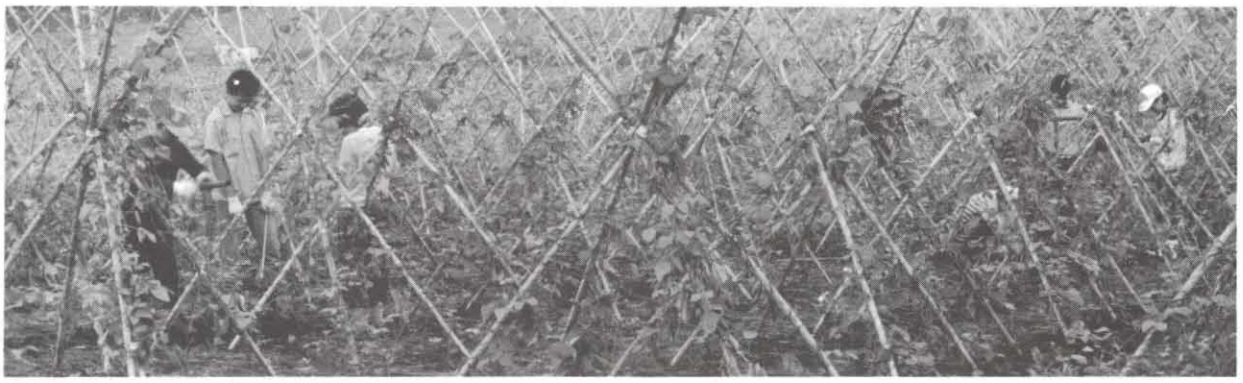


写真3　ハンドオーガーボーリング調査風景

ルを対比する直接的方法と，この火山灰を利用する間接的方法とを併用して実施することに決定した。なお，平安時代の竪穴住居を一辺3～5mと想定してボーリング間隔は4mとし，火山灰層とローム層までの深さを計測した。

ハンドオーガー調査の後，ハンドオーガーによる遺構確認の精度を確認するために，遺構が所在すると考えられる箇所にトレンチを設定して遺構の有無を確認した。昭和57年度の第二次調査(ハンドオーガー調査としては第一回)で試験的に実施した調査の結果は表2のとおりである。トレンチ調査の結果，設定した6箇所のトレンチのうち3箇所から住居を検出し，残りの3箇所は推定を誤った。推定を誤った原因は二つあると考えられる。その一つは，表2のローム層レベルにみるように，熊倉遺跡の住居床面はローム層を僅かしか掘り込んでおらず，住居床面と自然堆積層のローム層レベルを対比する直接的方法が有効な手段とはなり得なかったことである。原因の二つ目は，間接的方法に利用した火山灰層の誤認である。住居内に堆積した火山灰層は住居が埋没する過程で雨水などの影響を受けて，自然堆積層中の新鮮な火山灰層とは視覚的に異なる場合がある。ローム漸移層が住居覆土内の Ku-b 火山灰に近似した色調を示していたため，ローム漸移層を火山灰と誤認し，火山灰の計測値を深く出す結果となった。

以上，トレンチ調査結果の分析は，ハンドオーガーの成否が地層の条件と深く係わることを示唆している。熊倉遺跡の住居は基盤層であるローム層を深く掘り込んでいないため，遺構を確認するための重要なポイントはローム層のレベルを比較する直接的方法にはなく，むしろ火山灰層にあることが判明したのである。火山灰層を他の土壌と誤認することなく識別してそのレベルを計測し，この資料にローム層レベルを補足して検討すれば，熊倉遺跡での遺構確認調査は高い精度の資料が得られると考えられる。この分析結果に基づいて，調査区域の全域に約1,100本のボーリング調査を実施した。調査の結果は図5のとおりである。　　(坂口　一)

トレンチ番号	推定地点のレベル		周囲のレベル		予　測	試掘結果	判　定
	火山灰層	ローム層	火山灰層	ローム層			
No. 1	20 cm	130 cm	10 cm	120 cm	住居と推定	遺構なし	推定誤り
No. 2	42	110	10	120	〃	住居検出	推定どおり
No. 3	50	85	15	85	〃	〃	〃
No. 4	65	85	15	90	〃	遺構なし	推定誤り(火山灰を誤認)
No. 5	ボーリングにより直接焼石を検出				〃	住居検出	推定どおり
No. 6	40	100	15	90	〃	遺構なし	推定誤り(火山灰を誤認)

表2　トレンチ調査結果表

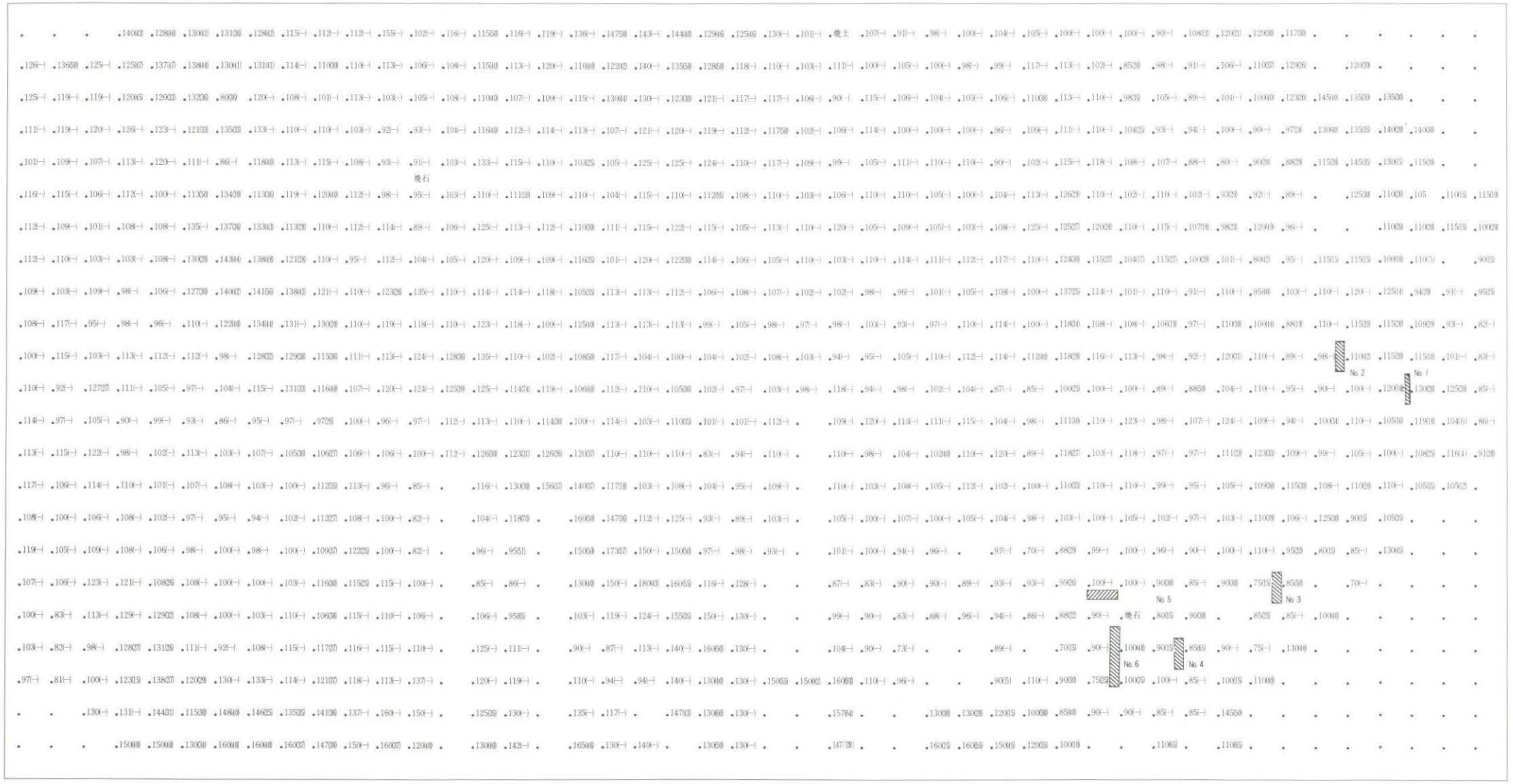


図5　ボーリング配点図

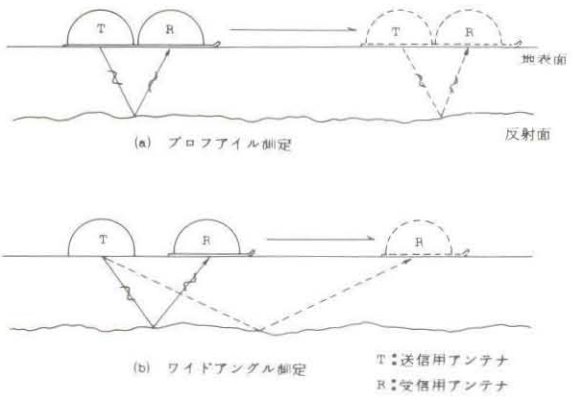
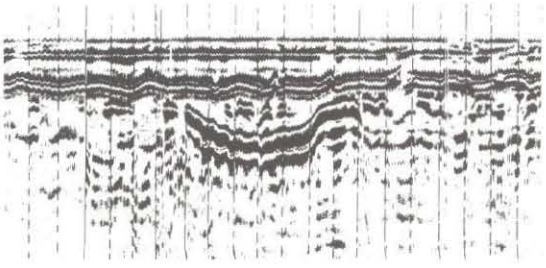


図6　地下レーダーシステムの測定法



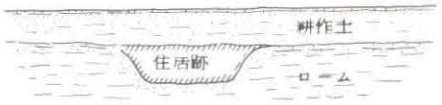


図7　地下レーダーによる住居跡確認の例

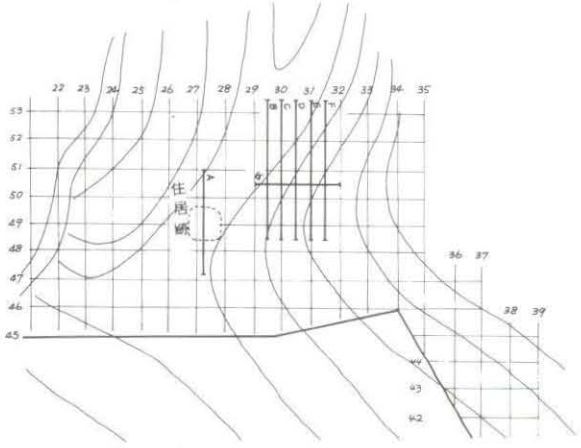


図8　地下レーダー測線配置図

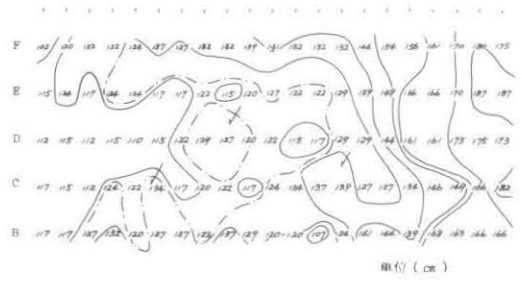


図9　地下レーダーによる反射面の等深度線図

地下レーダー調査　応用地質調査事務所の協力を得て，電磁波を利用した地下レーダーシステムによる遺構確認調査を試みた。

地中の土質境界における誘電率の差が形成する反射面をレーダーによって捉えるシステムである。

ワイドアングル測定によって求められた当該測線における電磁波の速度と，プロファイル測定によって描かれる時間断面との比を求めることによって，反射面までの深度断面が得られる（図6）。従って誘電率の差の大きい土質境界ほど強い反射面を形成し，明瞭な反射波が得られる。

この方法は，道路下埋設物の異状や橋梁の亀裂の発見など，地表構造を損なうことなく，地下構造の現況を把握するために用いられてきた。考古学への応用では，ローム層に掘り込まれた遺構や，軽石層下の遺構の存在を，発掘調査をせずに確認できることが確かめられている（図7）。

熊倉遺跡では，ハンドオーガーボーリングと同じく，熊倉火山灰層及びローム層を手がかりとし，この上面が反射面として捉えられると仮定した。この面の変化によって住居址の存否を確かめ得るはずである。調査区内に7本の測線（A～G）を配して実験を行なった（図8）。

このうち，A測線は，昭和56年度に試掘調査を行ない，住居址であることを確認し，土層断面が記録されている第7号住居址にかけて設定したものである。凹地の残る住居址であるため，地表面を水平とした地下レーダーの記録では，凹地部の地下の水平堆積層は，結果として，凸状に記録されることになる。

プロファイル測定記録では，地表近くに数本の反射線がみられるが，これは，含水の度合いや締まりかたの差によるもので，住居址にともなうものでは

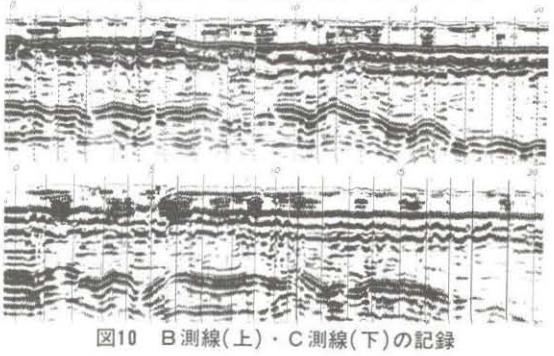


図10　B測線（上）・C測線（下）の記録

写真4　A測線土層断面

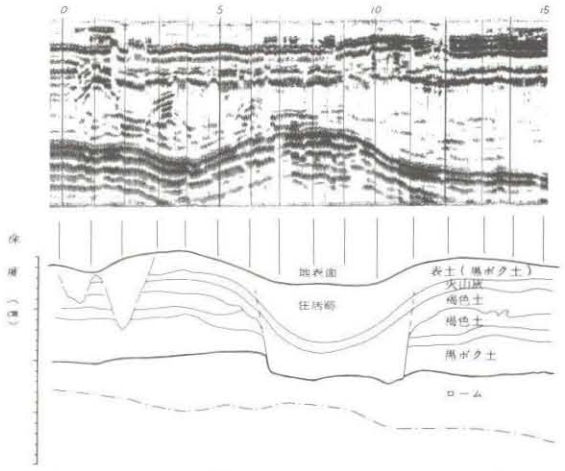


図11　地下レーダー記録とトレンチ観察（A測線）

ない。予想された，熊倉火山灰層からの反射は明確でなく，また，住居址外の黒ボク土層とローム層の境界，あるいは住居址の埋没土（これも黒ボク土であるが）とローム層との境界も不明瞭である。これに対して，ローム層中に強い反射面が認められる。

いずれの測線においても，この面は明瞭に捉えられ，図9に示す等深度線図が描かれた。

トレンチによる試掘，検証の結果，この反射面はローム層中のＹＰｋの堆積層であることが確認された。黒ボク土，熊倉火山灰，ロームの三者の土質には，電磁波に影響を与え得るような，大きな差異がないため，レーダーに反射が認められなかったわけである。これに対して，ＹＰｋ層は，粒径，含水率等が上下のローム層とは全く異なる。従って強い反応を示した。

熊倉遺跡においては，住居址床面がＹＰｋ層には達せず，遺構とこの層が関連をもたなかったため，地下レーダーシステムによる遺構確認は，ここでは期待された成果をあげ得なかった。

模型飛行機による空中写真撮影　　青高館航空写真に，模型飛行機による空中写真撮影を委託した。使用した模型飛行機は，翼長3.2m，重量16kg。２基のエンジンを載せ，５馬力の出力を得る。離陸には０m，着陸にも約４mしか要さない。風速２m以上の向い風があれば，空中静止も可能である。

遺跡の撮影のほか，工事やガケ崩れ，火山の撮影などに，安価で，人命に危険がないところから，広く利用されつつある。

この飛行機には，現在，35㎜判から６×６判までのカメラ及び小型のビデオカメラを搭載することができる。また，モニターシステムが備えられているため，上空から見た地上のようすを，地上のモニターテレビで確認することができる。これと，リモートコントロールシャッターの併用により，調査担当者が必要とする場所を，担当者の任意のアングルで写真撮影を行なうことができる。

モニター映像をそのままビデオ録画することも可能である。

今回の撮影データは以下のとおりである。

高　度	150m
距　離	700m
カメラ	マミヤ製６×4.5判
レンズ	セコール　45㎜
フィルム	コダック　ＴＸ120及びＥＬ120
天　候	晴，北の風，風力２
データ	1/1000秒　F.6.7

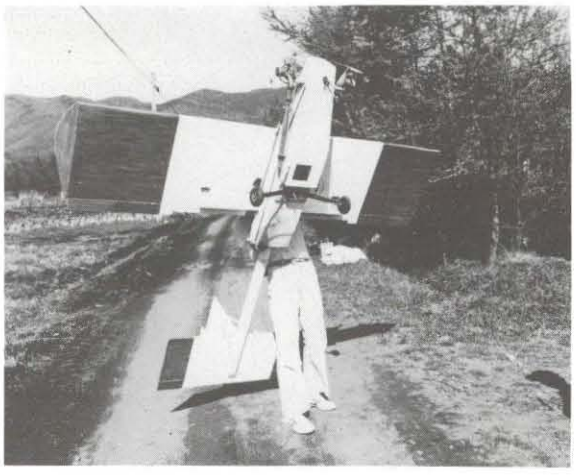


写真5　空中写真撮影用飛行機

3　住居址の発掘調査

7号住居址　昭和56年9月10日から25日迄の15日間にわたって発掘調査を行なった。熊倉遺跡東端の山林中に位置し，遺跡のほぼ全面がキャベツ畑と化したなかで，唯一個残された凹地の明瞭な住居址である。従って，調査によってこの凹地を破壊することのないよう，トレンチを用いて，住居址であることの確認をおこない，あわせて，住居址の年代，および熊倉火山灰の年代を決定するための資料を得ることが，この調査の主眼となった。

現況では，径6.5m程のゆがんだ円形プランを有し，周囲より約30cmほど凹んだ，浅い皿状の凹地として視認される。

発掘調査の結果，本住居址は，磁北に対してほぼ45度ふれる，一辺4m程度の方形の住居址であることが確認された(図12)。

トレンチによる調査であるため，住居址内の諸施設の詳細については明らかにし得ないが，一部壁周溝が設けられ，また，住居址中央部よりやや東よりに柱穴様のピットが掘られている。

カマドの位置については不明であるが，南西壁及び南東壁にそって，カマドの構築に用いられたと考えられる河原石が認められる。他の住居址の例を見ても，東側壁の南寄りにカマドを設けるのが通例であるので，本住居址においても，おそらくは，東南壁の南側コーナー近くに設けられているものと思われる。

炭化材の出土も見られた。割材であるが，構造的に組みあうような出土状態ではない。焼土も多くは認められないが，周囲の土が黒ボク土であり，火熱をうけても焼土化しない点を考えれば，焼失住居の可能性もある。

遺物はごく少なく，図示し得るものは土師器の甕口縁部2個体分にすぎない。

図13－1は，いわゆる「コの字」状口縁を有するもので，長胴の甕である。ごく薄く仕上げられ，口縁部は指でおさえながら横ナデを施している。

2も甕の口縁であるが，脚台を付す器形であろう。ナデ調整の指頭痕が明瞭に残っている。

8号住居址　昭和57年度に調査を行なった住居址である(図14)。

東西3.0m，南北3.5mと，やや南北に長い隅丸の長方形を呈する。熊倉火山灰層下の黒ボク土中から掘り込まれ，壁高は40cmほどある。東壁南寄りにカマドを設けている。袖部，燃焼部ともに崩壊が著しいが，「石組みカマド」と呼ばれるものである。煙道方向への残存長は，92cm程ある(図15)。

カマドに接して，東南コーナー部には貯蔵穴が設けられる。50cm×40cmほどの，台形に近い不整方形のプランを有し，床面下38cmまで掘り下げられてい

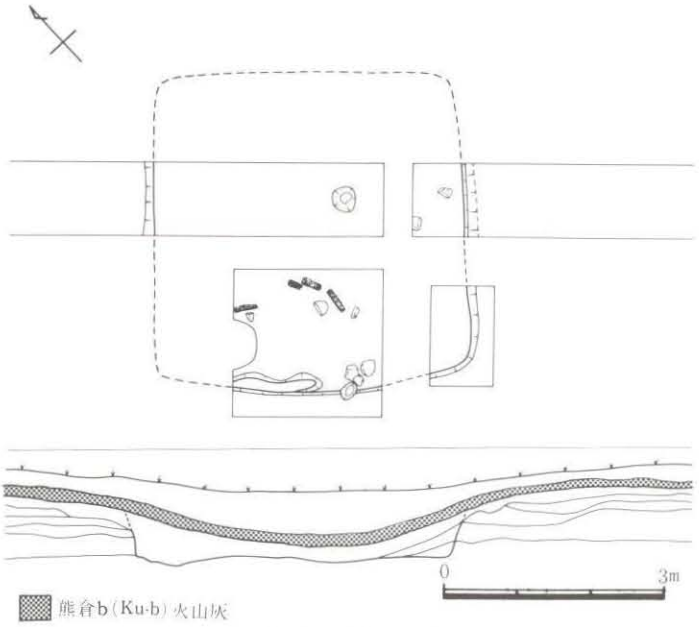


図12　7号住居址

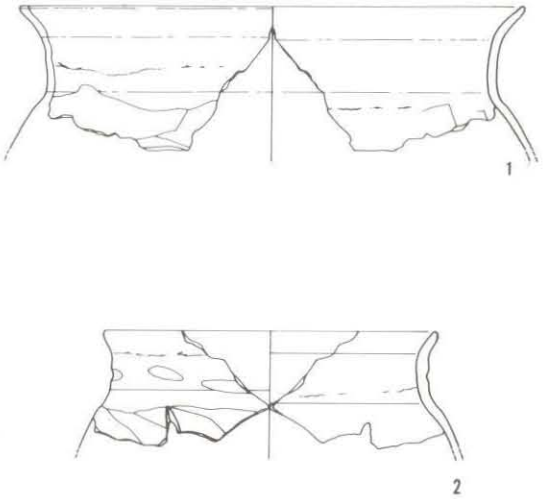


図13　7号住居址出土土器（1：3）

る。柱穴に相当するピットは認められず，周溝も検出されていない。

遺物は，カマドとその周辺，および南壁添いに集中する。住居址を四分したうちの西北四半からは，ほとんど遺物が見出せない。

図16－１～４は土師器の甕である。「コの字状」の口縁を有するもので，頸部上下の強い横ナデによって「コの字」をきわだたせ，肩部以下はナナメやや上方にすりあげるようなヘラ削りを施すことによって器壁をうすくしあげている。

完形品はないが，復元口径は，１が19.8cm，２が19cm，３が11.4cm，４は底径4.5cmである。胎土には，いずれも0.5mm～２mm程の砂粒を含み，焼成は硬調で良好な品である。４によって底部を観察すると，上から下へのヘラ削りが施され，内面にはハケ調整が行なわれて，底部の厚みも５mmにみたない。

５の須恵器坏は，復元口径14.8cm，底径7.3cm，器高は4.7cmである。

左回転のロクロを用いて成形し，糸切りによる底部切り離しののち，調整を行なわずに高台を付している。

胎土には，0.5 mm～５mm程の砂粒を含む，焼成はやや硬調で灰黄色を呈す。

胎土や焼成の点から，この須恵器は利根郡月夜野町周辺の月夜野窯跡群の産品である可能性が高く，利根郡域と吾妻郡の交流，交易のありようを示唆するとともに，熊倉遺跡が，上毛の文化圏に属する人々によって形成されていたことをも再度確認させることとなった。

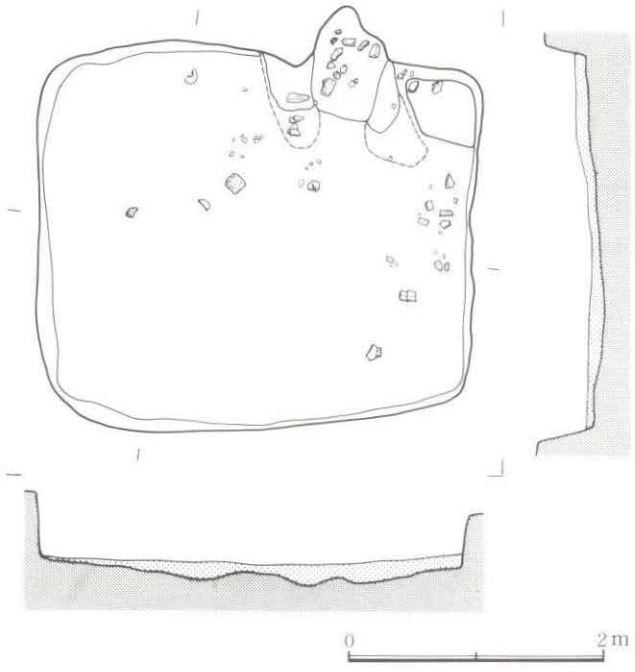


図14　８号住居址実測図

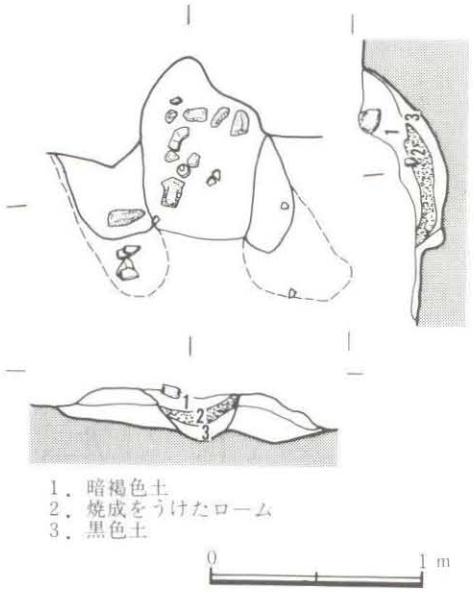


図15　８号住居址カマド址

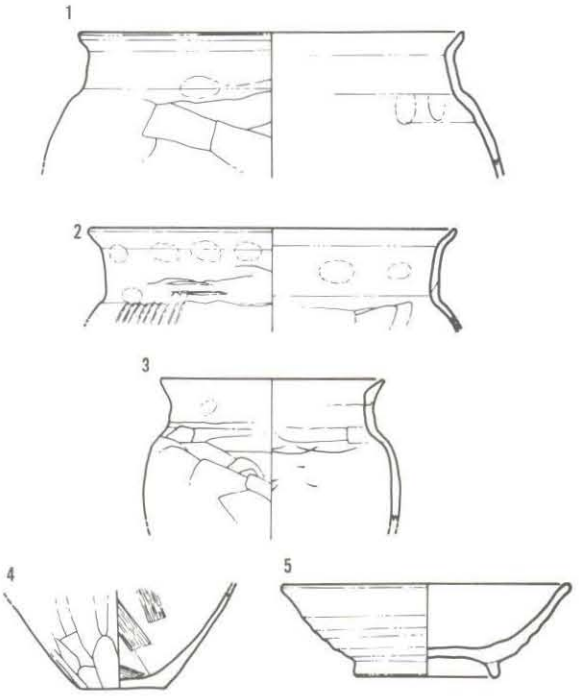


図16　８号住居址出土土器（１：４）

9号住居址　今年度調査を行なった住居址である。

ハンドオーガーボーリングによる遺構確認調査によって検出された(図17)。

床面中央部の規模は南北4.64m，東西3.66mで，やや南北方向に長い長方形のプランを呈す。

熊倉火山灰Ku-b層下の黒色土中から掘りこまれており，54cmほどの壁高を有している。壁下の周溝は検出されなかった。

柱穴と思われるピットも，住居址中央部よりやや北東寄りに一基認められたのみであった。上端で，32cm×26cmほどのいびつな円形を呈し，床面下40cmで，径16cmほどの底部に至る。ピット内からの出土遺物はない。

カマドは，8号住居址と同じく東壁南寄りに，黒ボク土を掘り込んで設けられている。崩壊しているが，河原石や角礫を用いた「石組みカマド」であり，左半部では，袖部から燃焼部に至るまで石が貼られている。右半部の石材は，カマド内，あるいはカマド前面に落ち込んでいる。

南壁中央部から東壁とのコーナー部分にかけて，焼土のブロック状の堆積が見られ，炭化物粒も少なくなかった。

貯蔵穴に相当する施設は検出されなかった。

出土遺物は比較的多く，カマド内及びカマド前面に集中し，南壁添いにも散在する。

住居址を四分したうち，東北四半は少量の土器片の出土がみられるにとどまり，西北四半では，細片も含めて，遺物の出土は認められない。

これは，住居址内空間の利用形態を示唆するものと考えられる。平野部においても西北四半部に遺物の出土を見ない住居址の例は少なくなく，熊倉遺跡のような山間部に住む人々も平野部の人々と同様の住居址内空間利用についての規範を有していた可能性がある。

カマドを東側壁の南よりにつくることについてもこれと同様に，平野部に共通する空間知覚が存在し

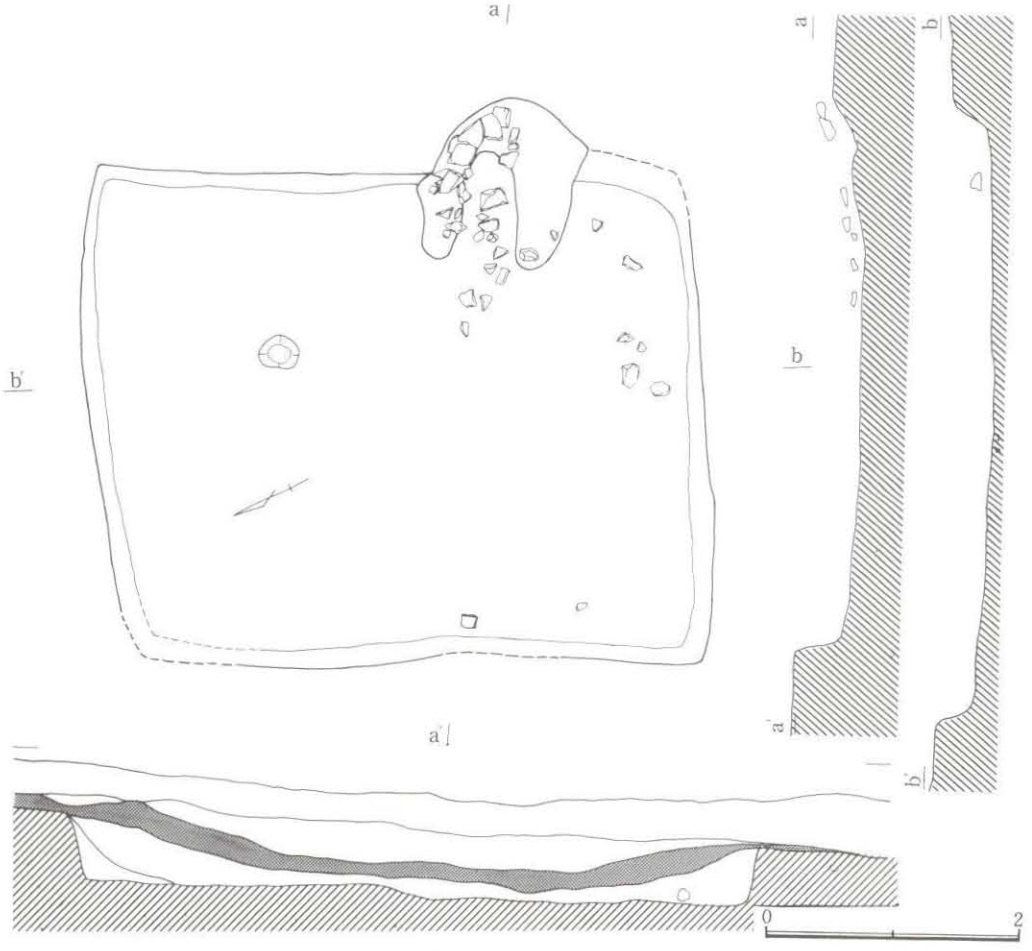


図17　9号住居址実測図

たことを伺わせるものとみてよいだろう。

出土土器は，ほとんどが細片であり，完形になるものはない。接合するものも多くなかった。土師器甕の胴部片が大半を占める。

図示し得たものは，図18の５点のみである。

１は須恵器の埦で，⅓ほど残存している。復元口径14.5cm，復元底径7.2cm，器高５cmである。

左回転のロクロにより成形する。胎土には砂粒を含み，焼成は軟調で，にぶい橙色である。

２も須恵器の埦である。⅕ほど残存した破片をもとに測図したが，他に，接合しない同一個体片が数片ある。復元口径15.1cm，復元底径8.2cm，器高5.6cm。右回転のロクロにより成形する。胎土，焼成ともによくない。灰黄色を呈す。底部近くに，逆位であれば「大」と読める刻字がある。ヘラ先状のもので鋭く書きつける。焼成終了後の刻字である。

３・４は，土師器の「コの字状」口縁を有する甕である。３は1/6，４は1/5ほどの破片からの測図である。

３は，復元口径24.2cmの大型品で胎土には0.5mmほどの微砂粒を含む。焼成は硬質。口縁部は内外面ともヨコハデを施し，頸部内面には横位のハケ調整を行なっている。

４は，復元口径14cm。最大径は胴部中位で，復元径14.7cmである。口唇部と口縁部上下に強い横ナデを施し，くっきりとした「コの字」を形成している。肩部以下は横位のヘラケズリを行い，内面は，残存部全面にわたってナデて仕上げている。胎土は良好で，焼成も硬く，灰黄褐色を呈する。

５は，灰釉陶器で，長頸瓶かと思われるものの胴部から肩部にかけての破片である。測図に用いた破片の他，接合しない同一個体胴部片が一片ある。

胴部下半はロクロ痕が残るが，上位はきれいにすり消される。釉薬は外面にのみかけられる。

熊倉遺跡における灰釉陶器の出土は群馬大学による調査時から知られていたが，県下でも古い一群に属するものであり，流通経路やその性格など，解き明かすべき問題は多い。　（洞口正史）

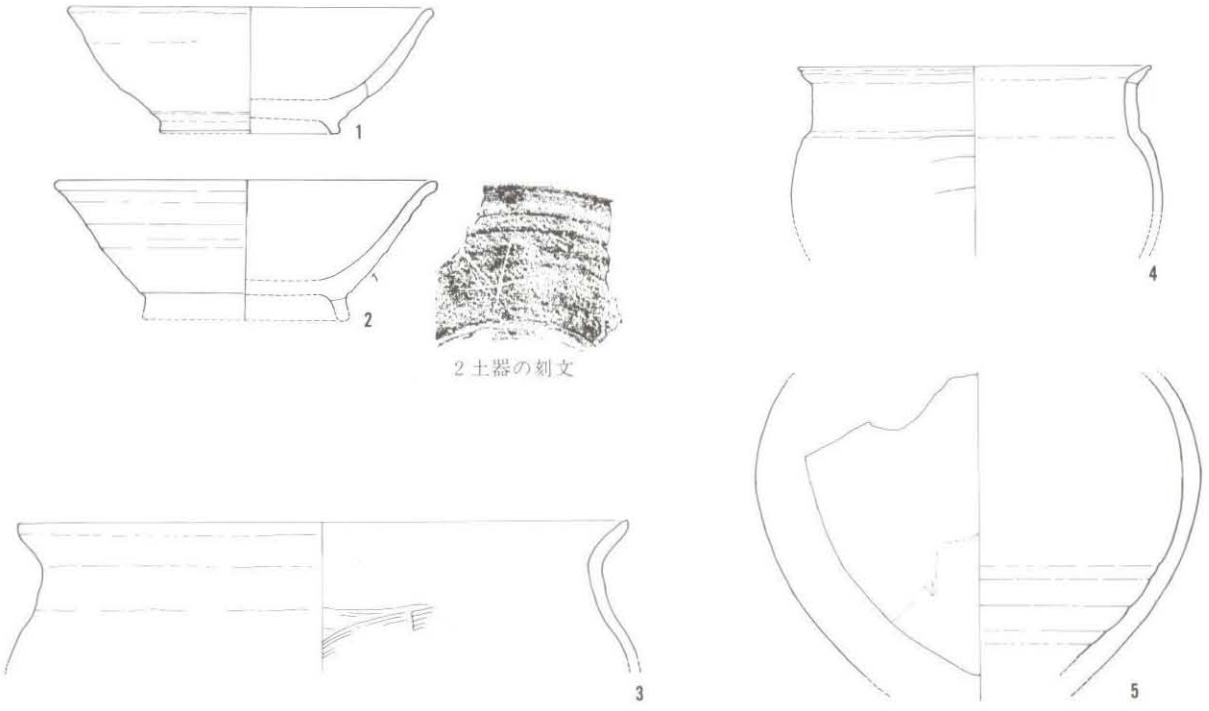


図18　９号住居址出土土器（１：３）

4　熊倉火山灰の分布調査

調査の方法　草津白根火山起源の完新世テフラについては，これまでほとんど知られていない。尾崎(1971)は，熊倉遺跡の発掘調査(1963年)で2枚の降下火山灰層を発見した。また堀(1966)は白根山の北，芳ケ平湿原のボーリング調査で，地表から2.5mの泥炭層の間に12枚の火山灰層を確認している。

今回の調査では，熊倉遺跡の発掘に伴って確認されたテフラ層を熊倉火山灰層と呼び，その示標テフラとして記載することを目的とした。なお，〝テフラ〟という用語は，降下火砕物と火砕流堆積物の総称である。

調査では野外において熊倉火山灰の層位，層相，分布を明らかにし，さらに採取したサンプルを室内で分析して，鉱物の形態，鉱物組成，屈折率などの岩石記載的特徴を明らかにした。

層位　草津白根火山東麓の火山灰土には，約11,000年前に堆積した嬬恋降下軽石層（YPk 新井，1979）や6,000～6,500年前に堆積したアカホヤ火山灰(K-Ah，町田・新井，1978）等の示標テフラ層がはさまれている。熊倉火山灰層は，アカホヤ火山灰層の上位のクロボク中にはさまれている。

草津町の市街地，草津ハイランドホテルの南の露頭では，熊倉火山灰層がよく観察できる(図19)。ここでは，熊倉火山灰層は間にクロボクをはさんで，堆積時期を異にする2枚のテフラ層からなる。下位のテフラ層は比較的粗粒の灰色軽石(最大粒径2.4cm)や石質岩片(最大粒径1.3cm)を含んだ明褐色風化火山灰層である。上位のテフラ層は，粗粒の物質をあまり含まない明褐色風化火山灰である。この報告では，下位のテフラ層を熊倉a火山灰層(Ku-a)，上位のテフラ層を熊倉b火山灰層(Ku-b)と呼ぶ。

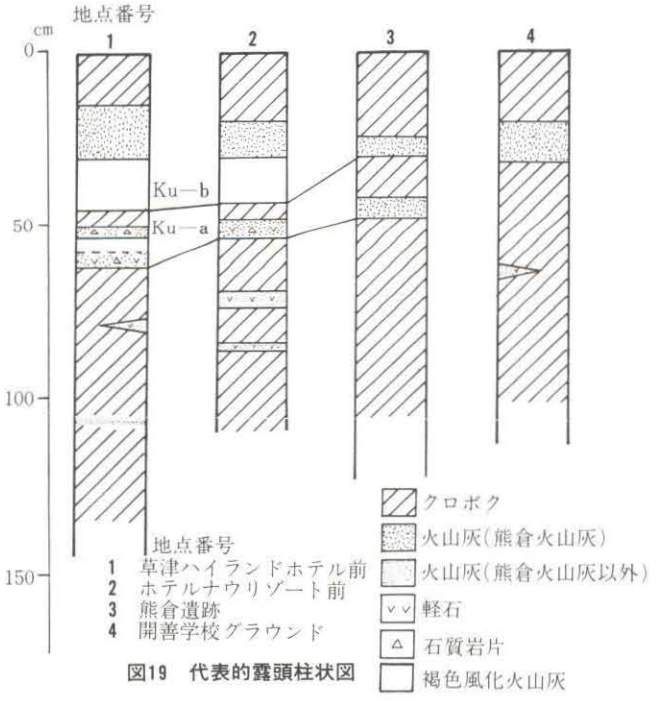


図19　代表的露頭柱状図

K-AhとKu-aの間のクロボクには，浅間火山起源とみられる黄色降下軽石層がはさまれている。これらのテフラ層について，詳細なことはわからない。

岩石記載的性質　草津ハイランドホテル南の露頭と熊倉遺跡において，熊倉火山灰を採取し，室内で分析作業を行なった。

最初にテフラを洗浄し，実体顕微鏡で観察した。熊倉火山灰層には，表面が白色に変質あるいはコーティングされたような岩片が多量に含まれている。浅間火山起源の完新世テフラには，灰色ないしは黒色の岩片は含まれているが，白色の岩片はほとんど含まれない。また熊倉火山灰層に含まれる軽石のみかけの発泡度合は，浅間火山起源の完新世の軽石よりもやや小さい。

次に，洗浄したテフラを¼～⅛mmのふるいでより分け，偏光顕微鏡を用いて鉱物組成を明らかにした。鉱物分析は，重軽鉱物と岩片を合わせて300個計数して鉱物組成した。さらに重鉱物が300個になるまで計数して重鉱物組成とした。

熊倉火山灰層には，石質岩片が非常に多く含まれており，全体の55～78%を占めている(図20)。含まれる重鉱物は，量の多い順にシソ輝石，普通輝石，磁鉄鉱，普通角閃石である。浅間火山起源の示標テフラには普通角閃石は含まれていない。なお，Ku-aに含まれる軽石には，普通角閃石は含まれない。したがって，普通角閃石は，既存の火山体を構成する岩石あるいは基盤の岩石に由来している可能性が大きい。

また，熊倉火山灰層に含まれる火山ガラスは，褐色ないし無色透明である。とくにKu-aに含まれる火山ガラスには，磁鉄鉱のmicro phenocrystをもつ特徴がある。

さらに熊倉火山灰層の性質を把握するために，シソ輝石の屈折率の測定を群馬大学，新井房夫教授に依

頼した。Ku-aに含まれる軽石のシソ輝石の屈折率(γのrangeは，1.711-1.715，modeは，1.713であった。この値は浅間火山起源の示標テフラの値よりも大きく両者の区別は可能である。

分布　前述のとおり，熊倉火山灰層は，浅間火山起源の完新世のテフラ層とは明らかに性質が異なることがわかった。さらに熊倉火山灰の層厚分布の調査の結果，熊倉火山灰は草津白根火山を給源とするテフラであることを明らかになった(図21)。

熊倉火山灰層は，Ku-a，Ku-bともに草津町から六合村にかけて広く分布している。ただし，これらのテフラ層の分布限界は，今回の調査範囲では確かめることができなかった。Ku-aは，草津白根火山から東南東方向，Ku-bは草津白根火山からほぼ東方向に分布軸をもっている。熊倉火山灰層は，分布軸に沿ってあるいは分布軸から遠ざかるにつれ，明褐色からしだいに暗褐色へと変化し，不明瞭になっていく。

熊倉火山灰層と草津白根火山の火山活動との関係は明らかではない。また，熊倉火山灰の草津白根山域での具体的な給源についても今のところわからない。尾崎(1966)は，熊倉遺跡で発見したテフラの給源火口を湯釜付近と考えている。Ku-aについては，その層厚，さらに含まれている軽石や石質岩片の最大粒径値の分布などから，地質学的に噴出地点を明らかにすることができるであろう。

熊倉遺跡での調査について　これまで熊倉火山灰層の性質について述べてきた。今回の調査では，熊倉遺跡とその周辺地域において，熊倉火山灰の堆積年代を求めるためにとくに浅間火山起源の示標テフラとの層位関係を明らかにすることを試みた。浅間火山起源の完新世のテフラの間には，特に岩石記載的性質に顕著な差異は認められない(町田・新井，1980)。

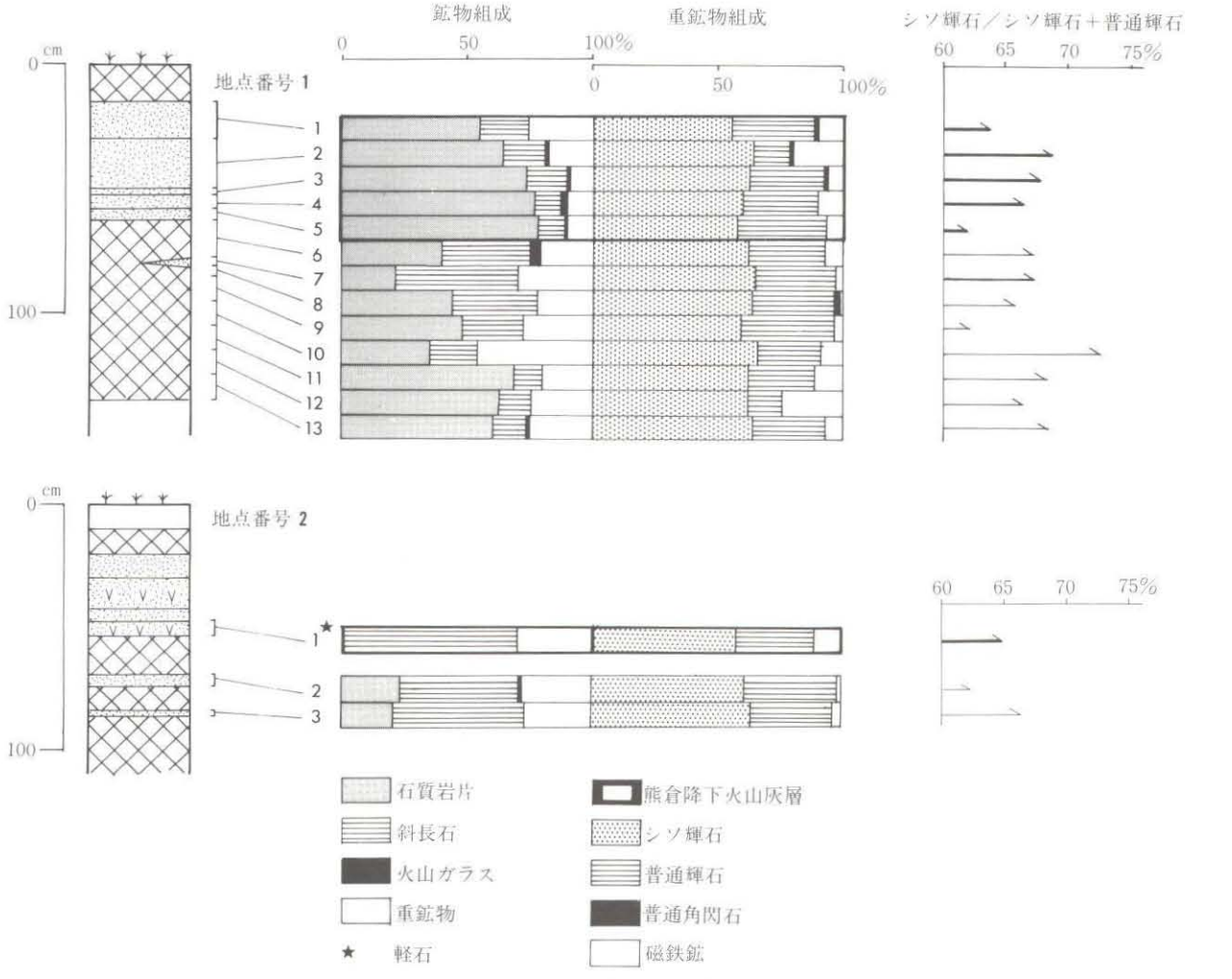


図20　熊倉降下火山灰と他のテフラ層の鉱物組成

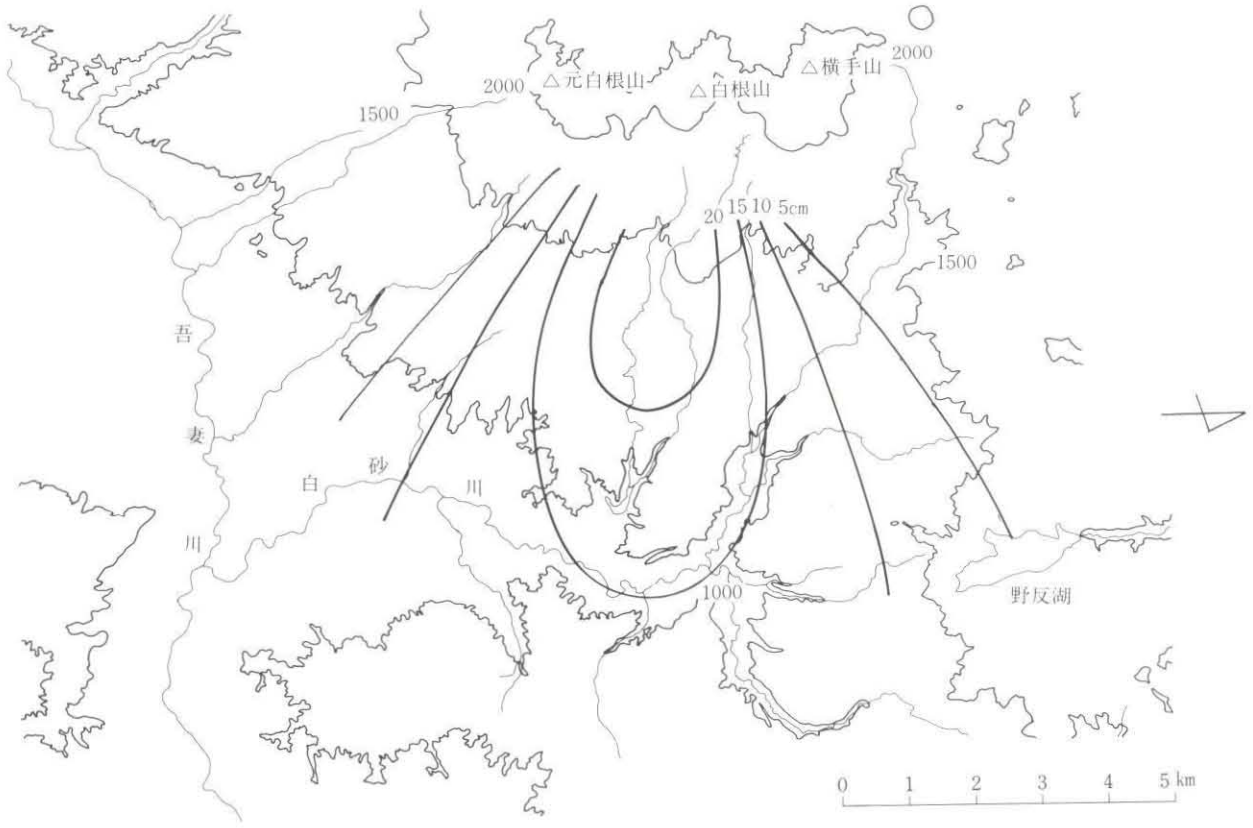


図21-a　熊倉a火山灰層(Ku-a)の層厚分布

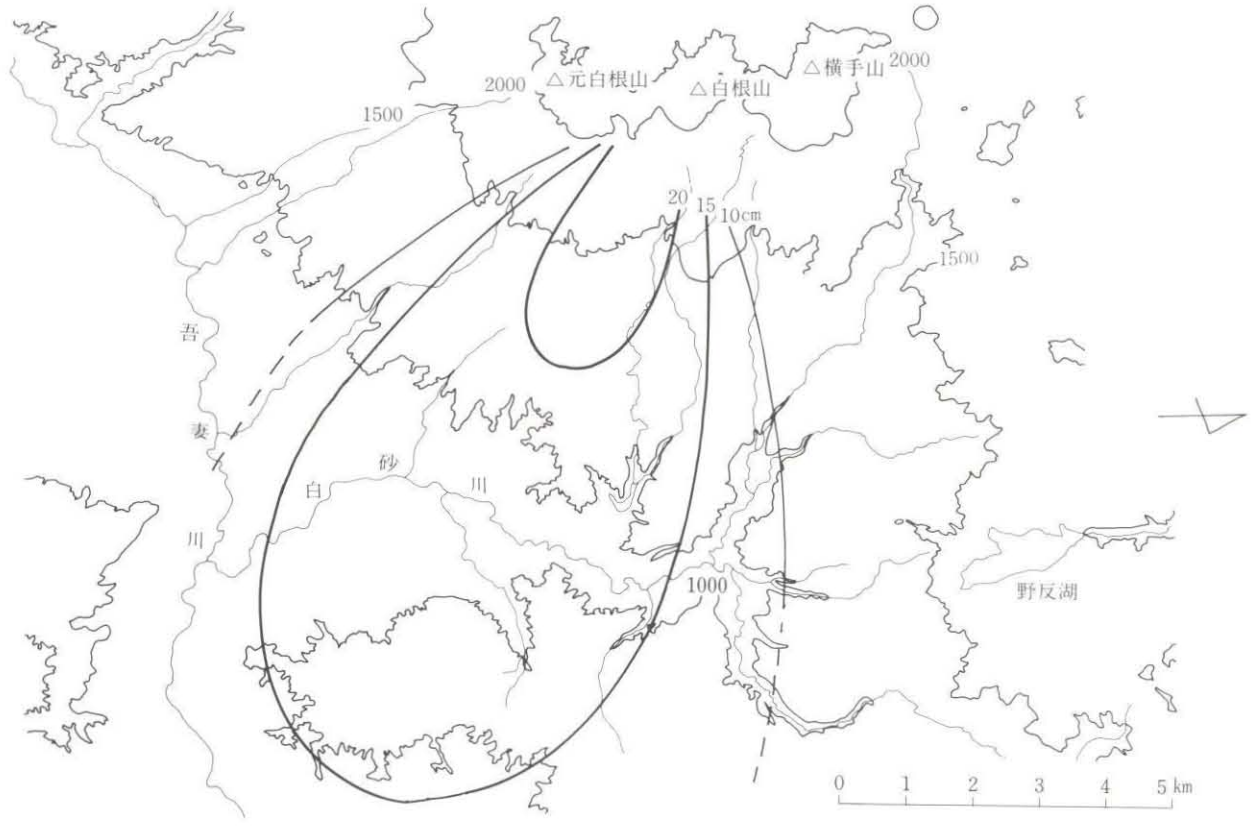


図21-b　熊倉b火山灰層(Ku-b)の層厚分布

従って，本調査では熊倉火山層の堆積年代が近いと考えられる浅間B軽石層（略称〝B〟）をその野外での層相の特徴をもとに発見しようとした。

〝B〟は，天仁元年（1108年）の浅間火山の噴火に由来すると考えられている（能登，1978）。〝B〟は前橋台地，下小鳥遺跡では，最下部には5㎜程度の青灰色の火山灰があり，その上位に小豆状の軽石粒がまばらに混っており，さらに上位は淘汰の良い降下物になっている。また最上部には赤褐色の火山灰が部分的に見られる（能登，1983）。熊倉遺跡では，上述のような層相をもつテフラは認められなかった。また，クロボク中に浅間火山起源の噴出物が集中する層準は認められなかった（図22）。これは，草津白根火山東麓が〝B〟の分布の北限付近に位置していることによるものであろう。今後，テフラの保存が良い泥炭地などでの調査が必要となろう。（早田　勉）

参考文献

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層，考古学ジャーナル，157,41-52.

新井房夫・町田　洋（1980）日本のテフラ，カタログ　I－西日本～東北地方の第四紀後期示標テフラの岩石記載的研究，軽石学雑誌，6,65-76.

堀　正一（1966）草津白根山湯釜出土笹塔婆の年代について，信濃，18,117-119.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰，第四紀研究，17,143-163.

能登　健（1978）浅間山大焼・榛名山爆裂，考古学に見る北関東の火山災害，どるめん，19,6-17.

能登　健（1983）群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題，群馬県史研究，17,14-51.

尾崎喜左雄（1971）火山噴出物堆積と遺跡－志茂樹喜寿記念論文集，723-744.

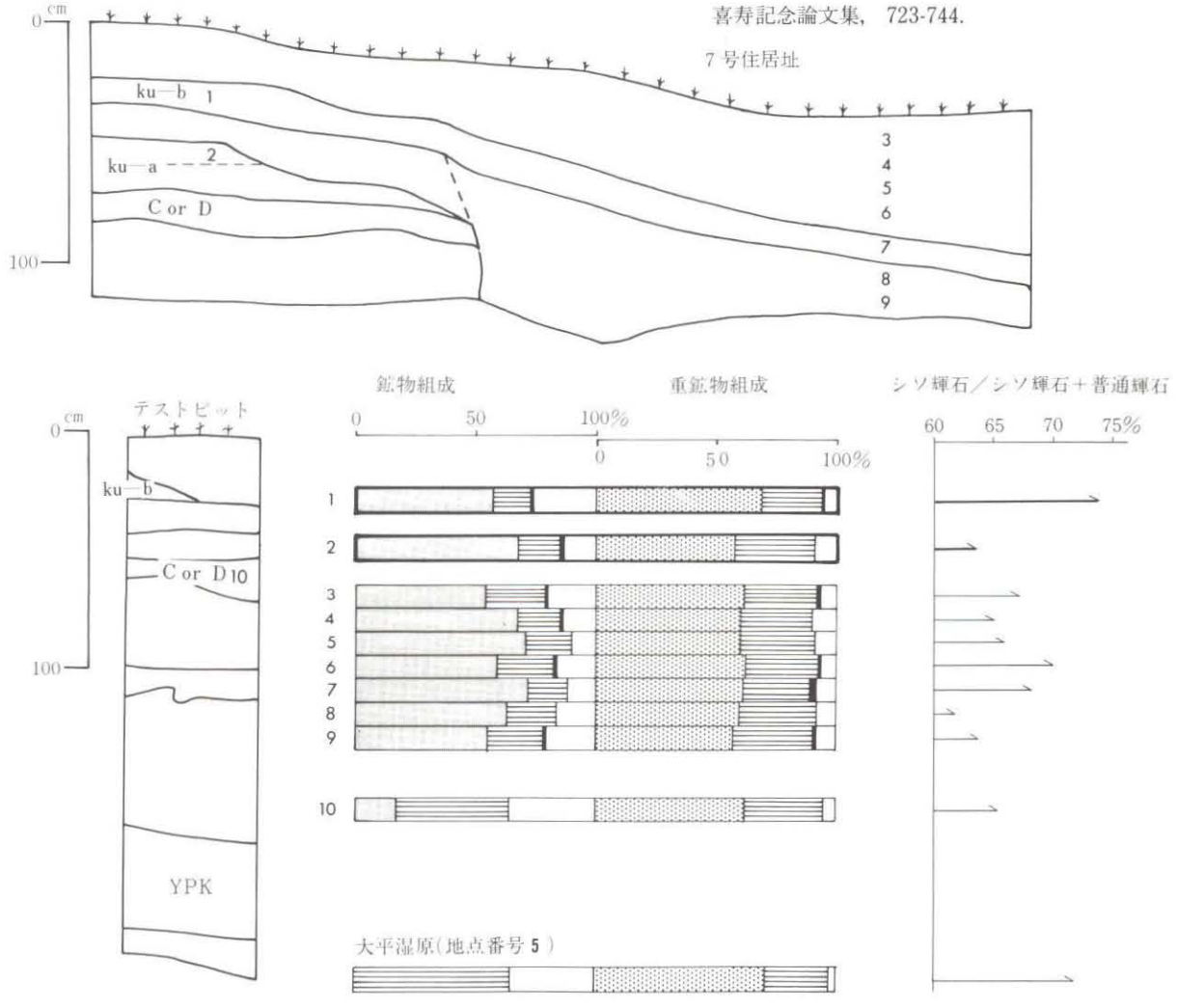


図22　熊倉遺跡（7号住居址埋没土・テストピット）の鉱物組成

5　プラント・オパール分析

プラント・オパール分析による焼畑址探索の可能性

プラント・オパール分析により発掘調査の前に水田址の埋蔵土層とその範囲を推定し，そのデータを参考にして調査を進める方法は各地で実施されるようになり，水田址調査法として定着しつつある。常畑についても水田址と同様の方法で探査し畦遺構を検出した例があり，今後の研究により常畑址探査の精度が高まることが期待されている。

焼畑址は水田址や常畑址と異なり，考古学的に遺構を確認するには困難がともなう。

しかし，わが国に焼畑が存在したことは確かであり，さらに一方で焼畑が水田や常畑より古い農耕様式であるとする系譜論的論考がある以上，何らかの方法で実証的に焼畑の歴史と発展過程を追究する必要が出てくる。

筆者等は共同研究者とともにプラント・オパール分析により焼畑址を実証的に把握する方法とその具体的データの蓄積につとめてきた。その詳細については後掲の別報を参照されたい。この種の研究でもっとも難しいのは土層の堆積時代を決定することである。焼畑址があったとしても，文化層として認定し得る遺物が発見されるとは限らない。むしろ焼畑の性格から考えると，その可能性は極めて低いと思われる。^{14}C年代測定法により炭化物から年代を決める方法は有効であり，他の遺跡で実施しつつあるが，一定量の炭化物を採取する必要があり，実際にやってみるといろいろ難しい問題も出てきている。これに対し，当該遺跡には噴出年代の推定された火山灰があり，これを土層堆積時代の大きな目安にすることができる。

焼畑址の実証的研究に当該遺跡を選んだもっとも大きな理由はここにある。

本研究の特徴は焼畑作物に由来するプラント・オパールを探索する直接的方法とイネ科雑草・野草の量的変化を調べる間接的方法を組み合わせることにより焼畑の存在を確かめようとするところにある。しかし，現在の研究段階では焼畑作物の珪酸体に関する基礎的研究に遅れがあり，論理的に詰めた考察を加えることが難しい。これらの基礎的研究は目下鋭意進めているところであり，結論を得るまで漸らく時間をいただきたい。したがって，本論は予報としてこれまでの成果を述べることにとどめさせていただく。

分析結果および検討　14地点における分析成果を図および表に示した。採取地点は標高・傾斜度・斜面方位がそれぞれ異なる。したがって，土地利用の形態，頻度に採取地点間差があるはずである。

詳しくはそれぞれの地点について分析結果を検討する必要があるが，ここでは紙数の関係もあり全体的な傾向について若干の検討を加えることにする。

全体的な傾向をもっとも集約した形で表わしているのはNO.4地点の分析結果である。NO.4地点は標高・傾斜度とも調査区内では平均値に近く東向きの斜面である。ここではNO.4地点の分析結果を少し詳しく分析，検討することにより全体的傾向を推量してみよう。

図の右側にキビ族(paniceae)の地上部乾物重と種実重を示し，左側にススキとタケ亜科の地上部乾物重を示した。このグラフで注目されるのは次の2点である。

(1)　キビ族は4b-3層から出現し，4b-1層でピークを示すが，4a～3-2層では検出されていない。その後，

表3　ガラスビーズ法による
プラント・オパール定量分析ダイアグラム

3-1層から1-1層にかけて増加している。4a層が浅間Cパミスをを混じえていることを考えると，4b-1層以下の層は先史時代の堆積層である可能性が高い。4b層で検出されたキビ族プラント・オパールは4a～3-2層で同プラント・オパールが検出されていないことを考えると，3-1層より上層で生産されたものが落ち込んだものとは思われない。このことは，この地で先史時代にキビ族植物が大量に生産された蓋然性の高いことを示すものであろう。

(2) タケ亜科(主としてササ類)は高木林の林床植物として繁茂することが知られている。図にみられるとうり，キビ族生産量とタケ亜科生産量は反比例する傾向が認められる。これはキビ族植物が繁茂する間，高木林が破壊された結果，林床植物であるタケ亜科植物の生産量が抑制されたことを示している。

(3) ススキはその生態的特性から，焼いたり，刈り取るなどの処理により枯葉を除去しない限り群落を維持できないことが知られている。また，ススキはタケ亜科と異なり，高木林の林床で群落を形成することは少ない。以上のことを考えると，3b層および1層では何らかの理由で高木林相が破壊され，ススキ群落が維持できる条件が造られたことを示している。

さらに注目されるのは，ススキの生産量変遷がキビ族のそれとほぼ比例し，タケ亜科のそれと反比例していることである。

すなわち，タケ亜科植物の生産が中断ないしは抑制される(おそらく高木林相の破壊によるもの)とキビ族植物とススキの生産量が増加するのである。

このようにイネ科植生が変化する要因の一つとして焼畑を挙げることができるが，まだ焼畑と断定するには，次の理由で尚早といわざるを得ない。

キビ族(Tribus paniceae)にはヒエ・アワなど典型的な焼畑作物が含まれている。しかし，それ以外にチヂミザサやヒメシバなど13属の雑・野草が包含されている。現在の段階では珪酸体形状からヒエ・アワなどの作物を他のキビ族植物群と分離するに足る基礎データを得るにいたっていない。これができれば，検出されたキビ族プラント・オパールが焼畑作物に由来するものであるか否かを判断することが可能になり，焼畑の存否を結論づけることができるであろう。

浅間Cパミスの降下(4C)以前に焼畑が行なわれていたとすれば，農耕史を考える上で大きな問題提起をすることになる。事の大きさを考え，慎重な結論づけをしたいと思う。

(藤原宏志・杉山真二)

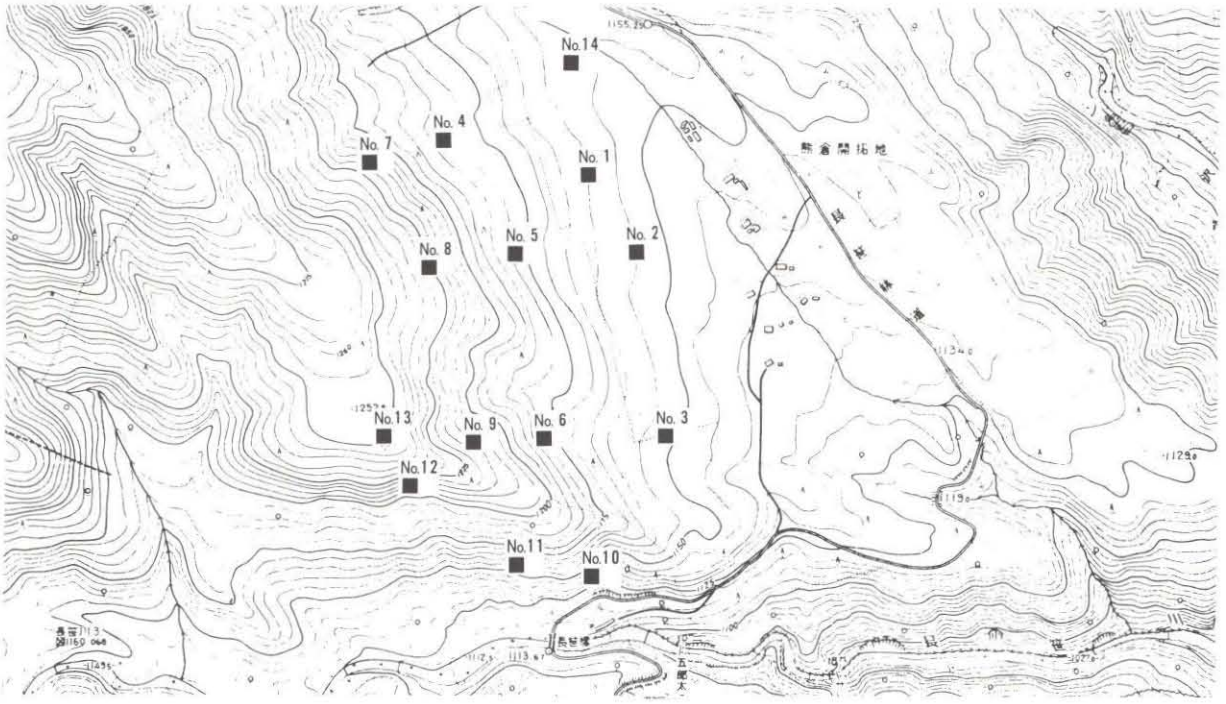


図23 プラント・オパール分析試料採取地点図

グラフの見方について

1. layers:採取地点の土層模式図，左上の数字は土層番号，柱状図内の小数字は表層からの深さをcmで表わしたもの。
2. pani.（paniceae）キビ族の地上部乾物重。　　Mis.（Miscanthus）ススキの地上部乾物重。
   Seed.（paniceae）の穎果（籾）乾物重。　　Bamb.（Bambsaceae）タケ亜科の地上部乾物重。
   各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壌中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。
3. 土柱模式図の右側に栽培植物，同左側に野，雑草を示している。単位t／10a・cmはその土層の厚さ1cm，面積10a（1000m²）に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量をt（トン，1×1000kg）で表わしたものである。例えば，その土層が10cmの厚みであると，グラフで示された値に10を乗じた量の植物体がその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量でないことに注意されたい。
4. 焼畑が埋蔵されている土層ではpani.の値がピークを形成する場合が多い。土層の堆積状況により一概にいえないが，焼畑の層位はこのピークと一致するのが通例である。
5. Mis.（ススキ），Bamb.（タケ）の乾物量変遷はその地点における土地利用状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ススキは焼畑など人為的環境に生育し，タケ（ササ）は落葉樹林帯の林床植生として繁茂する。両者の消長をみると，その地点の状況変化を推定するのに役立つ。

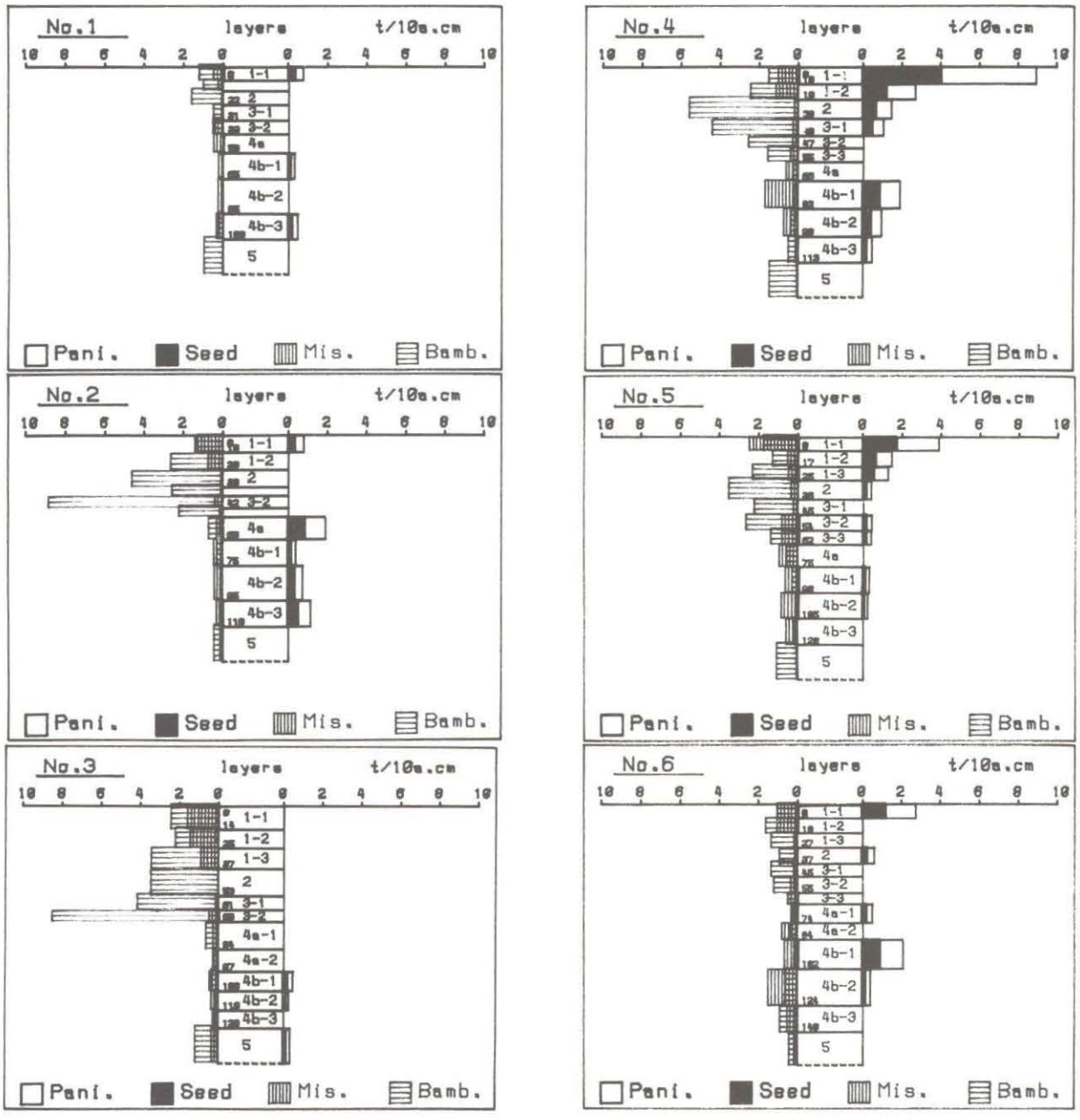


図24—a　プラントオパール定量分析結果

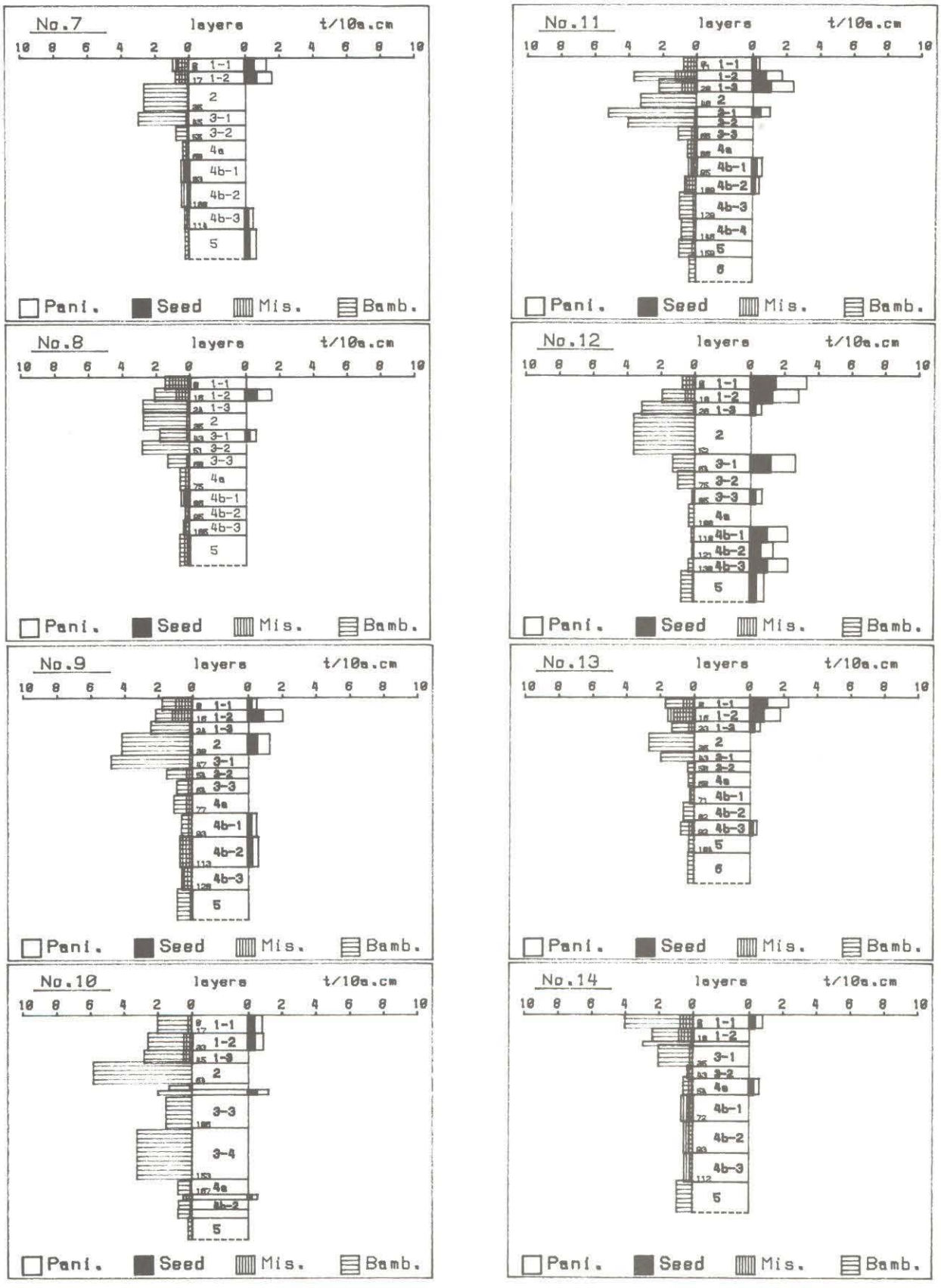


図24—b　プラントオパール定量分析結果

Ⅳ　熊倉遺跡の全体像

1　遺跡の拡がり

熊倉遺跡の立地する地域は，急峻な草津白根山の山麓地帯にあって数少ない平坦地形を形成している。この平坦地は幅400m，長さ700mで，標高1,140m，平均傾斜約３度の南東斜面である。平坦地の北と西は小高い山へと続き，南と東を山麓地帯特有の深い谷である元山川とガラン沢川が刻んでいる。現在，平坦地の西側を開拓部落の進入路が通り，南端部近くを進入路に直交して東西に農道が通る。

遺跡の範囲　遺跡は南側の元山川に面した平坦地の南端部に立地する。地形的な制約から，住居址を検出した平坦地南端部の北側以外に遺跡が拡がる可能性はなく，北側についても，農道以北で実施したボーリング及びトレンチ調査で遺構が検出できない。このため，遺跡の範囲は農道以南で調査区域東側の東西150m，南北100mの範囲に限定することができる。

竪穴住居址の分布　竪穴住居址は元山川に沿った緩やかな南東斜面に占地している。昭和37～39年の群馬大学による調査を含めて，現在までに９軒の住居址が発掘調査された。これらは遺跡の中央部を北西に伸びる元山川の浅い支谷より東側の，谷に最もせり出した微高地部に集中して占地していることが判明した。発掘された９軒とハンドオーガーボーリング調査で検出した13軒を加えた22軒は，昭和37年当時の記録にある埋没しきらずに存在した約25箇所の窪みの数とほぼ一致するため，ここには25軒前後

図25　熊倉遺跡の地形と確認された住居址

の住居址が存在していたと考えられる。

2　集落の成立

熊倉遺跡で発掘調査された7～9号住居址出土の土器は，甕(土師器)，小型台付甕(土師器)，高台付埦(須恵器)，長頸壺(灰釉陶器)である。甕及び小型台付甕は，口縁部が直立して上位で外反する「コ」の字状を呈し，口唇部は直立気味に外反して外面に浅い沈線が巡る。高台付埦は体部に僅かな脹らみをもって口唇部は外反し，底部に回転糸切り痕を残して低い高台を付す。焼成は全体に不良で一部には酸化焔焼成のものも認められる。「コ」の字状口縁を呈す甕及び低い高台の付いた高台付埦の特徴から，これらの土器群は県内で設定されている土器編年の9世紀後半に比定できると考えられる。

列記した3軒の住居址出土土器には，形態及び共伴関係上の差違が認められず，また，発掘調査した9軒の住居址に一切の重複例がなく，*羽釜の出土もない。したがって，熊倉遺跡に存在する25軒の住居址が全て同時に存在したとは言い難いものの，9世紀後半代の比較的短期間のうちに，成立から消滅への過程を経たと言えるだろう。　　(坂口　一)

＊　群大の調査に参加した井上唯雄氏(県教育委員会)の御教示。

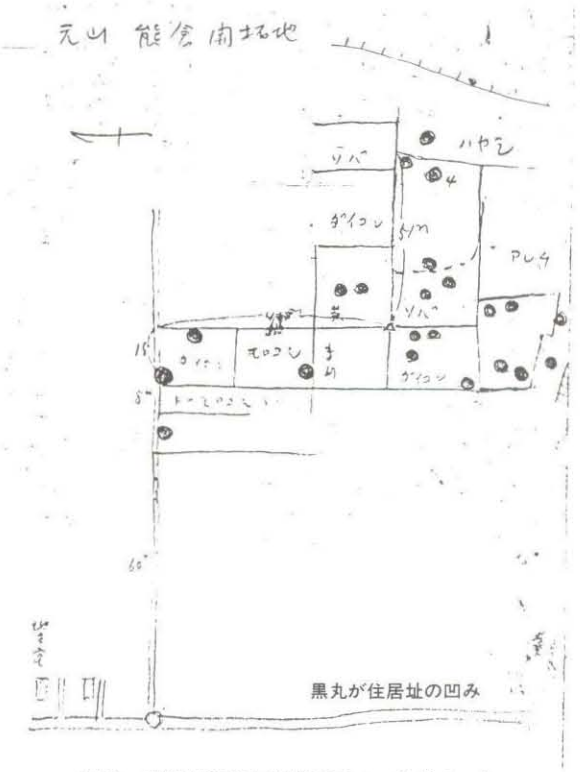


図26　昭和37年群大調査のフィールドノート

3　熊倉火山灰の年代観

火山灰分布調査の結果，熊倉火山灰層は草津白根山が給源であり，2層に分かれていることが判明した。そのうちのKu-a層は，熊倉遺跡III_b層中に認められる。また，Ku-b層はII層がこれにあたる。

調査された7～9号住居地は，いずれも9世紀後半の遺物を出土する。これらの住居址は，III_a層を生活面として構築されていると考えられる。Ku-a層はIII_b層中であり，住居構築より以前の降下であることが判る。一方，III_b層下位のVI_a層中には浅間系のテフラがあり，CまたはDと考えられる。D層の分布軸は給源から東方に向かっており，熊倉遺跡のテフラはCの可能性が高い。このことから，Ku-a層の降下年代は4世紀中葉から9世紀中葉の間となる。Ku-b層は，3軒の住居址ともに埋没土中層にあり，住居の廃絶後である9世紀中葉以降の降下堆積ということになる。しかし，埋没土下層(第一次埋没土)にもまんべんなく混入している点で，住居の廃絶期に接した時期であるとの推定も可能であろう。今後の資料の増加を待ちたい。

なお，以上の結果から，熊倉火山灰の降下は，2回とも直接的な集落への影響はなかったことにもなる。

4　黒ボク土と凹地の残存

熊倉遺跡の特徴のひとつに，廃絶された住居が埋まり切らずに凹地として残り，現地表面でその存在が認知できることがあげられる。このような現象は北海道の擦文文化期の住居に顕著にみられ，本州でも新潟・長野・静岡などの各県で確認されている。

7号住居址　　昭和36年頃の熊倉遺跡では，20個ぐらいの凹地があったという。しかし，現在では耕作によって，7号住居址上に1個しか残っていない。

7号住居址は，出土遺物の年代観から9世紀後半の所産と考えられる。住居の掘り込み面は，壁面の崩壊によって不明確ではあるが，第III_a層上面と考えられる。この面は同時に，当時の生活面(旧地表面)を意味している。すなわち，住居の廃絶以後から現在に至るまでの間には，まず第II層の火山灰が堆積し，次いで第I層が土壌生成のもとに漸位的に堆積したことになる。第I層の厚さは平均25cmである。

現地表面は皿状に凹んでいる。住居址中央部が最

も低く，周辺にはドーナツ状の高まりがある。この高まりは，住居構築の際に掘り上げられた土が周堤状に残されたもので，現地表面にもそのまま反映されている。両者の比高は約40cmであった。凹地の現状は，灌木がまばらにあり，下草が覆っていた。

上諏訪遺跡の住居址　上諏訪遺跡は前橋市東大室町にあり，赤城山南麓のローム台地上に立地する。ここでは，鬼高II式土器を出土する6世紀中葉から後半にかけての住居址の埋没土中段に浅間B層のレンズ状堆積が確認されている。浅間B層は1108年の降下と考えられている。

住居址の発掘に際して，浅間B層を除去したところ，直下は皿状に凹んでいた。住居址は，40cm以上の掘り込みで造られており，その掘削はローム層にまで達している。廃絶後の経過は，まず竪穴壁面のローム層の崩落にはじまって，次に住居外周辺からの土砂流入によって，第一次の埋没が完了している。その後，浅間B層の降下堆積までの約400年間は，凹地として残っていたことになる。

このような現象が前橋市周辺で観察されることはあまり多くはない。上諏訪遺跡の例は，たまたま住居址の残存が良好であったためである。この地域での多くの住居址は，上半部が耕作等で削り取られており，この点でも残存が悪いのであろう。

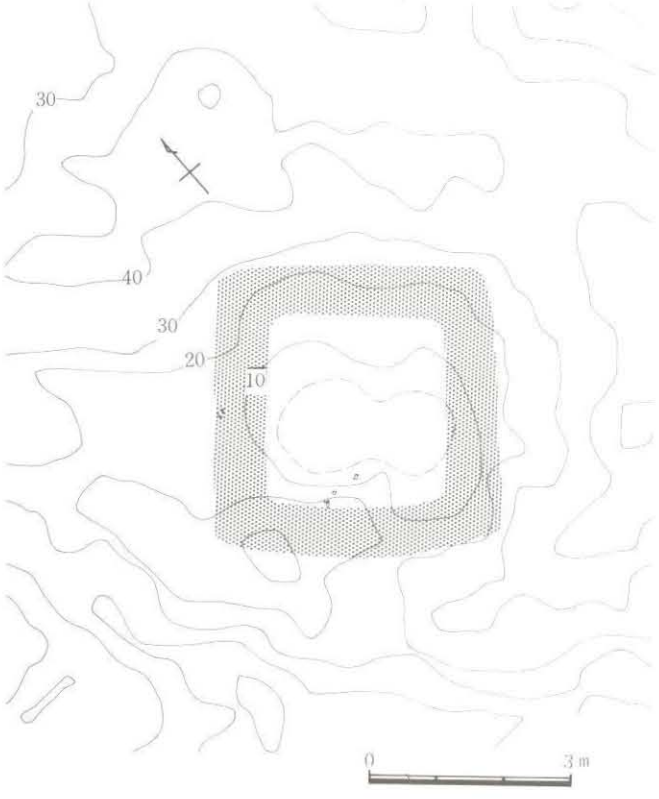


図27　熊倉遺跡7号住居址の凹地地形

黒井峯遺跡の住居址　子持村北牧の黒井峯遺跡は，軽石採取中に発見され，ここでも住居の埋没に関する新しい知見を得ている。この地域は榛名山二ツ岳から約10kmの位置にあたり，6世紀中～後半に噴出した軽石が平均2mほど堆積している。この軽石層下に古墳と古墳時代の住居址群が調査された。

軽石層を丁寧に除去すると旧地表面が現われて，散在する凹地によって住居址の存在が判る。いずれも6世紀代の住居址で，鬼高I・II式土器を出土する。これらの住居址は，若干の年代差をもっており埋没過程に差異も認められるが，おおよそ半分が埋没した状態であった。すなわち，6世紀代の初頭から中葉にかけて生活が営まれ，その後廃絶された住居址は，同じく6世紀中～後葉の降下軽石によって完全に埋没している。住居の廃絶から軽石の降下までは最大で100年，最少幅では数年と考えられる。この間に住居址の約半分が埋没している。

住居址の埋没過程　以上の3遺跡の調査結果をもとにして，住居の埋没過程を類推すると次のようになる。

住居の埋没は，放棄・廃絶によって開始される。この際の上屋構造の状況については未解決の問題として残る。しかし，竪穴住居の埋没は，壁面の日照や凍結の繰り返しによる崩落から始まることが，埋没土層の断面観察から判明している。そして，これとともに外部からの雨水などによる土砂流入が加わって第一次埋没が完了する。この段階で半数近くが埋没し，その期間は数年ぐらいと考えられよう。

その後，凹地部分は安定した勾配を呈することによって崩落や流入は極度に少なくなり，埋没そのものは緩慢になる。また，この時点までは裸地であった凹地を新しい植生が覆うことになる。植物の繁茂は，霜害，風食や雨水による土砂の移動を停止させる。その後，腐植有機質土の堆積による土壌化以外は，主要な埋没の原因を生じないことになる。突発的な出来事のないかぎり，凹地は凹地のままの地表面として永く残される。熊倉遺跡では少なくとも1000年を数えた現在でも埋没が完了してはいない。

人為的地形改変　熊倉・上諏訪・黒井峯，3遺跡の調

査結果は，住居址の完全な埋没がきわめて長期間を要することを証明している。そして，このことは考古学のみならず，地形変化や土壌生成の問題にまで波及する内容を含んでいることになる。

従来，一部の遺跡でみられた凹地残存の現象は，高冷地や寒冷地における土壌生成速度のおそいことに起因しているという考えが根強くあった。しかし熊倉遺跡の黒ボク土は，ローム層上に平均して1mも堆積しており，その生成速度は，平野部における黒色土，褐色土のそれに比べて，明らかに速いものであることを物語っている。凹地残存の原因は全く別のところにあったわけである。

住居址は廃絶後に一気に半分が埋没し，皿状の凹地に地形変化する。これは，住居が人間によって掘り込まれた人為的な地形改変であったため，その使用を中止しした時点で，もとの自然的地形にもどったことを意味している。住居の構築および使用中については，一定の管理により，現状を維持するが，廃絶以後は，環境破壊がそのまま放置されることとなる。放置された住居址は，埋没という過程を経て，植物の繁茂による環境復元を自浄的におこなってゆく。植物の繁茂は風・雨水・霜などの自然現象による土壌の流失移動を抑制し，住居址の埋没はこれに伴って鈍化することになる。

一方，この考え方が正当なものと考える場合，多くの遺跡が地下に埋没して地表面でその存在を知ることのできない現状をどのように解決すべきかという問題が生じる。これについては，土砂崩れや火山活動などの突発的な出来事のほかに人為的な土壌改変の行為があると考えたい。その代表的なものに畑作耕作があげられよう。畑作は，耕作によって土壌を撹乱させるとともに植性を大きく変化させ，裸地を拡大させる。露出した土壌は，日照や凍結あるいは雨水の表流などで風化・流失を繰り返す。

熊倉遺跡では，住居の廃絶後には耕作などの人間活動が行われていなかったことを知ることにもなる。

（能登　健）

写真6　上諏訪遺跡の住居凹地
浅間B層を除去したところ。

写真7　黒井峯遺跡の住居址
ＦＰ層を除去すると埋まり切らなかった住居上面が出てくる。

白根山麓・山棲み集落の考古学的調査

能登　健

1　熊倉遺跡発掘調査の前提

群馬県下では，火山灰層下から多くの水田や畠の遺構が検出されている。そしてこれらの遺構の発見は単に農業技術の発達過程を解明する具体的な資料の提示だけではなく，新しい集落論の展開をも促している。すなわち，考古学を通じて，全体史を構成し得る位置へ導く重要な足がかりともなりうるのである。*

従来の集落論は，住居址の配置や出土遺物から個別集落を摘出し，各集落の性格分析や集落相互の比較検討を行なうことにより，集落形態の一般的法則性を導き出そうとしている。この場合の「集落」は，少数例を除いて，発掘調査によって把握し得た住居址群を対象としている。言いかえると，居住域の集落論として規制されざるを得ない状況下にあった。

居住域の遺構に加えて，田・畠という直接的な生産域が確実に把えられ，その存在形態と発展のプロセスが解明されるに従って，集落の景観は全体化され，分析の対象も飛躍的に拡大することになる。人間が自然を改変しながら，新しい空間を組織化してきたプロセスが，新たな時間軸をもって問いなおされるに至ったのである。

群馬県の平野部は，洪積台地，扇状地，山麓末端に加えて，様々な成因の沖積地が混在する。この複雑な地形の中に点在する農耕集落の遺跡は，一見ランダムな立地をとるように見える。しかし，詳細に分析を加えると，各遺跡はそれぞれの時期に応じた水田可耕地に臨んで立地することがわかる。水田の有する高度に政治的な性格によって，農耕集落の存在形態が規制されるようすもしだいに判明しつつある。

このような状況の下で熊倉遺跡を分析すると，平野部の集落の立地パターンにはあてはまらないことがわかる。遺跡周辺には，水田耕作の可能な土地は全くない。

熊倉遺跡の成立は9世紀後半であり，水田農耕を経済基盤にした律令体制下の集落である。この点で，熊倉遺跡は，政治的にはもちろん，経済的，社会的にも平野部で展開する集落の動向とは異なる歴史的過程のもとに成立した可能性が出てくる。すなわち，平野部に展開する，水田耕作に中心をおく農耕集落を「里棲み集落」として捉えた場合

白砂川沿いに小雨の集落を望む
熊倉遺跡は後方の山の向こう側になる。

＊能登健「群馬県における埋没田畠調査の現状と課題」『群馬県史研究』17，1983．2

熊倉遺跡をはじめとする山間部集落のうち，水田に基盤をおかない農耕集落を「山棲み集落」として対置すべき内容がここにある。

今回の熊倉遺跡の発掘調査では，このような視点にもとづいた，山間部における農耕集落の成立とその展開を究明することが大きな目的の一つでもあった。

2　里棲み集落の発展プロセス

稲作農耕の開始によって成立した農耕社会は，水田耕作の適地のひろがる平野部を中心に展開した。そして，開発の進展に伴って，その範囲は外縁部，すなわち平野部に接する山麓や丘陵の谷あいへと拡大してゆく*。ここでは，これら平野部に展開する里棲み集落の発展プロセスについて概観する。

伝統集落　群馬県下における稲作農耕の開始期については，未だ明確になっていない。しかし，弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけて，県内西部一帯に分布する樽式土器や，県東部を中心として古墳時代前期に出現する石田川式土器を使用した集落が水田耕作を行なっていたことは，発掘調査によって確実になっている。現在，水田そのものが確認されている4世紀中葉には，大規模な水田耕作が展開されている。この時期の水田は，中小河川の流域にかかる沖積地が選定されており，より少ない労力によって，より効率的な農作業が行なわれている。用水の確保は，河川から容易に取水が可能で，しかも水管理が自在な最良の水田である。このような良好な水田は，その後も継続的に耕作が行なわれ，居住域では，弥生・古墳時代前半から，奈良・平安時代に至るまでの複合遺跡をなしていることが多い。農耕社会におけるこのような継続的な住居を有する遺跡は，伝統的な集落としてとらえられる。

第一次新開集落　5世紀末から6世紀代にかけて生活体系に大きな変化が現われる。住居ではカマドが付設され，居住域は拡大・拡散がくりかえされる。これらの変化は水田耕作地の拡大に一致すると考えられる。伝統集落では，居住域が継続しつつ拡大するが，このほかに，伝統集落周辺にも新しい集落が発生している。この新しい集落は，河川のない谷に面している場合が多く，想定される耕地は欠水性沖積地にあたる。この欠水性の沖積地は，かつて何らかの要因をもって沖積化されたところではあるが，当時の現状では河川あるいは湧水などが無く，伝統集落の形成時には無視されていた地点であった。しかし，用水の確保さえなされれば良好な水田地帯になるところでもあった。ここへの進出は，農耕用の溜井を掘ることによって可能となる**。溜井灌漑の出現が，新開地への進出を可能にした。この第一次新開集落の成立期は，耕地の急激な増加が促されるとともに，群集墳と呼ばれる新しい墓域が発生した時期でもあった。

第二次新開集落　6～7世紀を通じて，水田耕作の適地は，ことごとく開田されていた。しかし，執拗な開田政策は続行されることになる。残された可耕地は平野部の過水地帯や開析谷支谷の冷水地帯のみであり，この部分が対象となる。水田耕作技術のうち最も大切なものは，稲の生育に伴う水管理であり，冷水・過水地帯の水管理は，技術的に最も難しいものであった。8～9世紀以降は，平野部で最後まで残された湿地や，谷地内の腐植未分解の土壌を有する冷水・過水地帯にも，収穫量の少ない湿田が開かれる。このような段階に成立した集落は第二次新開集落として分類することができる。

* 能登健・小島敦子「弥生から平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会，1984．3

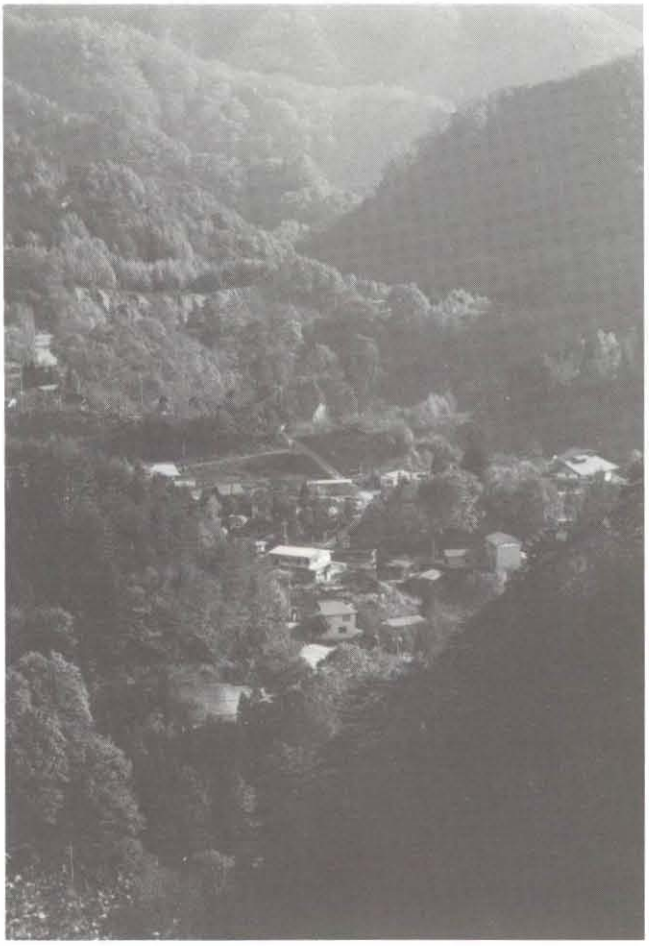
** 能登健・石坂茂・小島敦子・徳江秀夫「赤城山南麓における遺跡群研究」『信濃』35－4，1983．4

3　白根山麓の遺跡分布

平野部における集落の発展プロセスは大きく三段階に区分される。そしてそれぞれの集落は，その多くが基本的な生産基盤としての農耕を水田耕作地に求めている。このような状況に対して，熊倉遺跡は水田可耕地が全くない奥山に立地している点で特異である。

白根山麓一帯は，火山山麓であるとともに，高冷地であるために，現在でも未開発な地が多く，そのために遺跡の発見も少ない。発見されている遺跡の多くは戦後の入植による開墾時に発見されたものが多い。現在までに，白根山麓およびその周辺では，30か所の遺跡が確認されており，その内訳は，縄文時代（前・中・後期）17か所，平安時代（広義の国分式期）13か所である。弥生・古墳時代の集落および古墳は未発見である。

平安時代の集落は，その多くが標高1000m以上のところに分布している。立地傾向は，山麓末端にひらけた比較的平坦な部分に集中しており，熊倉遺跡はその典型といえよう。谷底での遺跡は1か所のみである。いずれも居住域の近くには，生活用水の確保が可能な小河川や湧水がある。しかし，すべての地が層厚のある黒ボク土に覆われた地域で，地形的にも水田可耕地はない。発掘された平安期の遺跡は，熊倉遺跡のほかに，草津町井堀遺跡がある[*]。井堀遺跡は，住居址1軒のみの調査であるが，その形態は熊倉遺跡の住居址に近似しており，出土遺物による年代観も，9世紀中葉でほぼ一致する。



谷底に立地する花敷の集落
花敷は川底から温泉が湧出しており，それをとりまくように集落が立地している。

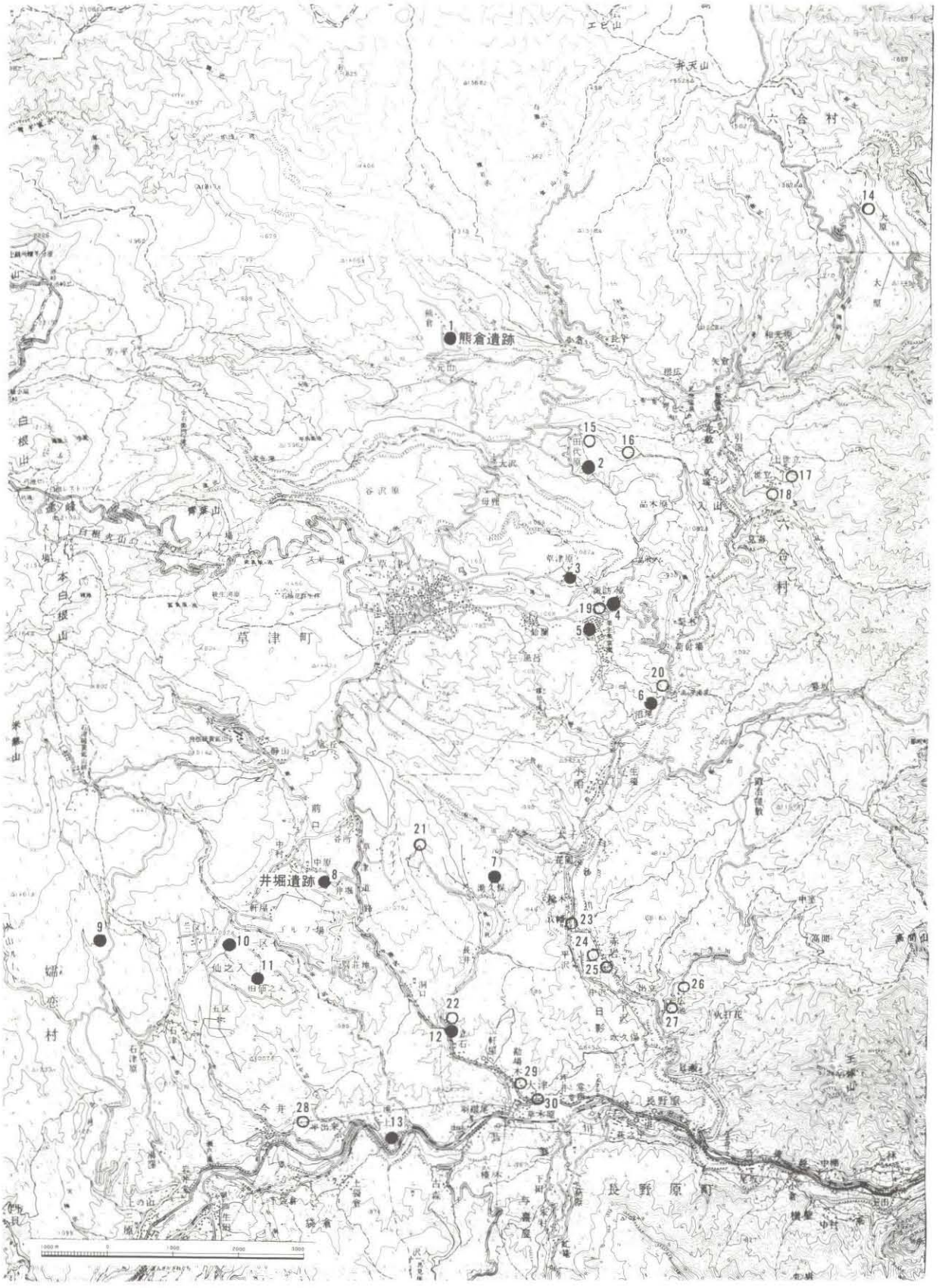
一方，縄文時代の遺跡は，山麓と谷底との両方に分布している点で，明瞭な棲み分けの区分がなかったことを物語っている。これに対して平安期の遺跡は，先述のように山麓平坦地に集中することが注目される。現在の集落は，ことごとく谷底に拠点を有しており，この点から比較すると対照的な相違をみせている。

4　山棲み集落の成立

以上の結果から，熊倉遺跡の平安時代集落は，過去からこの地で生活が営なまれていたものではないことが判った。平野部の良好な沖積地を中心として水田耕作が開始されたことによって，山間部に住んでいた人々もこぞって平野部へ移行をはじめていった。すなわち，水田耕作の開始とともに，山間部は主要な生活の舞台からはずされていったのである。山間部での生活が再び開始されるのは，平安時代になってからのことになる。

山間部に再び集落が進出する時期は，平野部ではすべての水田適地が開発しつくされて，最も劣悪な条件下にある冷水・過水地帯にまで，盛んに水田耕作が進出している時期でもあった。平野部における農耕集落は，水田耕作とともに畠作もさかんに行っ

＊井上唯雄『井堀遺跡』草津町教育委員会　1974．3



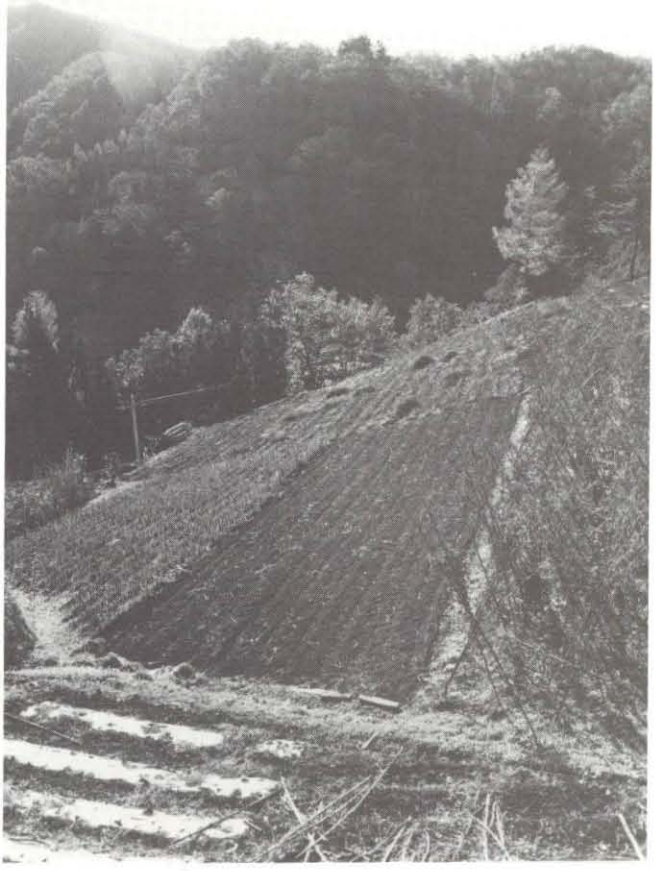
白根山麓の遺跡分布　●1～13平安時代　○14～30縄文時代

ていた。群馬県下では，すでに4世紀代には畠作址が確認されており，6世紀や12世紀およびそれ以後の広域的な畠址の調査も行なわれている。しかし，居住域はあくまでも水田耕作を指向した形で立地している。前項で述べた平野部における集落拡大・拡散のプロセスは，あくまでも水田耕作に固執しているという点で，単に民衆の意識のみにその要因を帰することはできない。農耕社会において水田のもつ政治的側面の分析が必要になってくる。もちろん，山間部への集落進出も，このような状況下での平野部における集落動向に規制され，依拠していることは当然であろう。

山間部の集落の主要な生活の基盤は畠(畑)作農耕であった。従来，このような立地状況下の集落は，特殊な生活様式として，狩猟民，杣人，山岳信仰などにかかわるものとして考えられてきた。しかし，歴史学的，民俗学的な分析によっても，主な生産手段をこのような特殊な生業に求められる生活様式は普遍化されていない。現在の六合村でも木工が盛んに行なわれてはいるが，これが生活の中心をなし得ているわけではない。熊倉遺跡や井堀遺跡の発掘調査でも，特殊な生業を示唆する資料は得られていない。むしろ，〝里〟に対する〝山〟という，畠(畑)作を根幹とした生活様式を考えざるを得ないことになる。*

群馬県の山間部には，白根山麓と同様に，縄文時代と平安時代の混合という遺跡分布を示す地域が多い。そして，これらの地域に共通する点は，いずれも里の世界から隔絶された地域にあたっている。すなわち，平野部，あるいは平野部と他の地域を結ぶルートから，さらに奥山へと入った地域である。もちろん，それらの地域のほとんどは，現在に至っても水田耕作が不可能である点でも共通している。水田耕作が政治的圧力として進められ，しかも水田農耕を中心とした世界観が構築されている体制下で，これと相反する，このような地域への移入は，体制内の動向というより，むしろ執拗な水田開田政策をとった体制に反する動きとも考えられよう。水田耕作を放棄するということは，それだけで，体制に対する反抗でもある。

里から隔絶された，すなわち里人や，それを包括する体制の世界観の域外と考えられる地域への進出の動因をここに見たい。



根広の耕地
六合村の耕地は傾斜地の畑が多い。人口に比べて耕地は広く、焼畑の経験者はいない。

5　熊倉遺跡の発掘調査

熊倉遺跡の発掘調査に先立っておこなわれた遺跡分布調査の結果から，白根山麓における平安時代の遺跡の立地が，高標高の平坦地に集中している点に注目した。これらの地点は，一見すると畠（畑）作に適した地形に思える。しかし，現在の集落はこの地点にはほとんどない。谷あいの傾斜地や谷底に立地する。

発掘調査によって，熊倉遺跡の存続期間は，土器型式にして一型式，あるいは，多くても二型式の範囲内にあることが判明した。山間部へ進出し，平坦な

*能登健「熊倉遺跡の再調査」『群馬文化』1983．3

「農耕適地」を選地した新住民たちは，短期間のうちに，その地点を放棄したことになる。同時におこなわれた火山灰の分布調査によって，集落の放棄は，火山災害とは無関係であることも判明している。

集落放棄についての疑問は，民俗調査によって解決の糸口を見出すことができた。この平担地には1m前後の黒ボクが堆積している。現六合村民は，〝黒ボク土〟を地味のやせた土地の代名詞として使用している。これに対し，谷あいの傾斜地は小礫も多く，耕作に不向な地形をしているが，土砂流出による攪拌などによって，作物に対してはむしろ良好な土壌を有しており，〝真土〟として区別している。一方戦後の開拓民は，平担な黒ボク土地帯に進出し，その地味の悪さを肥料の大量投入でおぎなっている。また，この地点は霜害地帯でもある。地形的には農耕適地であるが，地味の悪さと気象条件から，これらの平担地は農耕には不適な土地であった。平安時代に進出した人々は，このことに気付いた時点で谷あいや谷底の真の農耕適地へ移動したと考えたい。その後は，これらの平担地は居住域，農耕地としての土地利用は積極的には行なっていない。平安時代の住居址が凹地のまま現在まで保存されていたことは，耕作などによる地形の改変がなかったことをも示している。

平野部にあって，水田農耕を基調にした生活様式を〝里棲み生活様式〟として，これに対する水田以外の耕作，すなわち畠（畑）作を基調にした生活様式を〝山棲み生活様式〟として農耕社会における二つの生活様式の抽出を試みた。この二つの生活様式は，体制の内と外にある点で象徴的な差異をみせることになる。里棲み生活様式での世界観は，里から見える範囲，すなわち里から一望できる山の稜線の内側の世界ということができる。群馬県では，6世紀代に赤城山荒山の山腹に櫃石信仰が成立し，その後平安時代およびそれ以後には，大沼・小沼信仰，地蔵信仰へと発展してゆくことになる。この間に赤城山麓は，平野部（現在の水田卓越地帯）の里棲み生活様式の拡大としての谷地田の開発に伴って，山から里山へ，そして里棲みの生活域へと地域拡大がおこなわれる。そして，このプロセスでも，山麓高標高地帯（現在の水田・畠作混交地帯）では，縄文時代以後に一担集落のとだえたところへの再進出となっていく。

一方，これら里棲み生活様式の外側である地帯には9世紀ごろになって新しい生活様式が成立する。この生活様式は，里における〝山〟とは異った，いわば〝外界の山〟（現在の畑作卓越地帯）の中での山棲み生活様式として新たな展開をはじめることになる。律令体制の崩壊に伴って出現した新しい生活様式といえよう。

農耕社会における二つの生活様式

山間地B	新生活様式の出現	9C～
山間地A	（山岳信仰）	6C～
山麓・丘陵地	**第二次新開集落** 谷地田の開発	8C～
平地B	**第一次新開集落** 溜井灌漑の出現	5C～
平地A	**伝統集落** 稲作農耕の開始	1C～

民俗学からみた熊倉遺跡

千葉　徳爾

1　日本の山地高位集落の特質

近年の日本経済の高度成長に伴なって，山地に位置した集落の高度限界はその平均高度を低下させ，限界に近い集落では人口の減少とその老齢化が顕著である。本稿でとりあげる熊倉遺跡も，特にいちじるしい災害の痕跡を帯びずに放棄されている点で，古代においてこのような社会的変革の結果として放棄された山地集落の1つではなかろうか。以下，かような視角からそれについて考察を加えてみたい。

日本の高度限界に近い集落について，藤田佳久はその特質をつぎのように整理した。まず，小牧実繁・井上修次は初期の地形図上に示された山地集落を求め，その大部分が日本列島の中央高地とその周縁部に接して存在し，その標高が1000～1200m（すなわち熊倉遺跡クラスのもの）までは大半が農業生活を主としているものの，1300mを越えるものは交通路に沿う茶屋，休憩小屋あるいは信仰者のための社寺，或いは牧場小屋や鉱山・温泉などの農業以外の機能をもつ集落に限られ，例外的にこの高度でも農業集落が存在するのは関東山地の千曲川上流の谷底平坦部のみであるとした。山口源吾は実地調査によって林業集落である木地師居住地・製炭者小屋・林業労働者住居が1400m以上まで分布することを知ったが，それらは林産資源の変動と共に位置を変え，数年及至数十年で集落が移動することを認めた。現高度成長期の経過後は山地の道路輸送の発達と家庭燃料としての薪炭の価値が失われ，それに依存したこれら集落はほとんど消滅している。以上の概観によっても明かなように，近代以後における山地集落高度にみてもその高度および水平位置には大きな変動が認められ，低地農耕集落にみられる長期の安定性とは異るものがある。

さらに，これら高位山地集落の居住者を考えてみよう。近世末期における飛騨地方の生産物とそれによる住民の栄養条件とを考察した国立民族学博物館研究員らの研究によると，同地方で高位の山間集落は海抜1000m以上のブナ帯に接する高さに存在し雑穀栽培による自給生活を営み，一部では堅果及び山菜が補食用として使用された。それらは栄養価としては低地集落の中心的食糧としての米にくらべて，さほど劣るものではなかったけれども，全体として動物性の蛋白質及び脂肪分とカルシウムなどの摂取量が少なく，逆に今日にくらべて塩分の量がいちじるしく過剰であったとみなされる。ヒエを主とする畑作雑穀は多くは焼畑の経営によって栽培され，ソバ・アワ・アズキ・ダイコン・カブラなどと輪作して地力を維持し，それを終了すると耕地と林地とを転換するという方式をとって生活した。しかし彼等住民は低地と異って自給もしくは商品としての農作物のみに依存したものとはいえず，林産物の採取・加工，狩猟及び漁獲その他鉱産物や以上の諸産物の運搬輸送といった諸種の労働によって生計を維持したとみられる。また，これらの住民の職務は年間を通じ一定ではなく，夏は漁業，冬は伐採・製炭・狩猟と異る労働に従うほか，家族は俵あみ，縄作り，竹細工などの副業も行うなど，一家で多様な生産活動を行ったと考えられる。

より古い時代を考えるならば，平安時代末期のこの地方住民の生活の特質を『延喜式』の記載からうかがうことができる。すなわちその「主税」の項にみれば正税・

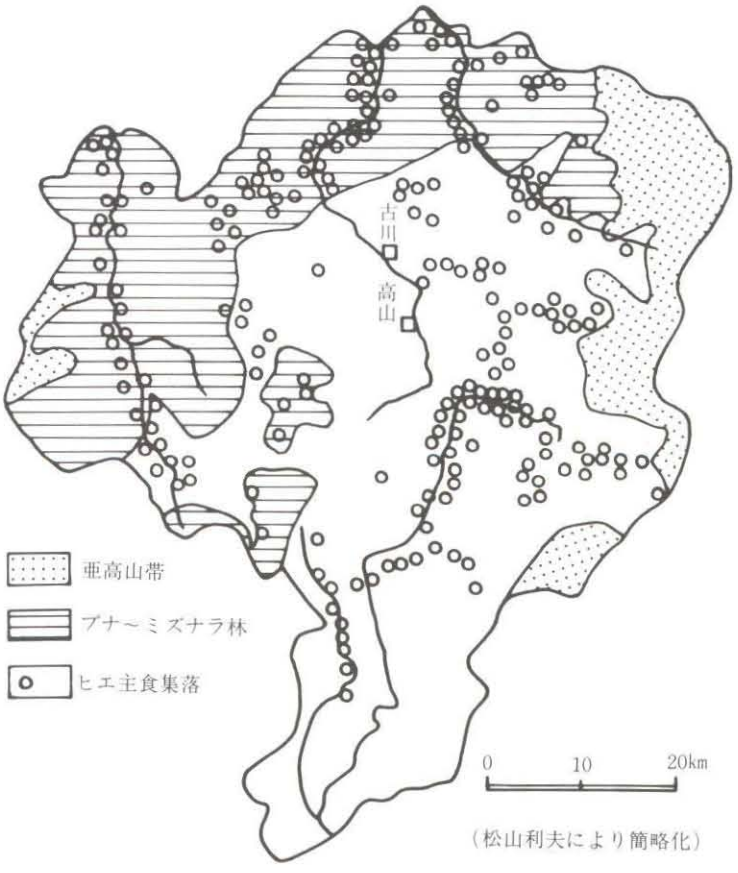
公廨としての稲の数量は各4万束で，隣国美濃国のそれ各30万束にくらべ1/7.5にすぎず，その国分寺料4万束に等しい。飛騨の国分寺料はこの1/8である。これらは淡路・佐渡などの島国とほぼ同じく水稲生産量が極めて少ないことを示す。「民部」では交易雑物としての品物がなく，匠丁百人という人を資源として出すことが定められていた。いわゆる「飛騨匠」であって木工に従事する人びとである。また「主計」の項にはその浮浪人その他，すなわち非農民として一地に定住していない人びとに対する商布の貢物が義務づけられている。これは同じく山国である信濃国の住民と同様であって，これら中央高地帯に非農業民が少なくなかったことを意味するであろう。さらに「典薬寮」のところには，猪蹄2・羚羊角30があげられ，野獣の多かったことがうかがわれる。この羚羊角は他国からの別貢雑物中の零羊角の数にくらべても格段に多量であるから，これに准じて他のクマ・シカ・サルなども多数棲息していたことは推測に難くない。したがって，山地高位集落の内には古くは非農業的な生活を営むものが稀でなかったことが，古代から近世末までの飛騨地方の事例によってもうかがってよいと考える。

2　ブナ帯の居住条件とその事例—石川県白山麓の場合—

さきに記したように，山地集落の高位のもののうちには低地・平坦部の集落にみる水稲栽培を中心として生活するものが比較的に乏しく，農耕的土地利用としては山腹を焼畑式に輪作し林地との相互転換を特色とする場合が多い。このことは時代を溯るほど著しかったと考えられ，さきの『延喜式』でも諸国出挙正税公廨雑稲のうち大半の国には「修理池溝料」なる費目の稲が認められているが，これは水田灌漑の目的とみなされる。この費目のないのは水田のない志摩国・対馬島のほかいま論じている飛騨国のみで，正税等に若干の稲があるにもかかわらず灌漑用の池溝修理費が計上されていないことは，水田が極めて小規模で国費による灌漑用水の維持に値しない程度のものであったことを意味する。したがって，農作物も畑作のヒエ・アワ・ソバ・ダイズなどとダイコン・アズキ・カブラなどの副食用作物が主であったらしく，これらは地温・水温・気温の低いことに対応した選択であり，全体としての温量の乏しさを示す。かような指標としてもっとも地域的条件を現すのは森林植生状態であって，日本列島でのこの地域ではブナ～ミズナラ林がそれである。

現代まで飛騨地方に同じくこの林帯に属し，焼畑式の耕作に依存してきた石川県白山西麓の白峯地方の土地利用と集落

第1図　飛騨の植生とヒエ主食集落(1870年代)



(松山利夫により簡略化)

との関係を事例として考察してみよう。この地方では近世を通じて焼畑経営が行われ，小数戸の分散的な農場式の集落が山中約800mまでと緩斜面を利用して立地していた。近世末期の戸数は約500戸で，うち190戸が谷底の狭い耕地に依存し，約200戸が山腹耕地に小屋を設け耕作期間そこに居住し，収穫を終えれば谷底の本拠地に翌年の農耕開始まで帰住するので，これを「出作り」と称した。さらに約200戸は経営耕地内に通年居住して自給生活を営んでいた。山腹のかような住宅を含む一団の耕地をムツシと呼び，その耕土の良好な部分は常畠（キャーチ）として，日常副食及び衣料としてのダイズ・イモ・ダイコンおよびアサ・クワを栽培する。キャーチと居宅をめぐる林地は薪炭及び用材を供給し，やや遠方の斜面林地を順次焼いてナギハタにし，ここにヒエ・アワ・ソバなどを播種して数年間輪作し，遂次林地に転換してゆく。その範囲すなわちムツシの大きさは20～50町歩にも及んだ。借地の場合もこれに准じて借地者は親子数代にわたって自主的に土地を管理経営するのが原則であった。この通年山中に居住する人びとは季節的な耕作を行って谷底の集落に本拠をもつ家と同じく，従来は谷底居住者のうち人口が過剰となった結果として山中に耕地を求め，遂に谷底の家から分離して山中に通年居住するようになったものとみなされ，同じ出作り生活に属するものとして「永久出作り」「永住出作り」などと呼ばれたが，果してそのようにみなすことができるであろうか。

近世を通じて全国的に人口は前半若干の増加があったものの，後半期はほとんど停滞した状態であった。ことに延宝・享保・宝暦・天明・天保などの顕著な凶荒に伴う飢饉と，屢々襲った痘瘡・麻疹・コレラなどの伝染病による人口減少とによって都会以外の人口増加はほとんどなかったはずである。それにもかかわらず，100戸の谷底集落から400戸の過剰農家が発生したという確率は，いかに白山麓の住民の生活が余裕ある，しかも隔絶された健康的なものであったとしても，極めて例外的現象といってよかろう。かような人口過剰に伴う出作り集落形成という通説は，以上の見地からみれば再検討されてよい。事実として天保の飢饉には一村全滅した村落があったし，その後はこれにそなえて稗の貯蔵が強制された。また，その以前から冬期の食糧不足のための出稼・物乞いの移動者が多数に出ていったことも周知の事実であった。

上記の疑問に対してこれを支持する事実の若干が近年得られつつある。佐々木高明は昭和40年代の高度成長期に尾口村地区でムツシ耕作中の9戸中の8戸，また同じころ横山惣吉は白峯村地区で同様に5戸中の4戸が，祖先以来約200年間山中のみに居住していた家系であって，季節出作りではなかったことを明かにした。これは高度経済成長に応じて季節出作りに従う者の大半がそれを中止し，農業以外の職業に転じた結果として，ムツシ耕作者の永年山中居住をつづけた家系の比率が高まった関係もあろうが，山中居住者といえども転職の自由は同様であるから，事実としてこの年代までムツシ経営の山中居住者，すなわち近世中期以後には出作りとして人口過剰のため谷底集落を出て山中に耕地を求めた高位集落としての新来者に属しない住民が，予想外に多かったことを語る資料といえよう。これらの中に古い山棲みの人びとの系統が残存していた可能性を否定することはできない。

報告者はまた白峯地区の2，3の寺院過去帳を調査し，近世中期以来山中に居住していて死亡した記録中で，その地名が現在知られている過去の山中の居住地と一致

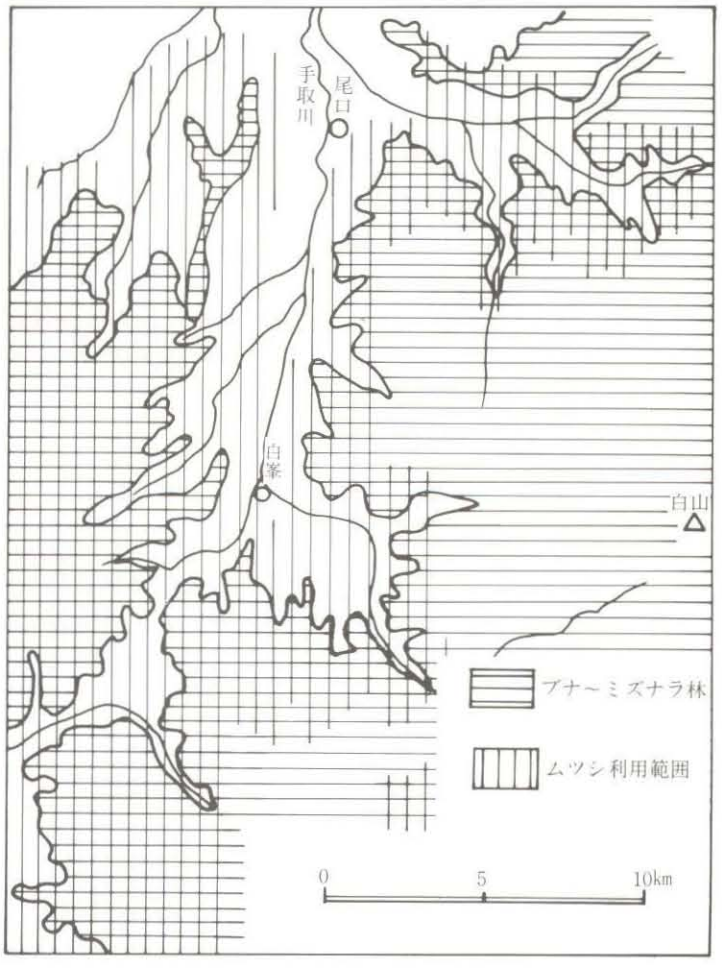
するものを求めた。その結果はムツシ住民の大多数は，もと白峯地区よりも南方に当る越前九頭竜川流域の山間に居住していたもので，しだいに北方に移り手取川中流の山地に及んだ人びとであることが明かになった。これはまた嫁入婿取の通婚する知人親族の範囲，物資の流通交易の区域，さらに居住地の地名の成立など各種の伝承によっても裏づけられる。これらを根拠として推論しうることは，日本列島中部の高位置集落中には，低地から耕地の不足いいかえれば過剰な農民労働力が，山地に耕地を求めて入込んできた多くの低位の山地集落とは発生系統を異にして，より以前から山中生活を営んで比較的短期間にその集落位置を変える確率の大きかった集団が存在する可能性を否定しえない。それらは水稲耕作困難なブナ林帯にも適応し得る生活であったようである。

3　熊倉遺跡についての仮説の適用

上記は現在の山地集落の特性から得られた山棲み住民集団存在の仮説であるが，これを熊倉遺跡の状態にどの程度に適用することができるかを考えてみる。

能登健によれば，同遺跡は標高1120mの草津白根火山東麓の裾野に当る段丘面を占め，植生相はブナ～ミズナラ林帯に位置する。現在段丘面の大半は草原又は農耕地化されているが，クロボク土壌が広く覆い地味は不良である。熊倉と同様の位置にあって時期もほぼ同時期の9世紀後半から10世紀前半の遺跡に相当するものは草津白根火山麓のみに12～３カ所も知られ，いずれも比較的短期に居住が終っており，しかも住居の放棄は噴火等の災害の結果とは無関係と認められている。つまり比較的短期間に居住地の移動が行われたと考えてよい。従来はこれらは焼畑経営による自給農耕生活をいとなむか，又は製鉄その他山地資源採取の目的の住居とみなされたが，それ以外の解釈の可能性も前記近代までの高位山地集落の類型に属するとみなせば，かなり大きいのではあるまいか。

第２図　白山西麓の植生と焼畑地帯の関係



熊倉遺跡が形成された９世紀後半から10世紀前半は，天皇の治世でいえば文徳―朱雀の時期で，既にかなり正確な史料が残されているが，多くの文人政治家が輩出し高僧も数多く海外との交流も盛で，良き治世のようにみえながら各地に災害が起り窮民も多く，貧富の懸隔がいちじるしくなる一方東北日本の辺境では屢々騒乱があった。したがって，官府の統制がきびしくなり徴税も厳重であったからこれを避けて律令国家の基礎をささえる水稲耕作地帯から，山間の課徴の手の及びがたい土地で畑作によって生計を維持しようとする人びとがあったのであろう。

近世中期の飛騨地方の水稲栽培範囲を示す「飛州志」の記載でも，500m以上の水田はヒエを栽培していたし，これに先立って2世紀の16世紀後半でも北上川上流盛岡市郊外では植生はブナ～ミズナラ林に達しない高度でありながらも水田はすべてヒエ作であった。したがって，この限界以上は水稲栽培圏外で，同時に律令体制の権力も弱いものであったにちがいない。ここに居住するならば水稲栽培の欲望さえ抑えて，焼畑式の畑作経営によって生活する場合は比較的に抑圧されない生計が立てられたのではなかろうか。ただし，施肥は乏しい上に関東方面の火山灰の堆積地では，地力の低いために数年にして耕地を移動し，これに伴って住居地も比較的短かい期間で移転させる必要を生じたにちがいない。そのほかに平地権力の探査をのがれる必要もあったろう。こうした生活の痕跡はおそらく熊倉遺跡の状態にかなり類似したものを生むこととなると考えてよいであろう。

要するに熊倉遺跡住民の生活は，これを中世から近世に求めれば，飛騨山地の住民が『延喜式』にえがかれた類型であり，また『斐太後風土記』が記載した近世末期の姿にも近いものであった。すなわち非農耕民もしくは雑穀栽培農民のいずれかの型に属し，比較的短期間に耕地・住居を転して山中生活をつづける点で，近代までの白山麓手取川流域にみられた住民とほぼ同様の，平地住民からみれば袖乞いに近い状況であったにちがいない。

これらの類型に属する生活を総称して「山棲み」と呼ぶならば，この特色はおよそつぎのようになるであろう。

1. ブナ～ミズナラ林帯又はブナ帯下半分の高度に位置する。
2. 戸数はあまり多くの集団をつくらず，比較的短期間一地点を占居するだけである。
3. 水稲栽培は極めて稀で生計のため農業以外の兼業を営む場合も多い。
4. 必要以外水稲作地帯に出てゆかない。

4　現存伝承よりみた熊倉遺跡

熊倉遺跡の居住者の生活形態の痕跡が，現代の六合村や草津町の住民と何等かの結びつきをもっているのではないか，たとえば白山麓の山地住民の一部が谷底集落からの出作りによっているように，熊倉の住民であった人びとは山下の居住地から一時的に移動して生活し，再び季節的に又は必要がなくなった場合に，山下の本拠に帰還するといった行動をとっていたのではないかという問題は，上記の概括論とは別個に，具体的な課題として存在する。報告者はこの点について入山地区を中心に現在の民間伝承の中に，熊倉遺跡とのつながりを示すものが有るか否かの調査を若干試みた。まず，現在入山地区に残る土地利用技術のうちに，熊倉の集落の存在意義を考える上で極めて関連が深いと推測できるものがあるか否かをとりあげる。報告者は長平・根広・和光原・諏訪原・世立・引沼で焼畑耕作について聞書を行った。その詳細は資料編にゆずるが，この地区の焼畑経営は概して小規模で生活上重要ではなく，分水界の北方の秋山郷におけるような重視される現象ではなかった。その最大の理由は群馬県側の森林が早い時期から木材資源として価値が高く，下駄材・曲物・杓子などとして商品化されるものであり，その代りに食糧は雑穀以外に米が購入され得た点にあるらしい。その一因は周知のように草津温泉があって，その需用があったほか交通輸送の便が秋山地方にくらべはるかに多かったためである。早くから森林の大半が国有林化され，また文政年間に秋田マタギの出猟地であった

ことも，草地が少く大木が多いためであったと考えられ，古くから焼畑はあまり行われない時代が続いたらしい。ワラビ粉とワラビ縄が産出している点からも，焼畑によって雑穀を得るという方向は少なくも盛とはいえない証拠となるし，文政の村方書上によっても茅の焼灰の生産が述べられるところからも当時から焼畑は稀だったようで，小地名としても入山のうちに「キッパタ（切畑）」の名がみえるほか地方語としてのヤキマキに関する名称はない。したがって，古代からひき続いて出作り耕作的焼畑が近世まで継続した可能性は乏しい。ことに西南日本の焼畑地帯に共通した原始作物としてのサトイモ（タロ芋の系統）が全く栽培されず，この作物がかえって胡麻と共に禁忌植物となって来たことは，古代的焼畑が文化的な面で中世以来のこの地方の作物として全くうけいれられず，それ以前の農耕文化と以後のそれとは文化系統的に異なったものであることを証明するものといえよう。言語的にも焼畑耕作地に一般的な，ヒエ・アワ・ソバ等畝立をせず散播を行う作物に対しては，その栽培を「蒔く」と呼んでイモ・アサ・マメなど園耕作物についての栽培を「ツクル」と称して区別する慣習が，ここにはほとんど普及していない。これは住民の焼畑農耕文化が不完全な基礎に立ち，相対的に新来の補足農業であったことを意味するものと判断される。

また別の資料として小雨地区と草津温泉との間に行われた季節的移住慣行も，草津白根火山地域（裾野を含む）に対するこの地方住民の歴史的心理を示すものである。熊倉および同類型の高位集落遺跡の位置は，草津温泉とほぼ同じ高度にあり白根火山の裾野の一部を占めるが，これらが山麓の六合村住民の祖先とかかわりがあるとすれば，同高度の草津温泉も資源として価値があるのだから通年間もしくは季節的な住居が10世紀ころから，温泉附近に存在しても差支えない，というよりも療養その他の利用のために居住する者があるのが当然といってよい。少なくも12世紀鎌倉時代には草津温泉はある程度人びとの利用したところであるといわれる。ところが，近世には草津の旅館・商店等は約400m下方の小雨地区に降って冬季を過す生活を営み，温泉の湯ノ花・硫黄の採取もこの期間は禁じられた。知識人は浴客がなく寒気も甚しいために生れた習慣であると解釈しているけれども，住民の伝承では，この期間は山上に山の神々が集会されるので謹慎してその区域を犯さないのであると伝えている。単なる気温による季節移動であれば，年によって移動の時期は変ってよいはずであるが，小雨の住民には冬期は旧9月一杯に下山し春は4月8日の祭が過ぎてから登山するという規定が守られていた。このほかに六合村民が白根明神の禁忌として里芋と胡麻を栽培しないという禁忌を近年まできびしく守っていたことを考え合せれば，冬季草津住居の禁止は単なる気温や硫黄盗掘禁制の便宜的な規定に出たものではなく，強い山岳信仰のあらわれによるものとみてよい。周知のように民間信仰上の4月8日は単なる釈迦誕生日ではなく山の神の祭儀の日であり，また10月も神祭の時であってこの間は山の神の支配する区域に立入ることは戒められたのである。したがって，もし熊倉その他が現在の六合村民とつながる住居址であるならば，それは草津温泉と同様季節的居住地であった可能性が大きいはずである。またそうでなくて，考古学的に通年居住が行われていたものであったことが確かならば，それは現六合住民の信仰と相反するものといえよう。

1984年3月

熊倉遺跡発掘調査の課題と展望

市村勝美・山本清司

1. 社会教育の中での発掘調査

熊倉遺跡は，発掘調査の結果営々と集落が営まれたものではなく，平安時代になって突如出現したムラであることが判った。また，このムラはその後間もなく廃絶されていることも判った。この事実をどのように解釈するかの問題は，同時におこなわれた多くの調査によって解け始めている。私たち，六合村で社会教育を推進する者にとってこの調査による最大の収穫は，“熊倉ムラの人たちは六合村のパイオニアであった”とする見解が示されたことである。山の奥で様々な試行錯誤を繰り返してきた山間住民の生活の原点が熊倉にあったわけである。

昭和56年になって，熊倉遺跡が危機に瀕した。とりあえず，遺跡の保護を目的に発掘調査に入った。財源の少ない過疎の村にとっては，正直のところ大英断であった。その後の県教委との協議の中で，文化財保護行政における発掘調査は，単に遺跡を記録としてとどめておくのみではなく，資料化された遺跡の内容を新しい文化・生活・村づくりなどのための基本的な資料として活用することが本来の目的であると確信するに至った。

六合村も，御多分にもれず過疎の村である。若者の志向は町に向き、老人たちは活性を失いつつある。山村に生れ，育ち，汗を流した帰結がこれでは何んともさびしいかぎりである。村民生活の活性化を求める声は，ここ十数年来とだえたことがない。新しい村づくりが必要になっているゆえんである。

2. 山に根ざした村づくり

自分たちの住んでいる地域を歴史的に理解するということは，過去の風土の変遷を理解するということになる。それは，とりもなおさず新しい風土性を求めるための基礎をかためるということにもなる。

風土性とは，単にその地域特有の機構，地味，植生などを示す言葉ではなく，常に人間が介在して作られるものであると考えられる。人間によって開拓され，地形が変わる。人間が社会を形成し，集落をつくり上げる。そこで展開される様々な社会活動が地域を変貌させる。その結果として得られる景観が風土性である。すなわち，風土とは，その時々の人の心によって変貌をとげることになる。

今，平野部に展開する新しい社会の波は，山深き六合村にも押し寄せている。新しい社会の波は，古い習慣をことごとく否定し，近代的な社会をつくり上げようとしている。六合村もずいぶんと変貌をとげた。もちろん人の心もである。これら近代化の波を全面的に否定することはできない。むしろ，積極的にとり入れることによって新しい六合村を志向しなければならない。しかし，営々と培われてきた山間部の生活様式を捨て去ってまで，この新しい近代化をおしすすめてよいものかどうかは大きな問題となろう。平野部で培われた生活様式，そしてそれに基づいた社会の体系をそのまま，この地域に入れてよいものであろうか。地域に根ざした発展とはいったい何んであるのかを模索しなくてはならないのではないだろうか。

私たちは，熊倉遺跡の発掘によって得られた資料をもとにして，山に根ざした新

しい村づくりの構想原案を作成したので，ここに提示したい。

3．「心のふるさと」六合村づくり構想

私たちは，「黒い土をもった広大な平坦地を目ざした人たちが，その地味の悪さや劣悪な気象条件に気づき，その後谷底や傾斜地に移動した」という調査所見を支持したい。しかし，だからといって六合村のパイオニアたちが，ゆとりのある生活を展開していたとは考えられない。その場所でも，山間地という苛酷な条件下での生活であったろう。彼らはそのような中でも力強く生活を続けてきたのであった。今，私たちは，この歴史的な事実をしっかりと認識することが必要である。この地に根ざした先人たちの生き方を学びながら，この地で新しい社会をつくり上げてみたい。提示する構想図は，この考え方を根底にすえている。

山村生活資料館　まず，考えなければならないことは，六合村の地域を理解する方法である。ここでは「山村生活資料館」を中心にした活動を考えた。一口に六合村と言っても，その中にはいくつもの環境があり，いくつもの生活様式がある。山村生活資料館は、六合村を知るための基本資料を系統的に収蔵し，資料化を図る。あくまでも村民の学習の場であり，村民に理解できる資料化が最大の懸案となる。また，討論，会議，集会などの施設を併設し，六合村の歴史を根底にすえたコミュニケーション広場としたい。新しい村づくりの構想は，ここを拠点としてすべてが始まる。

ふるさとを知る親と子の会　歴史は生きている。生き続けなければならない。山村生活資料館の資料収集は，村民の手でおこなわなければならない。生きた歴史は語りつがれねばならない。歴史を持続させる絆は，おじいさん，おばあさんと子供たちの間でしっかりと組織してもらいたい。使われなくなった古い道具，語り継がれた生活の知恵，そして地域で根づいた伝説などは，老人の積極的な村づくりへの参加によって，新しい社会づくりの中で生々とよみがえるはずである。また，すたれてゆく年中行事をみなおして，幼ない頃の思い出をはぐくんでもらいたい。お年寄りの責務は大きいものであるし，これからはいそがしい毎日にもなろう。

あすの六合村構想委員会　青年たちは，あすの六合村の担い手として，社会を考え，発展させる責務がある。子供の頃から体得した生活信条を，皆んなで発表し分析することによって，現実化しなければならない。新しいものを獲得するためには，広範なしかも慎重な討論が必要である。すべての問題について，正面からあたってほしい。もちろん，自らの学習が大事であるが，村を離れた人からの意見も貴重であるし，他地域の実現も構想を培う重要な要素となろう。最も大切なことは，地域に根ざした新しい村づくりである。山村生活資料館を中心とした積極的な政治参加，行政への助言が必要である。地についた企画力とともに若者の

雪とのたたかい　春になっても融けない雪に土をかけて融雪をうながす。遅い春に対するいらだちかも知れない。

力強さが要求される。

学習とスポーツ　山村生活資料館を中心とした，広範な学習活動が必要である。コミュニケーション広場は，そのまま学習広場になる。ふるさとを知る親と子の会の活動によって資料館内には多種多様の「ライブラリー」が完成する。生活の支えとなった六合村木工は公開民家での「体験教室」として残そうではないか。歴史，自然，文学その他多くの「野外観察コース」もつくろう。学問の最先端を感じとるためには「入山シンポジウム」の開催も良い。

レクリエーション・スポーツも欠かせない村づくりのひとつといえる。郡民体育祭への積極的参加，野反湖マラソンのフェスティバル化は心おどる新しいお祭りになるかもしれない。白根山麓の地形を生かした六合村スキーマラソンも，この地域ならではの企画になると確信したい。新しいお祭りは"里がえり"のきっかけともなろう。

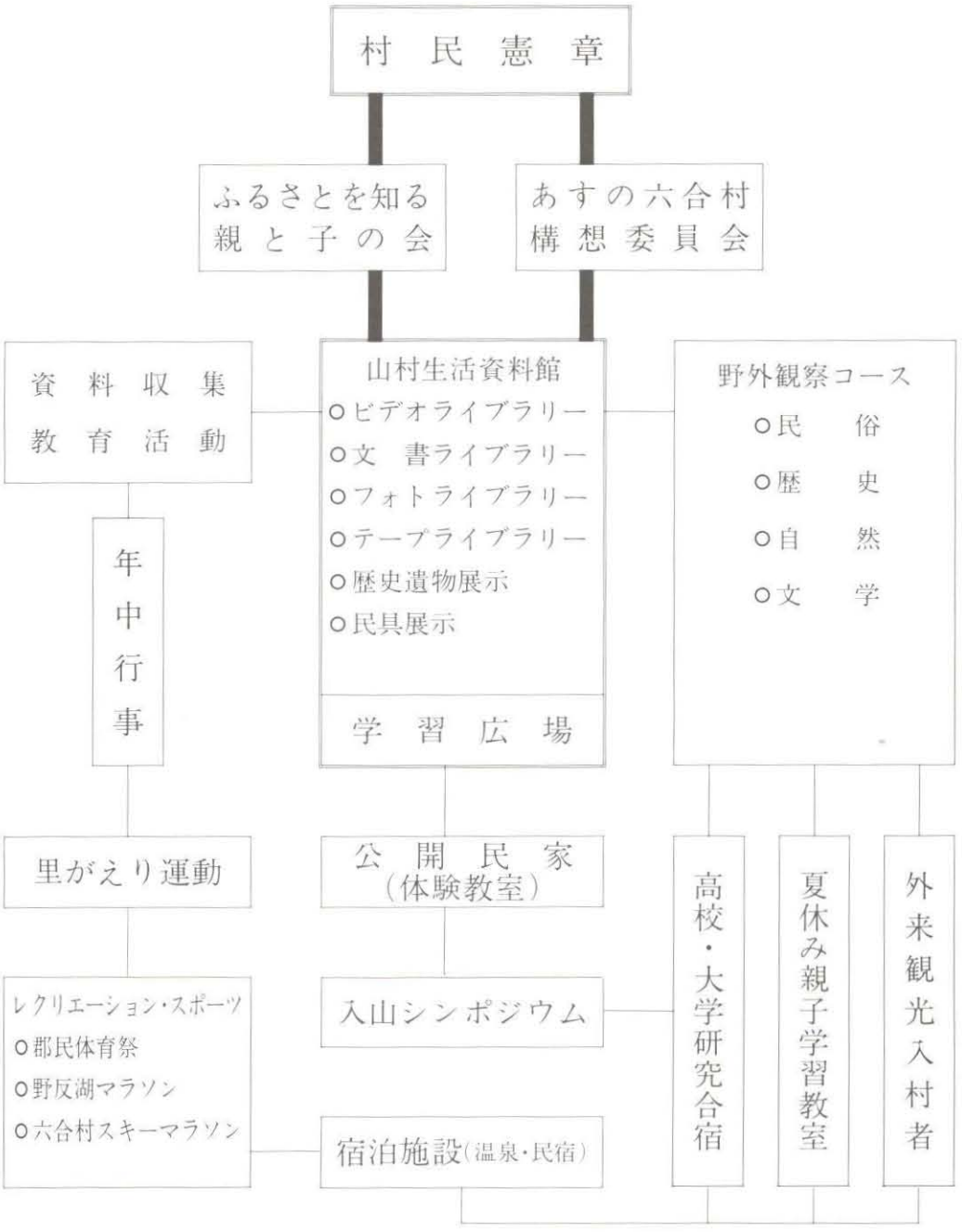
外来者の受け入れ　民俗の里六合村は，外来者も多い。しかし，それらの人たちの多くは，他の観光地への通過地点としての利用がほとんどである。"六合村に行ってみたい"という気持を村づくりに利用しようではないか。村人たちの積極的な学習・村づくりの活動は，外に向けてのアピールでもある。心ない観光者によって村内が乱れるのは困る。ともに学習できる環境づくりが必要になる。他地域の人たちにも学習のための学習教室や研究合宿のチャンスを与えてみたい。幸い，六合村には多くの温泉や民宿がある。下地づくりはすでに完備しているのではないだろうか。

4．おわりに

以上の構想は，熊倉遺跡の発掘調査を通して，六合村を理解し，新しい六合村を考えるためのひとつの案である。熊倉遺跡の発掘調査の結果は，今後多くの研究者間で議論され，さらに分析されるであろう。ここに掲げた私たちの構想案もまた，多くの村民によって分析され，実現化に新しい歩みを続け始めることであろう。

実りの秋　収穫は一年の努力の実りであるとともに、冬にたち向うドラマの始まりでもある。

「心のふるさと」六合村づくり構想



Ⅶ　おわりに

昭和36年の冬に，尾崎喜左雄博士によって発見された熊倉遺跡は，その後の永い年月のうちに新らたな視点をもって再び脚光を浴びることになった。当時の発掘調査は，6軒の住居址に対して実施され，高冷地の白根山麓に平安時代の集落の存在を実証せしめたのであった。

今回の調査は昭和56年から同58年までの3ヶ年に亘って行なわれた。調査の目的は，遺跡の保護策を講じるための資料収集が主眼であったが，学術的，教育的見地から，熊倉遺跡の有する歴史的意義の確立も重要なテーマのひとつになっていった。

熊倉遺跡は，廃棄された住居址が埋まり切らずに凹地として残っている点，そして遺跡一面を白根山噴出の火山灰が覆っている点などでも特異な遺跡であった。調査は，このような自然的な環境の保存や遺構そのものの保存を考慮した方法が採用された。試行錯誤の末に，ハンドオーガボーリングと地下レーダーによる遺構の確認調査が実施され，その実用性が実証されるとともに，多くの成果を得ることもできた。熊倉遺跡の住居総数は20軒を越える規模であることが判明するとともに，それらの住居址の配置についても，ほぼ確実になった。

住居址の発掘調査は，尾崎博士の1～6号住居址の調査に引き続いて，7～9号の3軒が新らたに調査されている。このうち，7号住居址は地表面に凹地が残されているたったひとつの住居址であり，トレンチ法による調査によって，住居址に伴う凹地であることの確認にとどめた。また，8・9号住居址については，完掘を行ない，住居の形態，遺物の出土状態の観察などによって，居住のあり方を中心にした調査が行なわれた。集落の年代も9世紀後半であるとの確証を得ることができた。

一方，熊倉遺跡の実態解明のための総合的な分析も試みている。初年度調査によって新井房夫博士によって命名された熊倉火山灰の分布調査は，火山災害の影響が，熊倉遺跡の生活に直接関係したものであるのか否かを知るために実施された。県内平野部では浅間山や榛名山の火山活動によって被害を受けた水田，畠，集落などが調査されている。今回の調査では，熊倉遺跡の生活に直接的な災害は与えていないことが判明したが，火山灰の降下年代の推定によって集落の生活面の把握などに役立っている。なお，火山灰の降下年代決定については，放射性炭素^{14}Cによる年代測定も行なったが，未だ年代値が出ていない。

プラントオパール分析は，熊倉遺跡の生業問題についてのアプローチの一環として行なわれた。県内水田址における稲作問題で成果を上げている方法であり，藤原宏志博士に依頼しての調査である。熊倉遺跡では畑作問題の追究としてキビ族の摘出を試みた。現在まで，キビ族の摘出に成功したが，これが栽培種であるか否かの問題が残っている。また，同時に検出されたススキ，タケのプラントオパールについても，キビ族との関連で興味あるデータを得ている。今後の重要な検討課題となっている。

民俗学的分析を千葉徳爾博士にお願いした。六合村の風土性を民俗学的に分析することを目的にした。また，このアプローチに関連して，調査員相互が考古学と民俗学の接点を求めるべく，隣地長野県栄村の秋山郷や宮崎県椎葉村の踏査も試みられている。その結果，能登を中心にして農耕集落の生活様式の分析が試みられ，水田耕作を中心にした里棲み生活様式と，畠(畑)作耕作を中心にした山棲み生活様式の区分が提唱されている。

また，今回の発掘調査の第一義的目的であった遺跡保存については，発掘調査によって得られた資料をもとにして，具体策が講じられつつある。文化財行政にたずさわる六合村教育委員会の担当者によって，熊倉遺跡を根底にすえた村づくり構想試案も提示された。熊倉遺跡の総合的な調査とともに何かが胎動を始めた感がある。

最後に，三ヶ年にわたる今回の発掘調査に，種々御指導，御協力いただいた関係諸氏に対し深甚からの感謝をする次第である。　　（松 島 栄 治）

資　　料

本資料は，昭和58年８月８・９日に行なった民俗の聞き取り調査の記録である。調査には，民俗学の千葉徳爾，考古学の能登健・小島敦子があたり，六合村教育委員会から中沢久吉が同行した。また，山村正夫氏については能登・小島のみで対応した。各話者の話しは２時間近くに及んでおり，すべてテープに収録されている。

・本資料は，そのうちの主要な部分を編集し，まとめたものである。

長平（ちょうへい）　本多春長氏　明治38年１月25日生

本多春長氏

今日はお若い頃の村のようすをお伺いします。

その頃は，外へ働きにいくのは変わり者で，家で重労働すりゃ食べていられた。おらの家でも百姓やる方だったが，１町歩ぐらいの段々のハタケだった。田も１反歩くらいつくってたが，重労働だし穫れなかった。戦争のとき，食料がないから開墾できるところは開墾した。えんがで耕した。今もたまには使う。

１日どのくらい仕事をしたのですか　春先だったら４畝歩鋤かえせなきゃだめだ。秋は「上肥え」といってササやカヤをあぜに入れるので２畝歩だな。（春は）入れるものがないので入れない。（カヤとかササは）刈ったままで入れる。だから深く投げこまなくてはいけない。無肥料じゃとれなかった。

アワ・ヒエ・キビ・ムギなどをつくるハタケや，その順序は決まっていましたか。　ムギが１年おきだ。その夏，ムギの穂が出たところへ３尺の巾でみんなサクあげてヒエ・アワ・ダイズ・アズキ・キビ……なんでもつくった。土地によって適した場所は経験でわかっていた。（種は）サクをあげといてそこへ蒔く。（つくる順序は）自分の家で勘案した。トウモロコシの他は連作しないようにした。ムギが刈り入れ終わると，ヒエだのが伸びてきてそれを刈り入れるとまたムギを植える。そのハタケのいい所を選んで，例えば１町歩つくっているとすれば，大ムギと小ムギで15つか（30畝）ずつくらいつくって，あとはあけておく。

遠いハタケ・近いハタケといった区別はありましたか

多少はあった。ダイコン・カブ・イモはとってきて食べるから近い方がいい。

ハタケが鳥や獣にやられて被害があるということはありましたか　スズメとかストとかいう鳥に一番食われたけれど穫れないということはなかった。ハトやウサギもきた。クマが出るというのでカイコのカゴで柵したり，鳴子を買って吊したり，かかしを立てたりした。カラスを吊せばカラスは来ないというので吊した。

牧草地は点々とあるのですか　部落ごとにまとめてある。馬一頭あたりの基準はないが戸数でだいたいの見当にした。長平は一番盛んな頃17戸あったが，38町歩ボクヤがある。１戸あたり２町か３町なければだめだった。１年中草刈って馬にくれたし，秋の彼岸にやる干し草刈りというのもあった。刈り干しにする人は大鎌持っていって両方から刈って翌々日までおいて６把か８把で１束（ぼっち）にして立てて干しておく，１日で30ぼっち，５反くらい刈った。10月下旬から11月にかけての雪の降る前に，干し草小屋に収納した。

木工は，土地の人がやったのですか　全部土地の人だ。おやじがつくる人はそれに教わってやるからつくれるようになった。小雨より下の人はつくらないが…。

国有林はどのくらいあるのですか　長野県は頭のいい人があって峠までみんな民有地にとったというが，こっちは山のシバをとってくると（民有地なら）税金でやられるというので，少なくとっておこうというわけで，90％ぐらいは国有林だ。（木は）払い下げるというより，黙って伐りゃよかった。そのうち，営林署が草津にできて担当区さんがいるようになったからもう１本も伐れなくなった。

山仕事に入った時，小屋をつくるのですか　ほとんどつくったよ。平らなところに三又柱をたててササやカヤを刈ってかけたものだ。そこで寝たり，飯たいたり，（木工の）作業ができるだけの大きさだ。場所がちがえば，つくりかえる。炭焼きも窯の脇に小屋がけしてこもった。

山に入ったらずっと下りてこないのですか　食料を奥さんが補給できなけりゃ，自分でしょっていかなくてはならないから，下りてくるよ。山では木を伐って細かくして荒木にして大体の格好をとって軽くして山から持ってくる。

山の仕事は専業でやっていたのですか　専業でやる人もあったし，ほとんどそれやらなければ現金収入がないから。普通の農家の人も冬は割にやっていた。（木炭は）白が多かった。黒は２割ぐらいだ。石窯だ。黒は土窯だった。（鍛冶屋炭は）安いのでほとんど生産しなかった。鍛冶屋から特別にもってこいといわれて焼くくらいだった。（運搬は）背中と馬だ。一番の搬路は草津だった。

ワラビはどうですか　ワラビは，どこの家でもというわけではないが相当やった。どこへ行っても井戸へいけば立

臼があった。ワラビの根は細く長く，トウバで掘って縄にした。(ワラビ粉を沈澱させるのに)桶があった。それに水を流して沈澱させる。

山には薬草がありましたか　センブリ・ユキノシタ・ダイオウレンなどがった。キハダもある。(富山の薬屋などが来ていたので)漢方・薬草はそんなに使わなかった。でもセンブリは胃痛にいいというのでよくくれたが，今は造林してしまって絶えた。ボクヤにいくらでもあった。

信州の方とは行き来があったですか　おらが小学校上がる頃，米と酒をずいぶんつけて信州の人が来て，おらの家に泊った。こっちからもワラビやしゃくしをもって行った。

根広(ねびろ)　中村信太郎氏　明治38年1月12日生

ここで生まれたのですか　京塚で生まれた。24才の時，ここへ聟に来た。(元の家では)農業は兄貴と姉さんがしていたのを手伝っていた。山仕事もね。当時とすればしゃもじをつくらなければ仕事がなかったので，埼玉県秩父郡大滝村や新潟・長野にかけての秋山という場へ行って，しゃもじつくりをした。元締さんがもっとつくってくれというので新潟県の山ノ内村へも一年行った。(新潟は)下高井郡と長野で沢ひとこえの境だ。雪が降るので秋は熊が出ておっかねえ。

誰にしゃもじつくりを習ったのですか　先輩だ。メンパつくる人はメンパ，しゃもじつくる人はしゃもじと区分されていた。しゃもじは木を乾かしたらだめだし，しゃくしは丸太を切ったり割ったりして仕上げる。曲げ物は特殊で，板をとっておいて乾かさなくちゃできない。わしは曲げ物をやったことはない。おやじはやった。

おやじさんは曲げ物をやれとは言わなかったのですか
まあだいたい親の意見でやってるが，親が曲げ物教えた人は，この部落にはいないと思う。私は聟に来たから埼玉や新潟へしゃもじをつくりに行ったが，根広の人はそんな人はいない。しゃもじには宮島という判を押した。

しゃもじの木は何が一番いいのですか　ブナの木だ。ブナ山へいくだい。ここにはないが，埼玉へ行くと国がぬくいので大きいブナの木がある。柾がよくないと割れないから細工しやすい良い木を選んだ。ミズブサというのがこっちにあるが，それもしゃもじには適当なんです。

中村信太郎氏

夏に材料をとるのですか
そうです。

木は払い下げですか
元締さんは入札でとったでしょうけれど，わしは雇われていたから出来高によって金もらった。しゃもじ1本で単価が決まっていて，1日の出来高によって精算したから腕のいい人はたんともらえた。

木を伐る時，山に1人でいるのですか　1人でやるのが当然だが，新潟へ行った時は友だちと共同で山をやった。稼ぎ高を同じにして。…同級生だから仲良くやった。

山仕事で山に入った時十二様をおまつりしましたか　毎月十二さん信仰して酒でも飲んでおまいりした。それに12日は木を切っちゃならない。草刈りの仕事はやっている。

人山では，木工をやるのに家で作るのですか　少し奥へ入った時は，小屋をかけてそこで木を切って作ったが，近所の時は通いで山どりして作った。(曲げ物などは)家でやっていた。大鍋かける火を燃やさなくちゃ出来ない。(そのほかも)冬の仕事だから家の中でやったもあるし，簡単に家の脇とかに小屋をかけてやった人もある。

山仕事というのは他にどんなものがあったのですか　炭が売れる時期は炭焼き，それから屋根板割った。屋根板は草津あたりで売れた。

お若い頃の農業はどのくらいだったのですか　水田はないですよ。1町は畑，2反は桑をした。あの当時はムギの冬作と，春になってそのサク入れにヒエ・アワ・キビみんな蒔いた。ダイズも自家用に蒔いた。

アワとヒエとどちらをたくさん作ったのですか　ヒエが主食でした。アワはもち米の材料だ。

オカボは作りませんでしたか　オカボは標高が高いからちょっとつくれない。朝鮮ビエはつくった。粉にしてだんごにして食う。ぬくいうちはうまい。

ヒエはどのようにして食べたのですか　ヒエはいったん釜でふかして干してから水車にかけなければ米にならなかった。それだから女衆の手がかかっただよ。カブを細かく切って煮といてそれにヒエ米を入れ"カブのヒエ米"にして食った。カブにいくらか甘みがあったので主食になった。

大根よりカブを多くつくったのですか　カブだね。

つくってはいけないというものはありますか　白根山の見えるところではゴマとサトイモはつくってはいけないと聞いている。今でもつくらないが，ゴマのかわりにイグサ(エゴマ)をつくる。これをつくらないからやってくんなといって昔の人は願をかけた。

ワラビの根を掘って粉にしてもちを作って食べましたか
おぼえがある。京塚にいる頃，矢の上というところへ"もち掘り"に子供の頃来た。(ワラビ粉は)ジャガイモの澱粉よりうまかった。それに中にすじがあるので，ワラビの根が売れた。植木屋さんが縛るのに使ったらしい。

その頃，今造林されているところは何だったのですか
根広の山なんぞは，原野のススキばっかりだった。

そのススキの生えている所はボクヤということになっていたのですか　国有地だからボクヤではない。ボクヤは他にあった。国有地のススキ原を造林した。

その頃，野火焼きというのはあったですか　ちょっとは覚えがあるが，昔は農作物を荒らすイノシシやシカのために"山やき"といって秋に火をつけて燃やした。昔はつっこくって，イモやソバを荒らしたらしい。

アワやヒエをつくっている時期は，鳥にやられるということはなかったのですか　野鳥もいるが，耕地が広かったので，影響がなかった。

和光原（わこうばら）　山本長十氏　明治44年12月6日生

明けの山本さんですか　いいえ，宵の山本です。年取の晩にきたから門松が飾れた。山伏が不動さんをしょって新潟から野反通って越してきたといっている。正月の飾りや餅はアケと変わらない。

今この辺木がみな植わっておりますが，お若い頃はどうだったですか　だいたいハタケにして使っていた。ムギだなんだつくる場をハタケという。

あらくをやったのはいつ頃ですか　昭和18年ごろからだ。食料難のときだ。ずいぶん広げたが最近又減った。(ヤキマキは)秋山じゃよくやってたが，群馬県じゃ聞かないな。山を焼くということにやっぱり国が許可を出さなかったし，みんなも山を焼こうと相談したことはない。ハタケだけで間に合った。(あらくは)みんな脇にころがし出しといてぶった。

ソバとかアワは蒔くというのですか　はい。豆もそうだ。

つくるというのは，何と何ですか　ムギ類やジャガイモ白菜や大根はつくるだな。(麻やイクサも)つくるだね。だいたい肥料は堆肥だけだった。

サトイモはつくらないのですね　ああつくらない。ゴマもつくらない。

ワラビの根を掘りましたか　はい。ハタケではなくて，ボクヤ(で採った)。あの辺(大原)段々になっているのはみんな掘った跡だ。掘っちゃ山にして斜面のところを掘るから掘った土が段になる。食うだけでなく，冬の仕事にみんな掘って根を叩いて粉をとったり，根を縄になったりした。それからワラビを干して売った。

現金収入になるのですね　そういうわけです。(値が良いのは)縄の方だ。

昔は田はなかったのでしょう　昔はあったが，水がよすぎて実が入らないから田はよした。若い頃にはあった。みんな清水だから(冷たすぎた)。(正月や盆の餅は)アワを使ったり買ったりした。

冬の間の仕事は何ですか　若いうちはワラビだが，それをよしてから木鉢をつくったり，しゃもじ削ったりした，家の中で。しゃもじつくりだのメンパ(曲げ物)つくりする人は出仕事に出たが，農業やっている人は出なかった。小屋をつくってやったよ。山でも家の近所でもそうした。四角くて上にカヤをかけて銘々でつくった。床は平らで，中で火をたけるようになっていた。(小屋は)そのままおいておく。(材料とりは)たいがい日帰りでやった。10月頃で雪の降らないうちだよ。(刃物は)みんな鍛冶屋でぶってもらった。(鍛冶屋は)村にはなかった。

山本長十氏

山に入って薬草をとるとか副業はありましたか　昭和18年頃，甘楽郡のかんべという人がやってみろというので2年くらいとって出したことがある。こっちでは山ホウズキというわけだったが，はて何といったか忘れてしまった。(キハダとかセンブリをとってくるということは)今はない。家で試しにつくっている。明治何年ごろか，あずまげんじゅうろうという人がやっていて，その人の持ってきて植えたシャクヤクがこっちにある。

昔の猟師というとだいたい熊とりですか　熊とばんどりだ。ばんどりは毛皮をとる。熊は毛皮と骨と，油は膏薬になったし，骨なんぞはみんな黒焼きにして粉にして傷薬にした。あかぎれにはみつろもいい。昔は専業に近い猟師が割にいたが，最近熊にかかれる猟師は少ない。クマ・タヌキ・サル・ウサギがトウモロコシや豆を食っちまった。ウサギは昭和12年の白根山の噴火で灰が降って食べるものがなくなって絶えてしまった。それまではひと冬終われば，120頭は針金のわなでとれた。みんな食べた。

ところで昔は，蜂蜜をとっている人もいましたか　ああそういう人もあった。わしも，昭和18・9年の頃，朝草刈りに馬でいって，桃の木に玉になってつるされていたのをつかまえて飼っておいた。それを3箱にふやして売ったら馬2頭買えた。目のいいうちは，箱とまさかり持って，しょっちゅう見つけに出て掘ってきたものだ。大きな木でウロのある木なら何でもいい。

どうやって蜜を出すのですか　大きな穴をあけて，おっかいてとる。木はまさかりで刻んでしまうから，もうその木に蜂が入ることはない。

どのようにしてさがすのですか　朝太陽の光がさした時日の当たらない黒いところに透かしてみると蜜蜂の飛ぶのが見える。ただ光る玉になって，他の虫とはちがって一旦飛びはねるとスィとまっすぐいくのでわかる。1日に3巣みつけたことがある。(花の咲いているところでは)そこへ行って蜜をふいておいて見ていると，ずっと道つくって巣へ行ったり来たりするから，それをたどっていくと巣がみつかる。

1つ巣をみつけるとどのくらい蜜がとれるのですか　(蜜の量は)まあ1年のいいウロで3升くらいだ。

蜜をとるのはいつがいいのですか　たいがい9月だが，冬にもずいぶん見つけた。冬みつけるには雪の中の窪ばかり歩くと，暖かい日に出た蜂が冷えて巣に帰れないで死んで雪の上に落ちてる。どっちの方から落ちてきてるかで巣がみつかる。

諏訪の原（すわばら）　中沢富士氏　大正２年６月１日生

どうして品木の村は谷底に集落があったのでしょう　信州の方から逃げて来た人が逃げ場がないのでここにいたというわけらしい。(信州との縁組は)おれの方にはないね。根広のあたりにはだいぶあったらしい。

中沢富士氏

諏訪の原は品木の耕地だったのですか　そうです。こっちに耕地があるのは２人しかいなかった。(この土は黒ボク土で)ノボウともいうし，クロノボウともいう。地味としては最底でしょう。台の上で黒ボクでないところはほとんどない。ひどい所は，20 cm黒ボクでその下は浅間砂利(軽石層)だ。野菜・オカボと，アワ・ヒエ・花インゲンは古くからつくっていた。でも堆肥を入れずに連作したらほとんどとれない。オカボは朝露が発生するので，干ばつの心配はほとんどなかった。

品木には昔つくらないものがありましたか　ゴマとサトイモは六合村中，白根山のみえる所はつくらない。白根さんがイモの皮ですべって，ゴマの木で目をついたからだといっている。ゴマの代用にイクサはつくる。品木と荷付場だけはキュウリもつくらない。

開墾はしたのですか　あらく掘るのはずいぶんやった。鍬で掘って，笹などは鎌で刈って焼かないで全部叩いた。(ヤキマキは)おれんちのおやじさんのおやじさんの頃の人がやったらしいと話しておった。(植林する前は)ナラ・クリの自然林です。(草刈り場は)春になると火入りといって山を全部焼いてしまった。焼かないと春いい草がでなかったり，害虫がでるとよく言っていた。(耕作ではなく)ただ草を刈るのに焼いたらしい。日影の雪がなくなるとやったと聞いている。

大原のような高台の平らな所に水が湧いているところがあるのですか　大原にはないが，ここ諏訪の原は湧いているよ。黒ボクの下に水道（みずみち）がきまっているらしい。(品木原の方は)水は全然ないです。だからダムになる時，品木原に行くことはないと思っていた。

水をハタケで使うのですか　自分でも飲むし，肥えと種を混ぜて"たねっこい"をつくるのに水をかついで来た。ヒエは間引きをしなければならないが，水を混ぜてやるとうまく散らばるので間引く時楽だった。たねっこいはハタケでつくったからそばに水が必要だった。

草刈り場はどこにあったのですか　品木原のむこうにあった。大半は国有地で，払い下げては草を刈った。下草というのは別で，冬馬にくれるために刈る場所は25町歩くらいです。野火がでて危ないというくらいススキが生えていた。

草刈りは堆肥をつくるためですか　そうです。(屋根のカヤは)カヤ刈り場といって，ずっと奥の方の別のところにあった。そこは火入れもしないし草を刈ってはならない。カヤを刈る為の留山です。

一頭の馬を飼うのにどれくらいボクヤが必要ですか　1町くらい。下草まで入れると３町くらいなくちゃだめでしょう。肥料もやらず刈るばかりだから，どんどん減る一方なので，次の年は刈るところを変えないとだめだった。(馬は)だいたい１軒１頭，小さい百姓で２軒に１頭飼っていた)。自分の馬を持っているというのは何人もいなかった。信州の馬喰から馬を借りていた。借り馬とかいっていた。１年借りると10円とられる。入山に5,6頭貸しておいて堆肥を運ぶ馬の必要な時に連れていってしまった。耕運機ができるまで借りた。１日１円にしかならない時代だったが，(買えば馬１頭)150円くらいでしょう。１頭一財産といっていた。

馬は農作業もやっていたのですか　農作業といっても田畑がないので荷物を運ぶ程度だった。荷付場から下の人は金があったから自分で馬を買った。戦争中炭を補給するため馬が必要だった。

ワラビの根から粉をとりましたか　わしはやらないがおじいさんの頃やったらしい。ワラビの話を知ったのは，ダムになる時２畝あるかないかの青い場所が地図に２ヶ所あったのでおやじさんに聞いたらワラビの根を山からとって来て根を叩くのに，ワラビの叩き場を明治19年の改正になる時つくったと聞いた。それにカヤを下草刈りに行くとワラビを掘った跡というのがよくあった。まっすぐに団子のようにあった。(ワラビは)石の上で木製の柄のついた槌で叩いた。秋掘って冬叩いた。叩いて出た汁を流してしまうと粉がとれないので，別にしながら叩いて桶の上で澱粉をとるしかけでやった。粉も食ったし，根は冬の間の女衆の仕事に縄をなって売った。(私が覚えてからは)なかった。戦争中はイモでずいぶん(澱粉を)つくった。

品木でも木工をやっていたのですか　品木では，おやじが下駄屋をやっていたぐらいでほとんどない。品木に２人だけです。入山じゅうに売った。それから草津の湯で湯下駄といってうんと売れた。他に薪を割ったり，炭焼きをおそわって草津へ売りに行ったとわしが子供の頃聞いた。

世立（よだて）　山本民兵氏　明治40年12月19日生

世立では外へ行って働くという人はいなかったのですか
昔はなかった。ハタケにでない人は山へ行って木鉢をつくるとか，炭を焼くとか椀木をとってくるとかした。（木工）などは生活の足しにした。そうしないとやっていけない。おれは山小屋でしゃもじつくりをした。18,9才頃から出て2,3年入った。しゃもじ・汁じゃくしと木鉢も少しやった。

山小屋は自分で建てるのですか　自分で建てる。中で仕事するのだから広くつくらなくてはならない。笹でかこんだそま小屋だ。おれは片品の藤原の方へ行って小屋をつくった。冬はできないから春早く行って雪の頃までいた。若い頃はうちのハタケなんか手伝わないで山にばっかりいた。うちには帰ってこない。

山に入ってむこうの木を払い下げたのですか　職人をつれていく元締さんちから，払い下げたのを売ってもらった。10人ぐらいで，みんな一緒に長屋式でやった。仕事は1人ずつ別にやった。自分で一生懸命やって出来高でやった。みんなしゃもじつくった。しゃもじはブナを使った。木鉢という人はいない。メンパは冬場うちでやった。

越後とか信州の方へはおいでになったことはないですか
信州雑魚川，秋山の方へ行った。（秋山の人たちは）日笠をこさえていた。

雪が降る前に降りてくるのでしょう　近所の山にいる時は，雪が降っても出ていった。歩けないほど降らないし，食料がいかないようなこともない。おれはちょっとすきがあればしゃもじ専門で山へ行った。

結婚してからも山に入ったのですか　近所の山へ小屋かけて泊まりでしゃもじつくった。2,3ヶ月入っていた。（結婚してからも）農業ばっかりできないから，しゃもじやったり炭焼いたりいろいろした。

しゃもじと炭焼きとどっちが金になりましたか　炭焼きは金にならなかった。

十二様の日はどうしましたか　（十二様の休みは）あった。10日も働きゃ休んだ。1ヶ月も2ヶ月も休むことがあった。そういうときは魚つりに行った。山には，女物の着物のきれでツギハギをした着物を着ていくこともいけなかった。

朝草刈りは青年の頃行きましたか　いや朝草刈りは男は刈らない。女仕事だから。女衆が馬ひいていった。馬に6束つけて1束自分でしょった。

山本民兵氏

じゃあ男と同じだ。近くの部落でお話聞いたら男衆がやっていましたよ。知っていましたか　知らない。でもこっちでは女衆ばっかりだ。入山の部落じゃどこも女だ。（女は）うちで百姓やった。（冬に）若い時は人一倍炭焼きの手伝いした。俵編んだり，袋に放りこんだり，運搬もやった。木工はやらなかった。（おばあさんの発言）

入山の衆とずっと長野県に近い方の衆はあまり昔は行き来がなかったものですか　昔はなかった。暮坂を通って小雨に出た。役場は小雨にあったから。この川沿いの道はこの間できた道だ。

山本さんが子供の頃，ほかの部落の子とは遊びましたか
引沼に学校があったから。

民兵さんはこの土地の人ですか　はいそうです。

奥さんはどこからきたのですか　やはり近所です。

秋山の方と縁組はありましたか　秋山から来たという人は話に聞かない。

世立の土はどんな土ですか　上の方はノボウ土で，（耕作に）かかるには楽だが，穫れない。下の方の土は，真土（まつち）といって石があって堅いが，大ごとして一回つくれば，（ノボウより）収穫がよかった。

引沼（ひきぬま）　山本　碧氏　明治45年5月18日生

引沼には沼のようなものがあったのですか　今の中学校の所に，大きいものではなかったが浮草などあって水が真青で深い沼があった。今は弁財天の社がある。

引沼で一番戸数の多い時はいくつぐらいありましたか
29,30戸程度だ。

こちらの山本さんは明けの山本ですか　そうです。門松をたてない方です。戦さに出ておせきとりの晩に帰れず，翌日の明け方に帰ってきたので，おまつりができなかった。

山本さんは農業をおやりになったですか　はい。若い時は田んぼもだいぶやりました。2反歩くらいです。（水田は）おもだった人が10軒くらい楽しみにつくっていた。その頃にすれば，この辺では引沼が一番田が多かった。大正時代（の頃）です。（それ以前田んぼは）なかった。

水田耕作のお話をして下さい　（水まわりは）山田で水もちが悪いので1日2回は行かなければならなかった。アゼから横に漏るので（造成時に）アゼの内側を木のかけやで叩いて固めて，又外側から叩いた。この辺では水口といって水を入れる冷たいところがある。田には夜水を入れて昼水口を止めて日光で水を充分暖めて，また夕方行って夜水を入れるという具合です。水の入る道に曲がり目を3本くらいつけて水をぬるめて本田へ入れた。まわりをつき固めた素掘りの堀で，巾は2尺くらいです。湿地の回りにつくった田んぼは，山の手にぬるみ（ぬるめ）という溝を掘って沢へ水を抜いた。そうそう，その時，今くろねりと言っているが，鍬や馬で耕していた。段々の田で小さいので10人くらいが行ったり来たりすれば終わりだ。段々は大八車で土を出して人力をつくった。

山本　碧氏

収穫量はどうでしたか　あの時分は今に比べれば半分くらいでしょう。食うためというより半分自慢のようなところがあった。戦後，米が配給になってから段々田で大事するよりはとやめてしまった。収穫量も少ない。

昔はほとんどハタケの農業でしょう　はい。でも自給はできなかった。秋収穫したものが来年ムギがとれるまで足りるという家は少なかった。だから他から工面した。

ハタケではどんな作物がとれたのですか　ヒエ・アワ・朝鮮ビエ・ソバ・イグサ(エゴマ)など自家用に何でもつくった。

作物をつくるというのですか，蒔くというのですか　ほとんどつくるといいます。

ゴマとサトイモをつくらないと他の部落で聞きましたが…　そうです。それはずっと昔からあります。

ヤキマキということをなさいましたか　ヤキマキの覚えはないが，ササベエ(笹灰)といって笹の葉を山へ行って1日刈って燃やして，それをスゴという入物に入れて肥料につくった。ソバなどには適していた。国有林(の管理)がやかましくなって火をたけなくなってやめた。昭和の初め頃までだ。(国有林の使用は)以前はたいしたことなかったが，その後(うるさくなって)民有地でやるようになった。でも明治9年当時1銭か2銭の地券が買えなかったり，個人地にすると問題が多いというので，その民有地についてもあまり欲がなく，少なかった。

山本さんは山仕事に入ったのですか　私は，しゃくしなど少しやりました。先祖もやって来たので道具もあった。木には青木と雑木があって，メンパはマツ・サワラなど常緑樹，しゃくしはハンノキなどの雑木を使った。だからメンパをつくる人は青木師，しゃくしなどをつくる人は雑木師という呼び名もあった。(木鉢は)私もつくったが大きい木が必要なので材料が限定されて大変だ。専門にやる人はいなかった

木工には道具が多く必要ですね　そうです。だから自分の好いている分野でやるのです。しゃくしをやっている人が多いのは，大きい木が少なくなって材料がそろわないからでしょう。(鍛冶屋は)村内にはいなかった。

薬草をとって売るような人はいましたか　ずっと昔は自家用にはとったが売る人はいなかった。ダイオウレンなどは曲げ物の材料をとるついでに苗場山あたりで採ってきたらしい。

熊倉　山村正夫氏　大正７年９月１５日生

お生まれはどこですか　多野郡上野村大字新羽です。(熊倉へは)昭和35年4月19日入植した。

入植のきっかけは何ですか　県の農政事務所の募集を聞いて応募した。隣りに会社はあるし，国有林で材木の仕事ができると思った。最初は7世帯だった。

最初にここに来て，この平らな土地や黒い土をみてどう思いましたか　日あたりは早いし，どうしてこんないい所に人が住まないのかと思った。土は石がなくていいと思ったが，多野と土層が反対で，上が黒くて下が赤いので，多野の方がハタケに肥料がある。

多野に住んでいた人がこの土を見たらいいと思うでしょうね　いいと思うでしょうね。

当時，熊倉は開墾してあったのですか　いいえ，まだモミとか雑木の株つがあった。それを手で伐って燃料にした。根は県からブルトーザーが来ておこした。(枝やボサは)その場で燃やした。(入植したとき)ここはカラマツ林を伐って3年目くらいで，径5cmくらいのミズナラ(や白樺など)があって下草が生えていた。(クサビエも)ハタケにどんどん生えるので抜いた。

最初来た時，住居址の凹みはわかりましたか　開墾が始まったらかけらが出て，昭和37年に調査があった。凹みはずいぶんあった。全部で3,40はあったかな。水に近い方によけいにあったらしい。開墾して水量が少なくなったが，(湧水があって)水が出て川になっていた。凹みは，昭和36,7年頃，機械開墾が始まってなくなった。

最初のうち，何をハタケでつくりましたか　ダイコン，トウモロコシ，バレイショ，ソバ，ヒエ，花インゲンなどいろいろ試作的につくった。最初のうちは穫れた。(穫れ高は)多野ほどではないが，何しろこっちは面積が広いから。でも，そのうち穫れなくなった。たぶん病気が入ったんじゃないかと思う。堆肥をくれればいいのだけど，牛を飼っていたので堆肥はあったが，ハタケを広くするには足らない。(キビ・アワはつくってみたが)多野の方が(大きく)いい穂がでる。ヒエは牛にくれる為につくった。

何月ごろからハタケはできなくなりますか　11月初旬，収穫が終わっておわりだ。花インゲンはへたすると1回雪にふられる。(11月初旬で)雪はバラバラ来て11月中旬になるとどんどん降る。(雪があるのは)11月から4月15日くらいまでだ。2月が一番だが積もるのは40cmくらいで，積もるより吹雪でたまるのがすごい。

山村正夫氏

動物なんか出ましたか　クマもシカも出た。モロコシをつくるとクマに食われるので開墾ででたカヤを燃やしておいたら火にあたって食べてた。火のそばにクマの足あととお尻のあとがついていた。1晩くると2反くらい実の入ったいいところを食ってしまう。ムジナ(笹グマ)も来た。昼間でも来てモロコシを食う。花インゲンの実はハトにやられる。キジ・ヤマドリはマメを1つずつ，つついて食う。

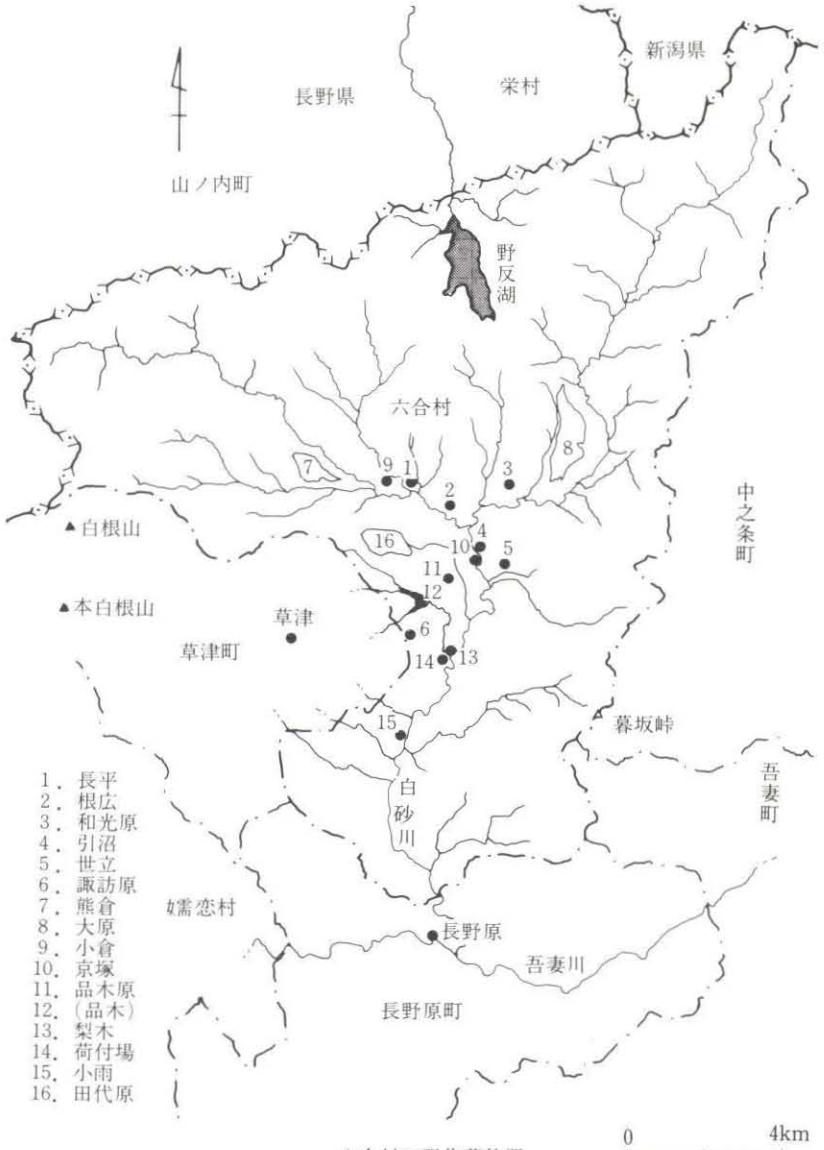
冬は林業ですか　昭和40年までは鉱山で石を掘ったり搬出したりした。道路の舗道ほりもやった。最近はいけ花材料のアカッツル・メブキをとってくる。

ワラビはとりましたか　来たときはワラビがたくさんあって草津へ売りにいった。旅館で山菜として出す。朝3時半から8時ごろまでで10貫目くらい採った。精耕検査が厳しくて昼間は農業やって，現金収入をワラビでとった。(そこは)植林する前は小倉の人のボクヤだった。カヤや草を燃やしてワラビが出やすいようにしたらしい。

多野ではどんな農業をやっていたのですか　ヤキハタをやった。夏刈りといって夏刈って干して火をつけた。アラクともいった。最初ソバ・2年目にアワ・ヒエをつくってだんだんジクバタにして棚につくってコンニャクを植えた。多野の土は，真土という赤っぽい粘土質の土で，石がだいぶあるが，地力があってマメだのアズキだのには肥料はいらない。だが，でき高は少ないし，ハタケは斜面で作業がきつかった。

農業やる場合，多野とこちらとどうですか　穫れなくてもこっちは広いからいい。ハタケが庭みたいですぐにいける。台風と冷害がなければ，(熊倉も)穫れる。高台のここと田代原は霜でやられる。

今ふり返ってここに来てよかったと思いますか　年とるまではいいところです。年とってからは医者にいったりするのが大変だ。



六合村の現集落位置

コメント

民俗調査からみた六合村の風土と熊倉遺跡

調査は，熊倉遺跡の性格解明を目的として，入山地区で実施した。9・10世紀に限定される熊倉遺跡の一時的な集落占地の意味を解明するには，この地域の風土を明らかにすることが不可欠だったからである。

六合村は，吾妻川沿いの各町村からは隔絶した地帯にあたっている。その名の通り，入山村，小雨村，太子村，日影村，赤岩村，生須村の6つの大字が明治33年に合併してできた。現在白砂川沿いにある幹線道路は，近年の野反湖の開発によって貫通したもので，それまでは入山の人たちが小雨に行くには，ぐるりと東へ回って暮坂峠を越えたという。合併した6村ではあるが，最も奥地にある入山は，

他の5村とはさらに隔絶された村であった。

入山の中でも，各部落の交流は少なかった。特に女性は他の部落については何も知らない。世立の山本民兵夫妻は今だに，朝草刈りは女のする仕事で，他の部落の人もみなそうしていたと思っている。交流が行なわれるようになるのは，小学校ができてからのようである。さらに山村の近代化は第二次大戦による出征での外部接触が大きく作用していることも印象深かった。

ダムに沈んだ品木の部落から諏訪の原に上がった中沢富士氏は，品木が谷底にあった理由を，信州から逃げてきた人が隠れ住んだのだと話してくれた。これは落人伝説で，人々が他所から移り住んだことをうかがわせる。また“明けの山本・宵の山本”の伝説は，いつ山に来たかを物語る話として興味をひくものである。しかし，これらの伝説は，白根山信仰によるといわれる禁忌作物の成立などとともに，それがいつごろ発生し，どう変質して今に至っているかがわからない。熊倉遺跡の性格解明のための直接的な資料にはなり得ないだろう。もし，これらの伝説や信仰に歴史的な継続性があれば，それは，遺跡の分布に関連して考証され得るであろう。

入山の農業はハタケ志向である。思っていたよりもハタケが多い。その大部分は傾斜地の段々畑であるが，大きな家には一町歩もあった。焼畑の存在は確証が得られなかった。木を伐採し耕地を開拓する作業はあったが，ほとんどが「あらく」であり定バタ化を志向している。これは土地の大部分が国有林になり山を自由に焼けなくなったという事情から焼畑が残存していないとも考えられるが，むしろ焼畑をしなくても定バタ化できる土地があることに起因しているのではないか。

入山の人は，土壌を「黒ボク土」と「真土（まつち）」とに区別している。黒ボク土は火山性の土壌で酸性が強く，作物をつくるのには適さない。熊倉や諏訪の原など高標高の平らな地形を厚く覆っている。真土は，茶色の堅い粘土質の土で，石も混じっており，斜面に集中して分布する。現在の入山の部落が斜面に集中するのは，たとえ広く平坦な土地であろうとも厚い黒ボク土の堆積地よりは，傾斜地で，石も混じっているが段丘崖の真土の所を経験的に耕地として選んでいるからではないだろうか。黒ボク土は，ノッポ土・ノボウと称されて，耕作不適土の代名詞になってもいる。これに対して，真土は定バタにできる地味なのである。

厚い黒ボクの酸性土壌のために人が住まなかった熊倉の地に戦後入植した人たちがいる。山村正夫夫妻は，入植当初「どうしてこんな平らないい所に人が住まないのか」と感じたという。山村夫妻は多野郡上野村の出身で，そこでは急な傾斜地で“焼畑”（これも定バタ志向で，本来「あらく」であろう。）をしていた。広い平坦地を有する熊倉では，いきなりハタ作を試みた。最初はよく穫れたが，数年で穫れなくなったという。これを夫妻は，病気が入ったためと考えているようであるが，開拓当初の山林焼き払い作業が，まさに“焼畑”としての効果をあらわしたものの，数年で失なわれた結果といえよう。現在はこの収穫減を金肥の投入で手当しており，反当り収穫量の少なさを耕地面積の広さでカバーするという粗放的農法をとっている。さらに，熊倉の地が農耕不適な理由がもうひとつある。高台で日当たりの良い平坦地ではあるが，ひとたび霜にあうと作物は甚大な被害を受けることになる。霜害から逃れるには，谷筋への移動しかない。

終戦後のような大規模な計画的な入植でなく，古代に人々がこの平らな土地に住みはじめたらどうだっただろうか。熊倉遺跡の集落が，9世紀後半ごろの一時期に限定しているのは，この地味と気象条件によると考えられる。どこからか熊倉に移り住んだハタ作志向の集団は，日当りのよい平らな土地で農耕生活を始めるが，黒ボク土や霜害のためにハタケができなくなり，谷筋の真土のある斜面に移動したと考えられよう。

水田をつくるようになったのは新しい。しかも，それは軌道にのってはいない。戦後は，棚田で苦労するよりは配給米をと，やめてしまった人が多い。水田志向はほとんどない。また入山では，木工が冬の仕事として行なわれている。山本民兵氏や中村信太郎氏のように，元締さんに連れられて新潟や長野の山まで木工の仕事をしに行った人もいる。しかし六合村周辺には良好な材料（大木）がないということからも，入山の木工は広域に知られるような特産物という形ではないようである。作ったしゃもじに「宮島」の印を押していることからもそれが窺える。入山では，木工はわずかな現金収入のための生活に根ざしたものであった。本多春長氏も「それをやらなければ現金収入がないので，ほとんどの家で木工をやった」と言っている。それと同様な意識で，ワラビ採りも炭焼きも屋根板割も仕事にしていた。農業に依存する自給自足の生活の中でも，これらの産業は，あくまでも副業的存在なのであろう。六合村の木地仕事は，“杣人”のような職業集団を形成し得ていない。以上のように，六合村は山間地であるにもかかわらず比較的古くから広域なハタ作が営なまれていたと考えられよう。

今回の調査は，入山の風土を知ることによって熊倉遺跡の性格を解明することが目的であった。聞きとりによって得られた資料のうち，特に参考となるのは，黒ボク土と真土の地味の相違と，霜のおりる場所のちがいの問題であった。ハタケに適した地形と地味の違い，それに伴う局地的気象（小気候）の問題などは，六合村の内のさらに微小な地域性をうかがわせる大きな問題でもあった。そして，このことが熊倉遺跡の成立と断絶のプロセスを語るときに重要な一要素となるのである。（小島敦子）

熊倉遺跡
——山棲み集落の探究——

発行日　昭和59年3月31日
　　昭和60年3月31日　第2刷
編　集　市村勝美・山本清司
発　行　六合村教育委員会
　　群馬県吾妻郡六合村小雨577-1
印　刷　ほおずき書籍 株式会社